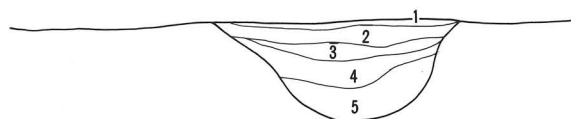


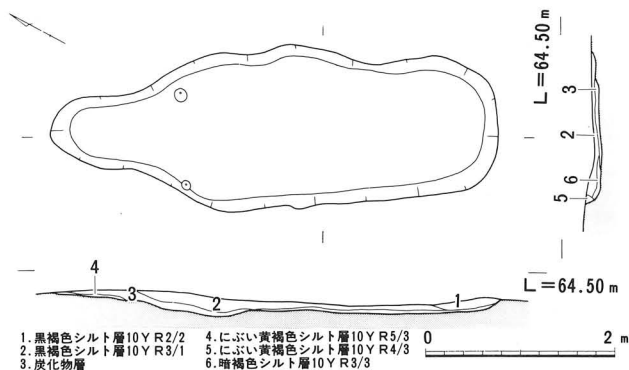
— L = 64.50 m

S D 1001土層断面図

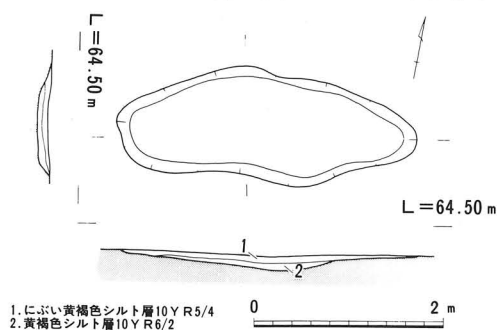
- 1. 灰オリーブ色シルト層 5 Y5/3
- 2. 灰オリーブ色シルト層 5 Y5/2
- 3. 黄灰色シルト層 2.5 Y5/1
- 4. 黄灰色シルト層 2.5 Y5/1
- 5. 灰色粘土層 5 Y5/1



第10図 S D 1001実測図



第11図 SO1001実測図



第12図 SO1002実測図

幅は広い所では3.9m、狭い所では1.2mと一定せず、深さも0.9mから0.3mとまちまちである。溝の断面はU字型で底には拳大の円礫が多量に混入している。遺物は、覆土中から平安時代頃のものと考えられる土師器の杯の小片が若干出土しているだけで、遺物だけからは正確な年代はあ

きらかにはできないが、B地区C地区共最下層の水田土壌が溝の埋土の上を覆っていることから、少なくとも水田が造成された時点では溝としての機能を停止していたものと考えられる。

炭窯 (SO1001) (第11図)

長さ約4.8m、幅1.7mの炭窯の機能を持つと考えられている浅い土坑で、一端は楕円形であるが、もう一端は尖りぎみに細くなって煙道を形成し、煙道と窯本体の境の底面に一對の小孔が認められる⁽¹⁾。上部を開田の際にかなり削平されていると思われるが、側壁及び底面は焼けて焼土が溜り埋土中にも木炭片が多量に含まれている。遺物としては、器壁が厚く胎土中に砂粒を多量に含んだ粗い刷毛目調整の施された甕と考えられる土器の小片が、少量ではあるが出土している。これは、刷毛目とか胎土の特徴から、平安時代に属するものとおもわれる。

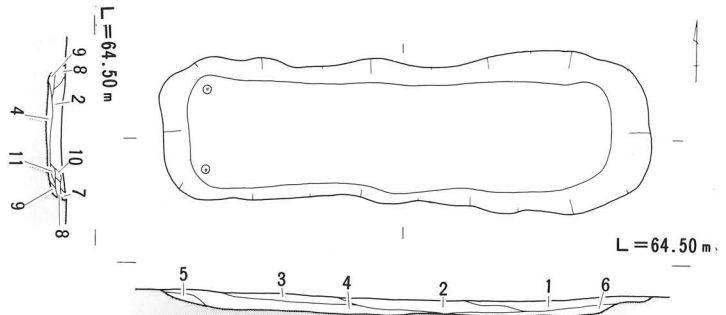
炭窯 (SO1002) (第12図)

長さ約3.2m、幅1.2mの不正楕円形で一端がやや尖りぎみの形状をした浅い土坑である。SO1001同様壁面は焼けて焼土が認められるが、埋土中に含まれる炭化物は少量で遺物の出土は認められなかった。

炭窯 (SO1003) (第13図)

隅丸方形のプランをもつ長さ約5.2m、幅1.8mの土坑で、埋土中には多量の木炭が含まれているが、その量は底近くなるほど多く、西側の縁には炭化物のブロック状の塊が認められ

た。また、側壁及び底面は著しく焼けている。S O 1001のような煙道は認められなかったが、北側の底面には1001同様一対の小孔が設けられている。

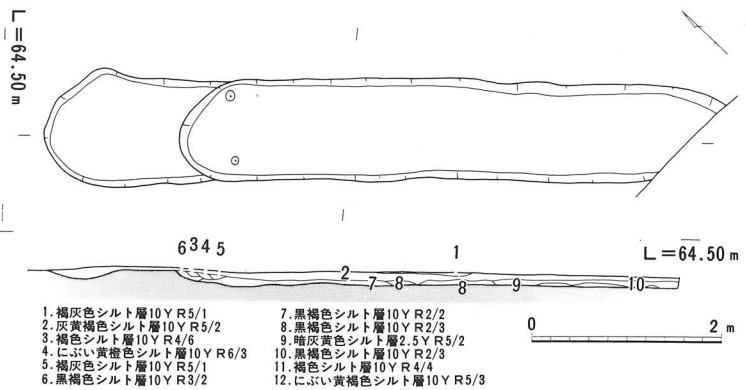


- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 1. 灰黄色シルト層10Y R2/4 | 7. 灰黄褐色シルト層10Y R6/2 |
| 2. にぶい黄褐色シルト層10Y R3/4 | 8. にぶい黄褐色シルト層10Y R6/2 |
| 3. 褐色シルト層10Y R4/1 | 9. にぶい黄褐色シルト層10Y R5/4 |
| 4. 黒褐色シルト層10Y R2/1 | 10. 炭化物ブロック |
| 5. 炭化物ブロック | 11. 灰黄褐色シルト層10Y R4/2 |
| 6. 黒褐色シルト層10Y R3/1 | |

第13図 S O 1003実測図

炭窯(S O 1004) (第14図)

一部がB区とC区の境に設けられたベルトにかかっているため全長は明らかではないが、長さ7 m以上、幅1.2 mの土坑で北西の縁が一段高くなりテラス状を逞し、これに接する窯本体の底面にはS O 1001、1003同様小孔が認められ



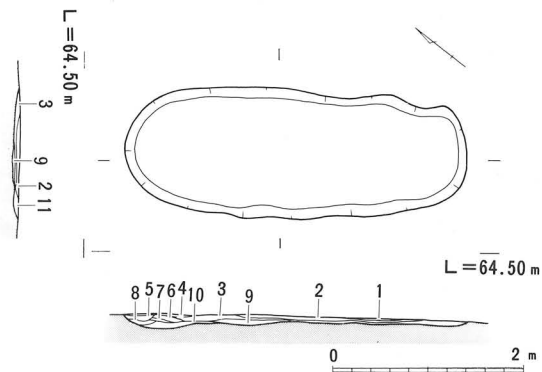
- | | |
|-----------------------|------------------------|
| 1. 褐色シルト層10Y R5/1 | 7. 黒褐色シルト層10Y R2/2 |
| 2. 灰黄褐色シルト層10Y R5/2 | 8. 黒褐色シルト層10Y R2/3 |
| 3. 褐色シルト層10Y R4/6 | 9. 暗灰黄色シルト層2.5Y R5/2 |
| 4. にぶい黄褐色シルト層10Y R6/3 | 10. 黒褐色シルト層10Y R2/3 |
| 5. 褐色シルト層10Y R5/1 | 11. 褐色シルト層10Y R4/4 |
| 6. 黒褐色シルト層10Y R3/2 | 12. にぶい黄褐色シルト層10Y R5/3 |

第14図 S O 1004実測図

る。他の土坑同様底近くでの焼土と炭化物の混入が著しい。

炭窯 (S O 1005)

S O 1004同様、遺構の大部分がB、C区の境界のベルトにかかっているため大きさは不明であるが他の土坑と同様の性格の遺構であろう。



- | | |
|-----------------------|---------------------|
| 1. 明黄褐色シルト層10Y R6/6 | 7. 黒褐色シルト層10Y R2/2 |
| 2. 褐色シルト層10Y R5/1 | 8. 暗褐色シルト層10Y R3/3 |
| 3. 褐色シルト層10Y R4/1 | 9. 黒褐色シルト層10Y R3/1 |
| 4. 灰黄褐色シルト層10Y R4/2 | 10. 炭化物ブロック |
| 5. にぶい黄褐色シルト層10Y R5/3 | 11. 黒褐色シルト層10Y R3/2 |
| 6. 灰黄褐色シルト層10Y R5/2 | |

炭窯(S O 1006) (第15図)

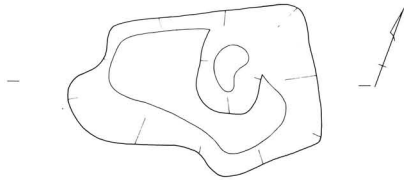
長さ3.6 m、幅1.4 mの楕円形に近い形態の土坑で、上部を大きく削平されているが、残った埋土の中には他の土坑同様炭

第15図 S O 1006実測図

化物と焼土の堆積が著しい。遺物の出土は認められなかった。

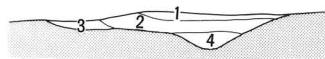
性格不明遺構 (S X1002)

S O1003の南側で検出された浅い不正形の長楕円形の土坑で、他の土坑と異なり埋土中に

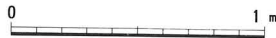


炭化物がほとんど含まれず、焼土もほとんど認められないことから一応炭窯と区別した。遺物は出土していない。

L=64.20 m ②第2遺構面の遺構と遺物



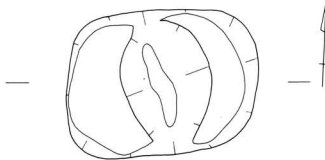
1. 黄灰色シルト層2.5Y5/1
2. 灰黄色シルト層10Y R5/2
3. にぶい黄褐色シルト層10Y R6/3
4. にぶい黄褐色シルト層10Y R5/3



B地区の第15層上面で検出された遺構と、その上に堆積していた谷状低地の中の埋積土中から出土した遺物である。

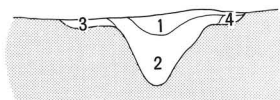
第16図 S K 2001実測図

土坑 (S K 2001) (第16図)



L=64.20 m

谷状低地東側の緩斜面から検出された不正形の浅い土坑で、底の一部が浅く掘り込まれている。埋土中に炭化物と焼土粒が多量に含まれている他は遺物の出土は認められなかったが、上部に堆積している第14層から出土している遺物が弥生時代以外のものが含まれないことや、隣接するS K 2002から弥生土器の細片が出土していることから、弥生時代に属することは間違いないものと考えられる。



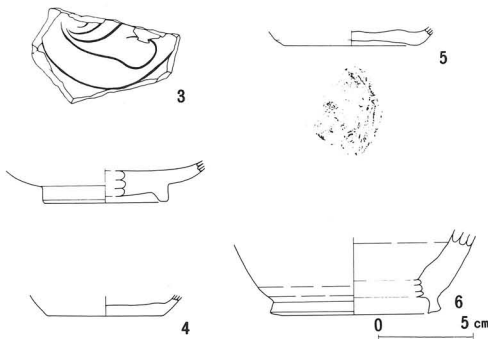
1. 黄灰色シルト層2.5Y5/1
2. 灰黄褐色シルト層10Y R5/2
3. 黄灰色シルト層2.5Y5/1
4. にぶい黄褐色シルト層10Y R6/3



第17図 S K 2002実測図

土坑 (S K 2002) (第17図)

S K 2001の北側で検出された長さ0.7m、幅0.6mの楕円形の土坑で、中央部にさらに一段深い掘り込みが見られる。S K 2001同様に埋土中に炭化物と焼土粒が多量に含まれ、細片ではあるが弥生土器が出土している。遺構の性格は不明である。



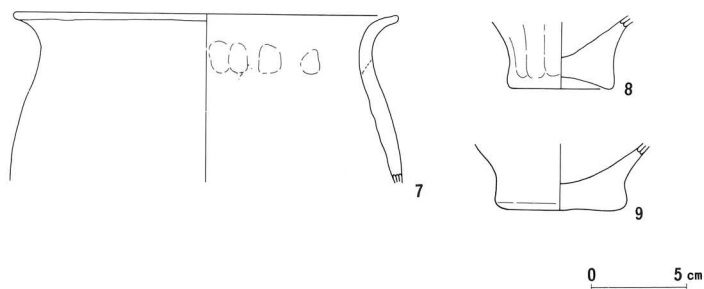
第18図 B・C地区出土古代・中世遺物実測図

③包含層出土遺物

古代・中世

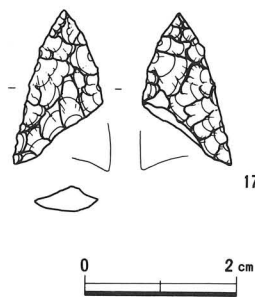
B地区の水田土壌最下層の第8層からは青磁碗と白磁皿が、また水田土壌直下の9層上面からは、底部切り放しに回転糸切り技法を用いた土師器の杯の破片と、須恵器の長頸壺の底部の破片が出土している（第18図）。青磁碗3は高台まで施釉されているが、畳付きと高台内部は露胎で、内面見込み部には片切り彫りによる幾何学文が描かれている。白磁皿4はいわゆる口禿とよばれているタイプである。これらは何れも13世紀後半から14世紀前半に多く出土するものである。

また、9層から出土した回転糸切り技法を用いた土師器の杯5は、回転糸切り技法が12世紀代に出現して13世紀に最も盛行する技法であると考えられること



第19図 B地区出土弥生土器実測図

から、平安時代末期から鎌倉時代前期のものと思われる。同じ層から出土している須恵器の長頸壺6についても、これ以前の9～10世紀代の年代が考えられる資料である。

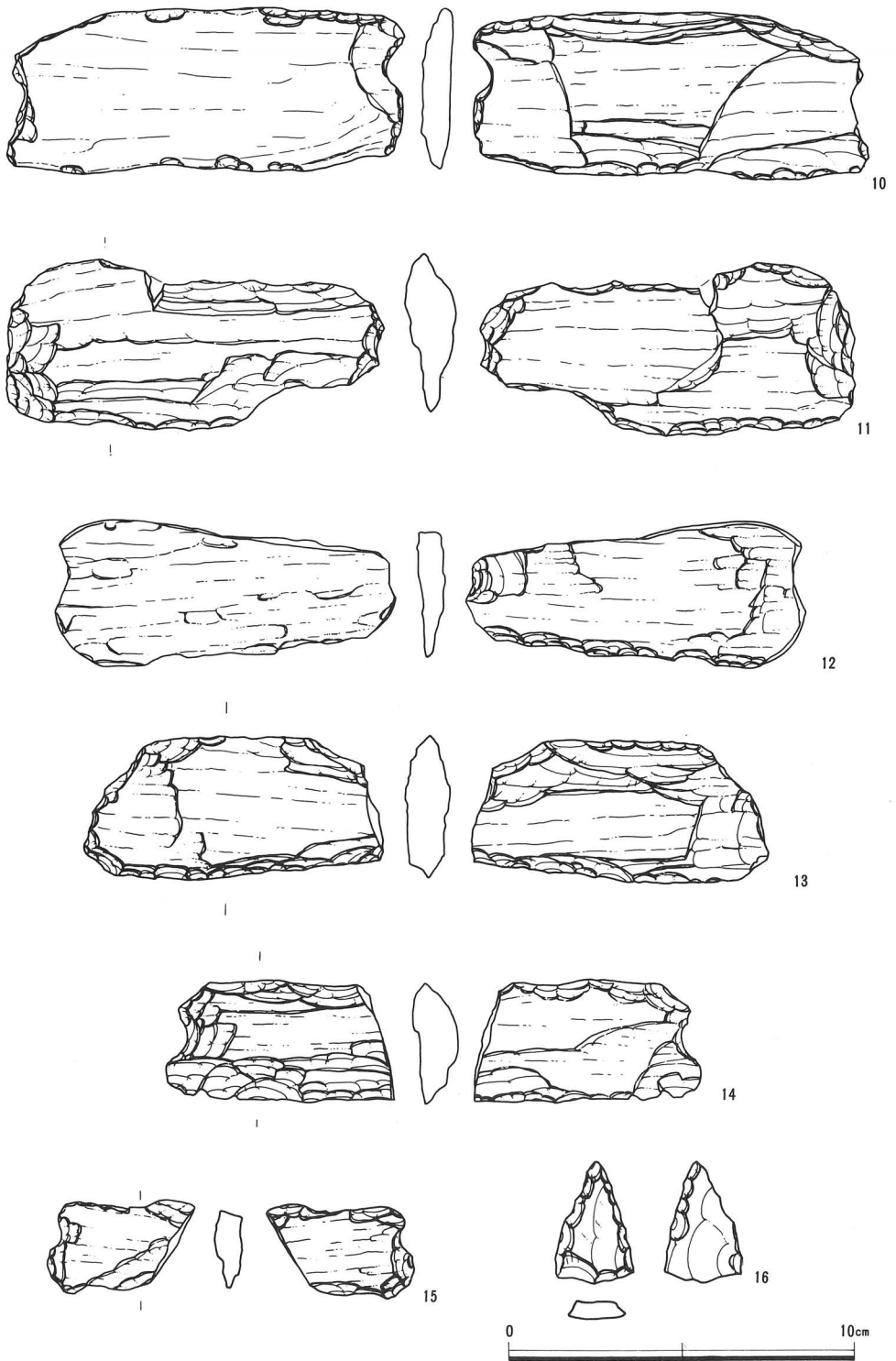


第20図 B地区第15層出土石鏃実測図

弥生時代

主としてB地区の谷状低地の中に堆積した第14層を中心に出土した遺物である。出土した弥生土器（第19図）はいずれも遺存状態が悪く、器形や文様をうかがえる資料に乏しい。

7は甕の破片であるが、器内外面とも風化が著しく調整方法は不明であるが、外反する口縁の内面には僅かに指オサエの痕が残されている。8、9は同じく甕の底部の破片で、8の個体には上げ底の底部がつき、外面は篋削りで調整されている。この他にも櫛描きの波状文が施された壺の破片が出土している。いずれも弥生中期に属するものであろう。この他の遺物として打製石庖丁と打製石鏃が出土している（第21図1）。打製石庖丁には何れも結晶片岩が用いられているが、形態的には両端に抉をもちほぼ方形の左右対象の形態をもつもの、同じく両端に抉が施されるが左右非対象の形態のもの、抉をもたないものの3種類に分類される。石鏃はサヌカイトの剥片の周囲に簡単な加工が施

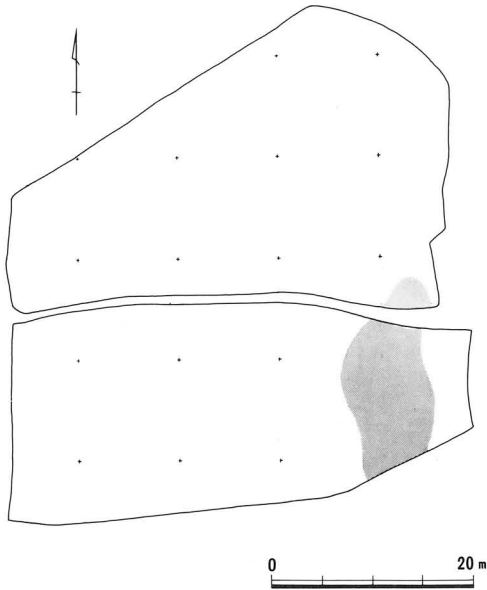


第21图 B・C地区出土弥生時代石器実測図

されたものなど、無茎のものを中心として出土している。

縄文時代

B地区の第15層上部から、条痕の施こされた縄文土器の小片が若干とサヌカイト製の石鏃が一点出土している。石鏃は長さ2.1cmの無茎式のもので全面に入念な加工が施されているが、片方の脚を欠いている（第20図）。

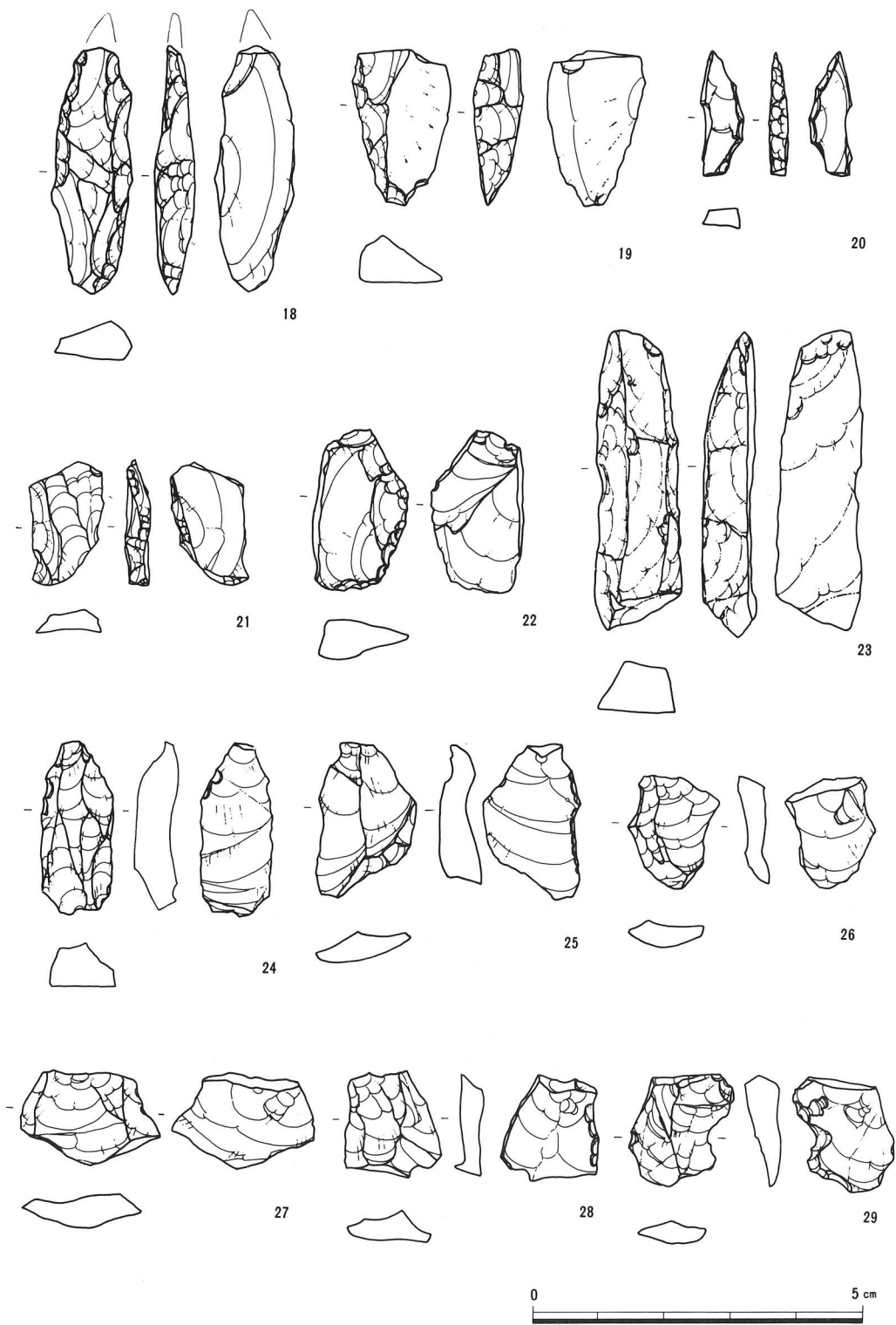


旧石器時代

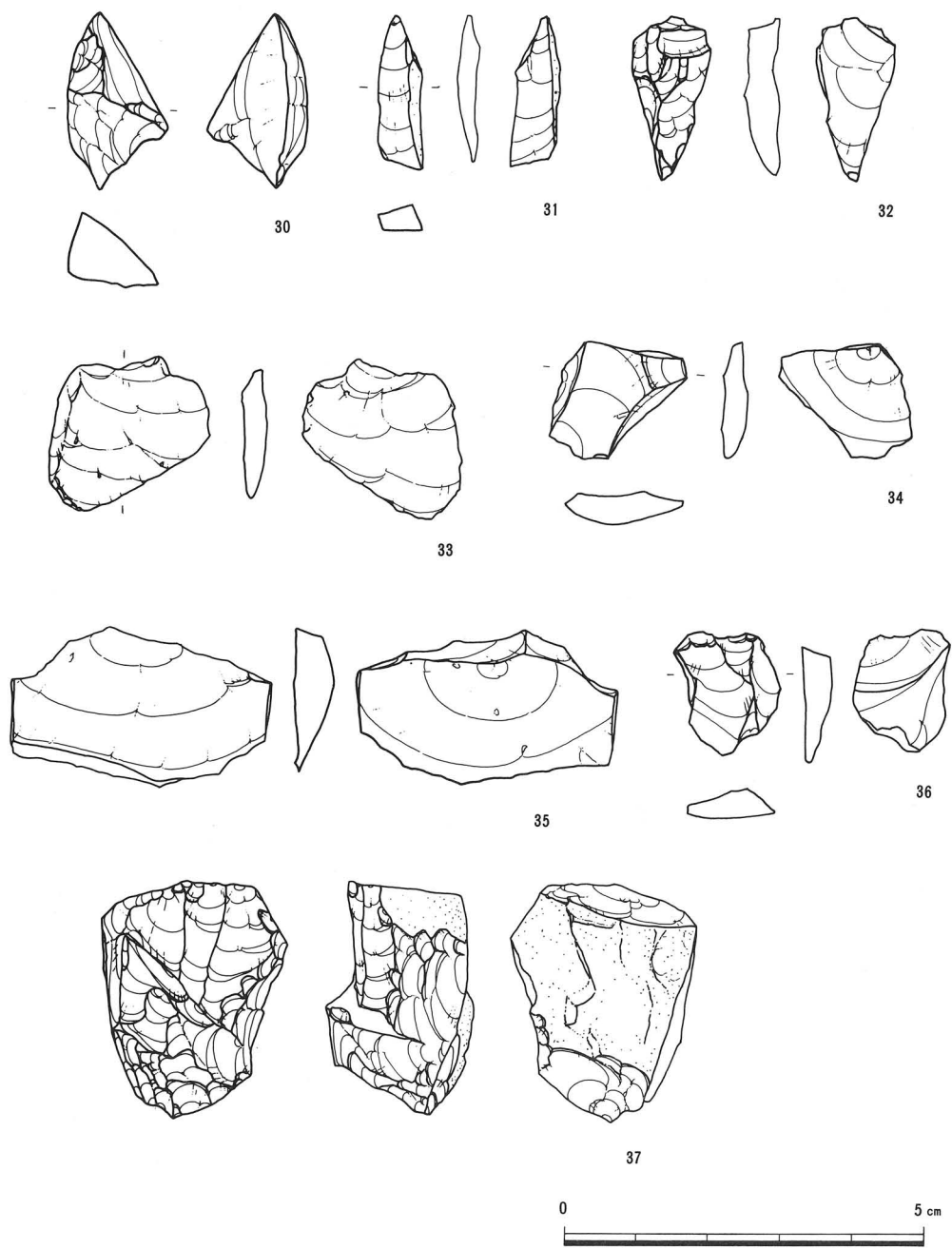
B・C地区に跨る東西10m、南北17mの範囲から少数ながら旧石器がまとめて出土した。遺物の出土した第15層は、調査区内を北東から南西にむかって緩やかに傾斜し、厚い所では20cmほどの堆積がある。遺物は総数42点と少なく、約半数がチャートを素材とする剥片によって占められ（第23図20、21、24～32）、他はハリ質安山岩（第23図22、第24図34、36）、サヌカイト（第23図18、19、23、第24図33、35）が用いられている。19は横長剥片を素材としたサヌカイト製のナイフ形石器で、身の半分を欠

第22図 B・C地区旧石器出土範囲略図

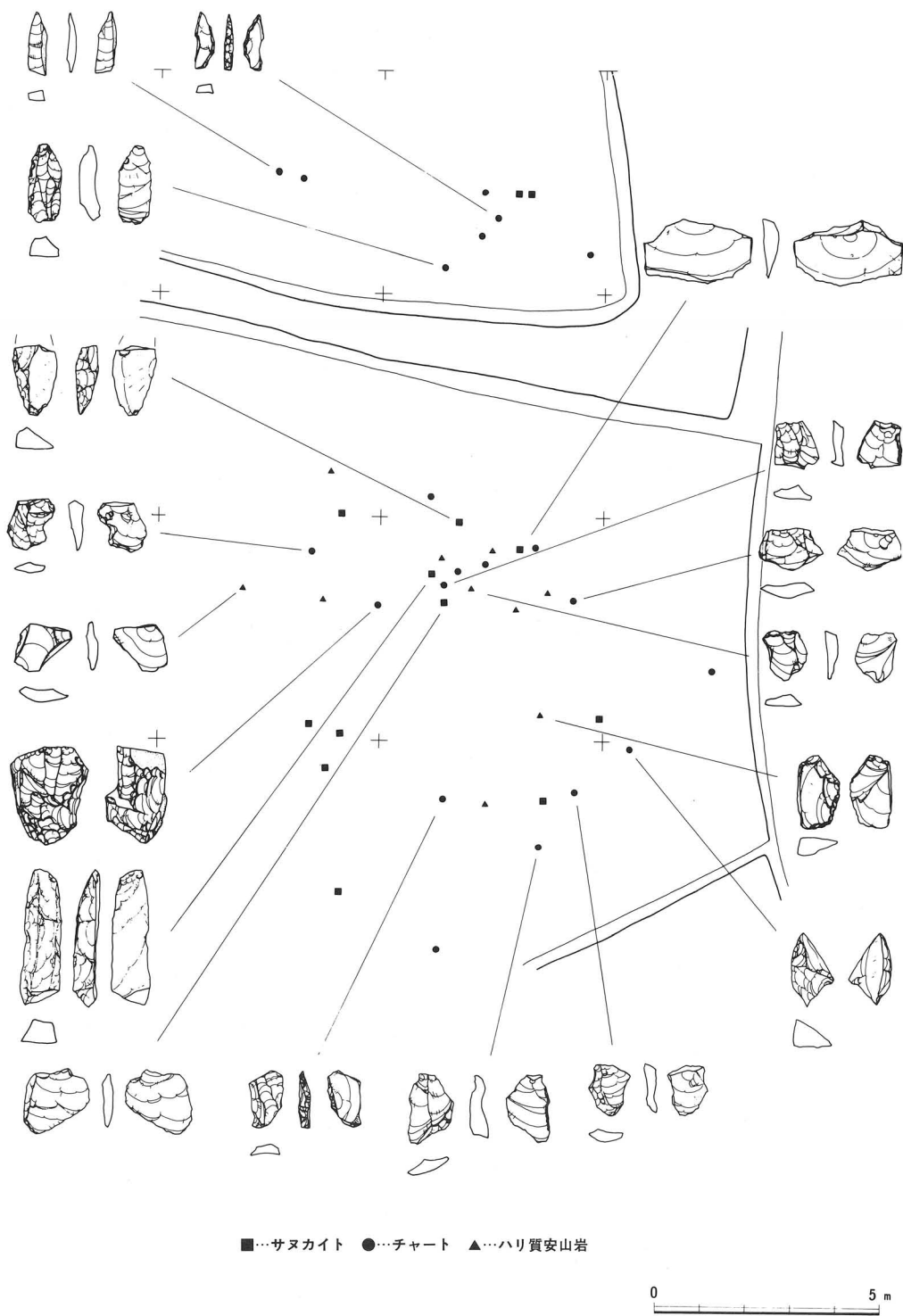
損しているが恐らく5cmに満たない小形のものであろう。調整は片側縁のみにほどこされている。B地区の弥生時代の包含層から出土した18のナイフ形石器も、横長剥片をもちいた同様の大きさのものであるが、調整が両側縁におこなわれている。20は同じく小形のナイフ形石器でチャートを素材としているが剥離の方向は明瞭ではなく、剥片の形状は縦長か横長か正確なところは不明である。片側の側縁を欠いているため全体の形状は不明であるが、残されたもう一方の側縁部への調整は両面からおこなわれている。22は、ハリ質安山岩の剥片の側縁部に簡単なリタッチを施しスクレイパーとしたものである。チャートを素材とした剥片は、縦長のもので横長のものに分かれ、いずれの剥片にも打面調整の行われているものと、全く行われないものが存在する。主剥離面と背面の剥離の方向は同一方向のものもあるが、中には20や21のように直行するものもあり一定していない。またその形態も、24のように石刃に類似する非常に整った形態の剥片もあるが、その多くは大きさや形状が不揃いなことが目立っている。これは、打面転移がさかんにおこなわれたためとも考えられる。調整は21の剥片に簡単なリタッチが施されている以外、明瞭な加工が行われているものはないが、使用



第23图 B·C地区出土旧石器实测图 (1)



第24图 B·C地区出土旧石器实测图 (2)



第25図 B・C地区旧石器分布図

痕と思われる刃こぼれは、ほぼ全ての剥片に認められる。ハリ質安山岩を素材とする剥片の形態もチャート製のものに類似しているが、使用痕の有無は不明である。サヌカイト製の剥片は横長の形態のものしか認められないが、中に1点だけ翼状剥片が出土している（第24図35）。石核はチャート製のもので1点出土している（同図37）。素材に角礫を用いた高さ3.4cmの小型のもので、背面と側面の一部に自然面を残している。片側の側面には、この礫の表皮を取り除く目的からか背面から調整剥離が行われているが、もう一方の面には正面方向からの剥離が認められる。打面は上下両端に設けられているが、剥片剥離に際しての打面調整は行われていない。石核正面には上設打面から3回剥片を剥ぎ取った痕が認められるが、石核を斜めに横断する節理面のため、何れも末端まで及んでいない。

4 まとめ

(1) 旧石器時代の石器群

今回出土した旧石器は数量的には42点と少ないものの、サヌカイト製のナイフ形石器1点以外は、同じ層からある程度のまとまりをもった状態で検出されたものである。使用された石材にはチャート、サヌカイト、ハリ質安山岩の3種類が認められるが、なかでもチャートが最も多く、全体の約半数をしめている。従来、徳島県下でも旧石器時代の遺跡が集中している吉野川北岸地域で発見される石器に使用される石材としては、そのほとんどがサヌカイト製で、チャートを素材とする石器を出土している遺跡としては、県南の阿南市廿枝遺跡だけであった。廿枝遺跡の石器については、報告者の天羽、立花両氏によって国府・宮田山段階の廿枝Ⅰ、井島1段階の廿枝Ⅱ、井島2段階の廿枝Ⅲの3時期に分けられた。その後、高橋氏によって資料の追加と再検討が行われ、年代観についても疑問が投げかけられている⁽²⁾。今回の資料を廿枝遺跡の遺物と比較すると、使用される石材がチャートを主体とすることや、出土したナイフ形石器も、廿枝遺跡の一点を除けば5cmにみえない小型であること、剥片に縦長横長の2種類が存在すること、石核、剥片ともに打面調整の行われない平坦なものが多く、剥片の主剥離面と背面の剥離の方向が必ずしも一致せず、打面が一定ではなかったことが考えられること、石核の素材として角礫が使用されていることなど共通する点が多い。しかし、金蔵遺跡では肝心のナイフ形石器の出土数が少なく十分な比較検討がおこなえない状態にあることや、一点ではあるが廿枝遺跡にはない翼状剥片が出土していることなど、異なる点も存在している。ただ、個々の遺物の出土したレベル差が最大40cm近くあることや、同じ層の上部に縄文時代の遺物が含まれていて層自体堆積の状況が不安定と考えられること、また、出土した数少ないナイフ形石器の類例を敢えて求めようとするならば、宮田山またはそれ以後のナイフに分類できるものと考えられ、この翼状剥片との共時性を疑える資料であることなどから、この一群の出土遺物をすべて同一時期に属するものと考えすることはできないと思われる。ともあれ、廿枝遺跡との類似点は指摘できるものの、正確な時期的位置付けなどについては今後の資料の増加を待たねばならないものと思われる。

(2) 弥生時代の遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、焼土溜り1基と性格不明の土坑2基だけで、住居跡などは出土しなかった。この扇状地上に立地する他の弥生時代の遺跡でも、一般的に住居跡をはじめとする遺構の検出数は少なく、遺構の密集する度合いが極めて低かったことが伺えるが、これには、水に乏しい扇状地という自然条件をぬきにして考えることはできない。今回の調

査でも、遺構の検出された場所が九頭宇谷川に面した緩斜面上や自然にできた湿地状の低地に隣接しているなど、比較的水を得やすい所に遺構や遺物が集中していることからその様な事情を推察することができる。もっとも出土遺物のなかに打製石庖丁が存在することは、生産活動のなかに、農耕の占める割合がかなり高かったことを伺わせるが、水稻耕作かそれ以外のものか興味をいだかせるところであろう。

(3) 古代、中世関係の遺構

B・C地区の水田土壌下の第1遺構面からは、溝状遺構と炭窯と考えられる土抗が検出されている。B地区では、この9層の上に堆積している水田面最下層の第8層から、青磁碗と白磁皿がそれぞれ一点ずつ出土しているが、それらは13世紀から14世紀代に位置づけられる遺物である。このことから、B地区の水田の造成された時期は少なくともそれ以降と考えるのが妥当だと思われるが、遺物の出土していないC地区の水田も、ほぼ同じ様な年代に位置づけてよいのではないかと思われる。このB地区の第1遺構面については、遺物が検出されているSD1001、SO1001で出土した土師器の破片が、いずれも平安時代くらいのもと思われることや、同じ第9層から出土した土師器の杯が、少なくとも12世紀代に出現し、13世紀から14世紀を中心に多用される回転糸切り技法を用いたものであることと、上層の水田面の年代が13～14世紀である事を考慮にいれると、その下限を12～13世紀頃までのものと考えておきたい。この場合、SD1001の性格であるが、この様な水に乏しい扇状地上に設けられた溝であることから、恐らく灌がいを目的としたものであったと思われるが、実際に確認された水田面は溝より後の時代のもので、その水田の時期にはすでに埋没してしまい、水利施設として機能していなかったと考えられる。ただ、この遺跡の北には、平安時代に築造されたと伝えられる浦池が位置している。もしこのSD1001の年代が正しいとすれば、この浦池と何らかの関係のもとに造られた水利を目的とした遺構の可能性も考えられる。

今回の金蔵～上井遺跡の調査によって出土した遺構や遺物は極めて少ないもので、年代的にも不確かなものがそのほとんどを占めている。しかし、今回の調査で新たに明らかにされた事も若干ではあるが認められる。特に、旧石器時代の遺物については、時期的にも量的にも不完全な資料ではあるが、従来、吉野川北岸地域で全く出土しなかったチャート素材とする石器群を検出することができたばかりでなく、県南地域でのただ一箇所のナイフ形石器の出土遺跡で、県内では他に比較する資料の全くなかった廿枝遺跡の遺物と関係づけられるものが出土したことは、今後の県内の旧石器時代の研究をおこなううえで、少なからぬ意義を持ってくるものと考えられる。

注

- (1) 炭窯の構造については菅原康夫氏の論考「遺物をもたない遺構」『徳島県埋蔵文化財センター年報V o 1. 2』1991を参照。
- (2) 天羽利夫、立花博両氏の論考については、天羽、立花「徳島県廿枝遺跡採集の石器」『古代学』16-1 (1969)、天羽「徳島県下出土のナイフ形石器・細石器」『徳島県博物館紀要』1 (1970) 天羽「徳島県の遺跡」『日本の旧石器文化 3 遺跡と遺物<下>』(1976) 雄山閣を、また高橋氏の論功は、「徳島県阿南市・廿枝遺跡の採集の石器再考」『旧石器考古学 29』 旧石器文化談話会 (1984) をそれぞれ参照。高橋氏はこの中で、和歌山県松瀬遺跡、壁川崎遺跡、大分県岩戸遺跡など廿枝遺跡に類似する遺跡をあげているが、その編年的位置づけについては明確な発言はおこなわれてはいない。

参考文献

- 地学団体研究会吉野川グループ「土成町の地形・地質と古生物」『総合学術調査報告土成』土成町阿波学会・徳島県立図書館 1990
- 天羽利夫・立花博「徳島県廿枝遺跡採集の石器」『古代学』16-1 1969
- 天羽利夫「徳島県下出土のナイフ形石器・細石器」『徳島県博物館紀要1』 1970
- 天羽利夫「徳島県の遺跡」『日本の旧石器文化 3』 遺跡と遺物<下> 1976
- 高橋正則「徳島県阿南市・廿枝遺跡採集の石器再考」『旧石器考古学 29』 1984
- 徳島県教育委員会「土成町北原遺跡」『内陸工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 1988
- 徳島県教育委員会「土成前田遺跡」『県道舟戸切幡上板線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 1989
- 菅原康夫「遺物をもたない遺構－伏焼木炭窯に関する予察－」『徳島県埋蔵文化財センター年報V o 1. 2』 1991

第1表 出土遺物観察表 1 (土器)

番号	器種	法量	形態	胎土焼成	出土地点	備考
3	青磁椀	底径6.7cm	高台の高さは0.9cm 高台畳付及び内面は露胎	釉の色は緑灰色	F-5	
4	白磁皿	底径6.1cm	体部は斜上方に直線的に立ち上がる 釉は底部まで施こされる		G-2	いわゆる口禿げ皿
5	土師器杯	底径7.2cm	底部からやや内穹気味に外上方に立ち上がる	橙色	G-5	底部切り離しは回転承切り技法
6	須恵器壺	底径9cm	底部からゆるやかに内穹しながら外上方に立ち上がる	灰白色		
7	弥生甕	口径20.5cm	肩部に最大径をもっと考えられ口縁部はゆるやかに外反する	径1~2mmの礫を含み焼成不良	F-7	
8	弥生甕	底径5.8cm	底部付近でわずかにくびれる 強いあげ底の土器	径1~3mmの礫を混入する	F-7	
9	弥生甕	底径7cm	底部付近でわずかにくびれる 平底の土器	橙色で焼成は不良	F-7	

第2表 出土遺物観察表 2 (石器)

番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	出土地点	備考
1	打製石鏃	2.5cm	1.8cm	0.4cm	1.6g	サヌカイト	V-18	断面に自然面を残す
2	石棒	39.3cm	12cm		9,500g	緑色片岩	V-19	自然の転石を利用
10	打製石庖丁	11.5cm	4.7cm	0.7cm	69g	結晶片岩	G-7	片面に自然面を残す
11	打製石庖丁	10.8cm	4.7cm	1.3cm	74.8g	結晶片岩	D-7	
12	打製石庖丁	9.8cm	4.3cm	0.7cm	39.7g	結晶片岩	H-7	側縁部に自然面を残す
13	打製石庖丁	8.5cm	4cm	1.2cm	60.8g	結晶片岩		
14	打製石庖丁	6.6cm	3.3cm	1.3cm	39.4g	結晶片岩	I-6	片面に自然面を残す
15	打製石庖丁	4.1cm	2.6cm	0.7cm	12.7g	結晶片岩	F-8	
16	打製石鏃	1.8cm	1.1cm	0.2cm	0.5g	サヌカイト	F-6	周縁部にのみ調整が加えられる
17	打製石鏃	2.1cm	1.4cm	0.3cm	0.4g	サヌカイト	G-9	全面に入念な調整が加えられる

番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量(g)	石質	出土地点	備考
18	ナイフ形石器	3.7cm	1.2cm	0.6cm	2.6g	サヌカイト	J-7	弥生の包含層より出土
19	ナイフ形石器	2.3cm	1.4cm	0.7cm	1.9g	サヌカイト	E-9	
20	ナイフ形石器	1.9cm	0.5cm	0.3cm	0.9g	チャート	F-9	
21	剥片	1.9cm	1.2cm	0.3cm	0.9cm	チャート	C-9	側縁の一部に調整が加えられる
22	スクレイパー	2.5cm	1.5cm	0.5cm	2.2g	ハリ質 安山岩	D-9	
23	ナイフ?	4.6cm	1.4cm	0.8cm	6.3g	サヌカイト	D-9	
24	剥片	3cm	1.1cm	0.6cm	2.1g	チャート	F-9	側縁に使用痕が認められる
25	剥片	2.4cm	1.5cm	0.6cm	1.8g	チャート	C-9	側縁に使用痕が認められる
26	剥片	1.8cm	1.2cm	0.5cm	0.9g	チャート	C-9	
27	剥片	1.4cm	2.2cm	0.5cm	1.8g	チャート	D-9	側縁に使用痕が認められる
28	剥片	1.7cm	1.5cm	0.5cm	1.2g	チャート	D-9	
29	剥片	1.7cm	1.3cm	0.6cm	1.3g	チャート	D-8	
30	剥片	2.4cm	1.6cm	1.0cm	2.0g	チャート	C-10	
31	剥片	2.1cm	0.5cm	0.3cm	0.5g	チャート	F-8	
32	剥片	2.2cm	1.1cm	0.8cm	1.4g	チャート	E-8	
33	剥片	2.0cm	2.2cm	0.3cm	1.9g	サヌカイト	D-9	
34	剥片	1.2cm	2.1cm	0.5cm	1.2g	ハリ質 安山岩	D-8	
35	翼状剥片	3.7cm	2.2cm	0.5cm	4.0g	サヌカイト	D-9	
36	剥片	1.2cm	1.8cm	0.4cm	0.9g	ハリ質安山岩	D-9	
37	石核	3.4cm	2.5cm	2cm	16.8g	チャート	D-9	素材に角礫を用いる

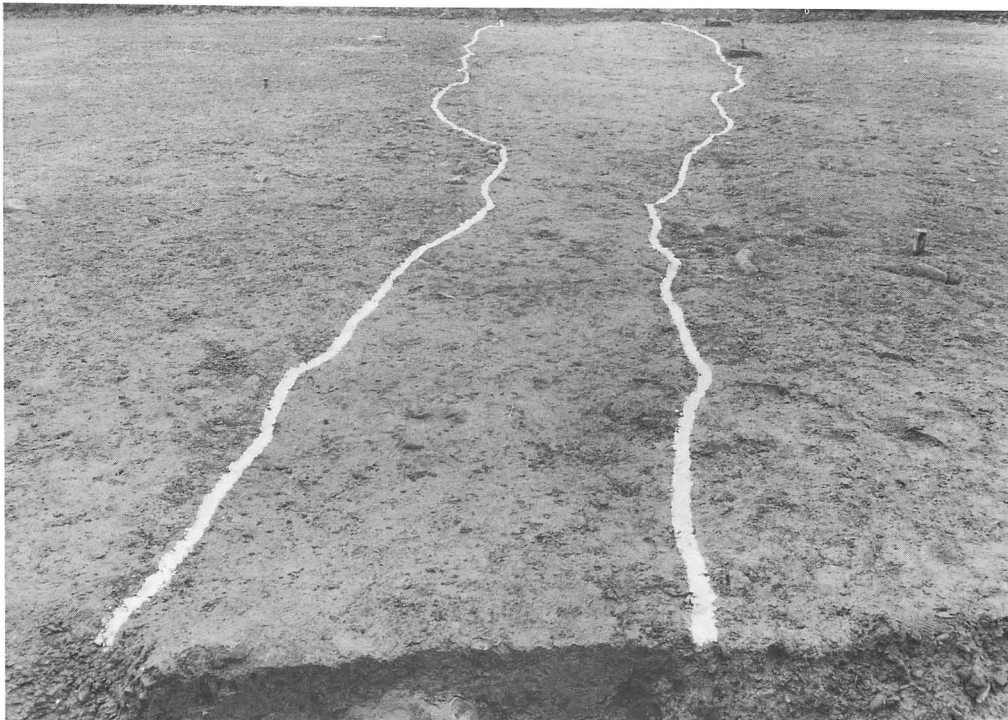


金蔵～上井遺跡調査区遠景（南東より）

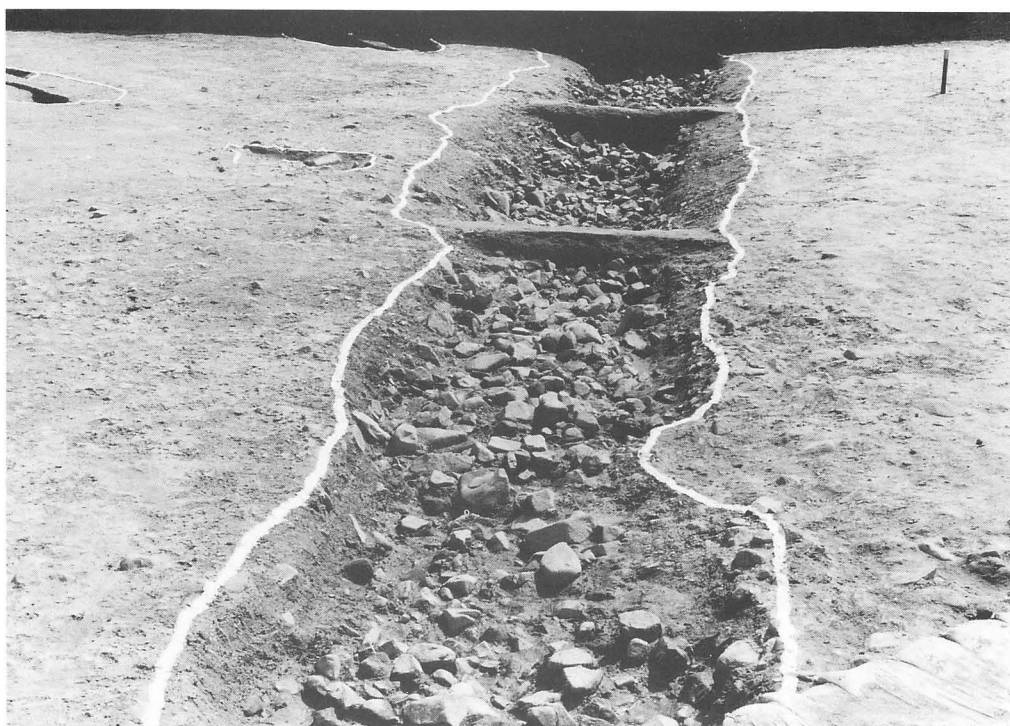


発掘調査風景

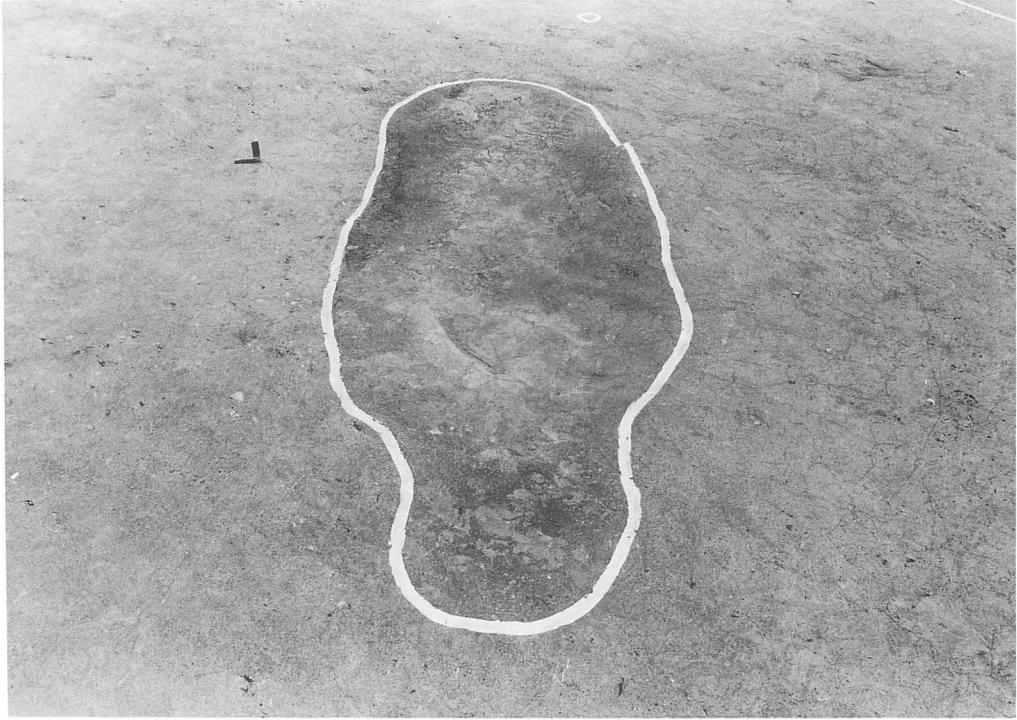
図版 2



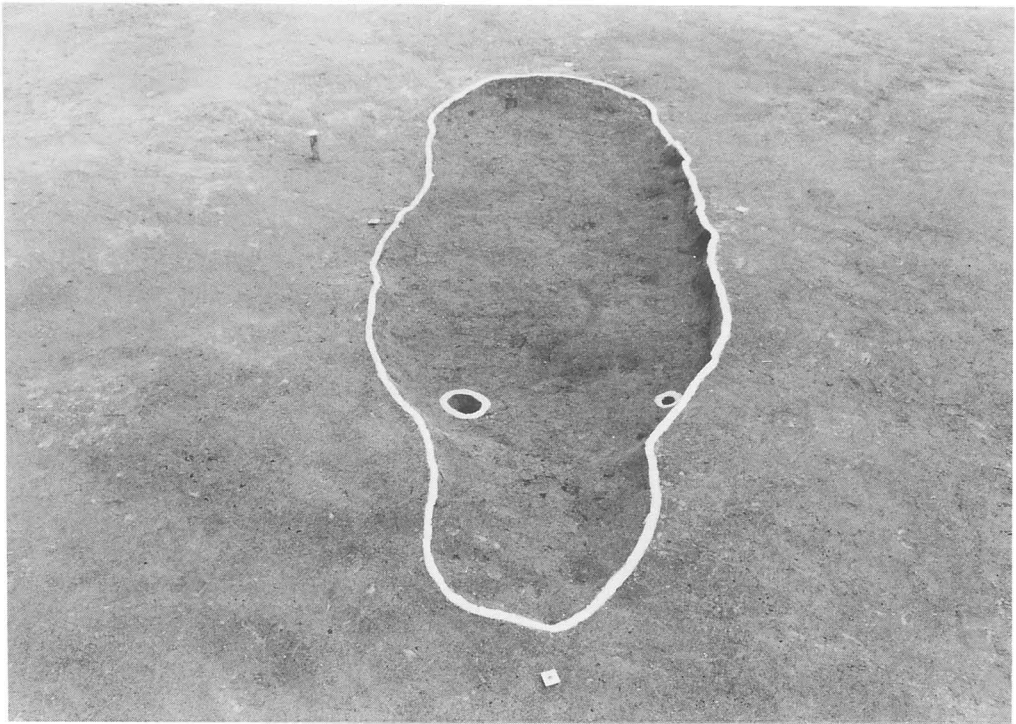
S D 1001検出状況



S D 1001完掘状況

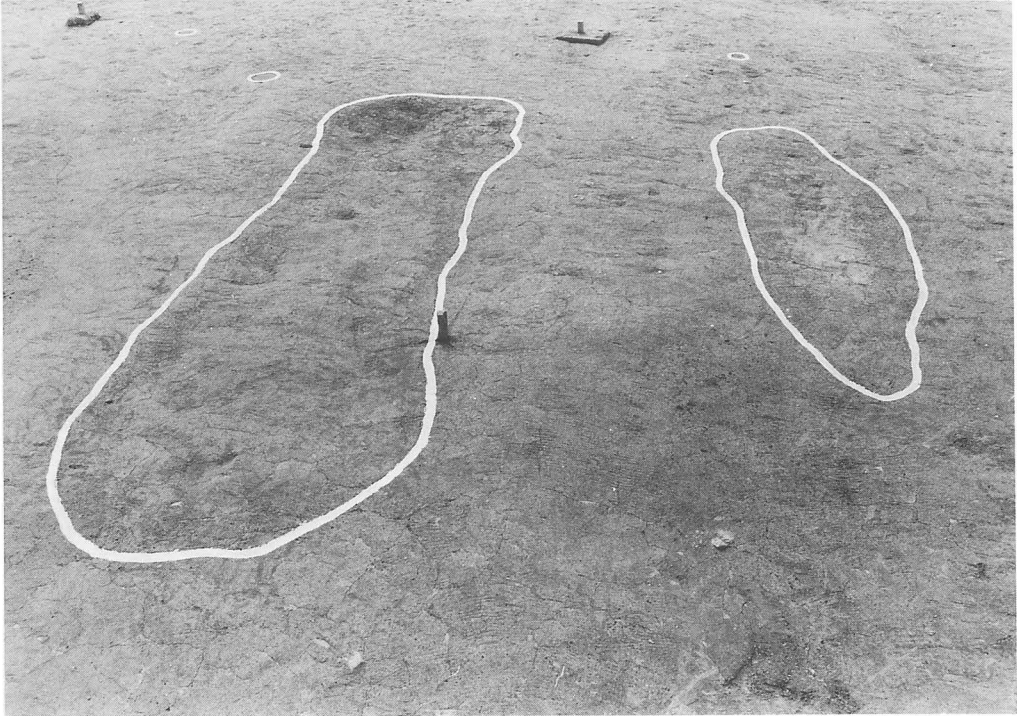


S O 1001 検出状況

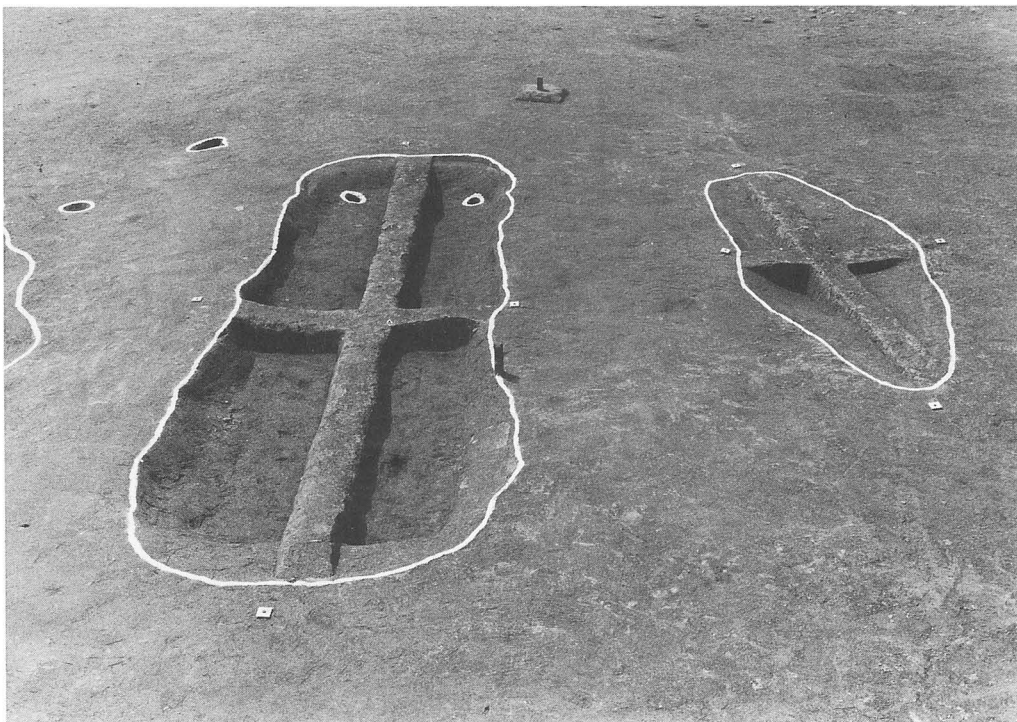


S O 1001 完掘状況

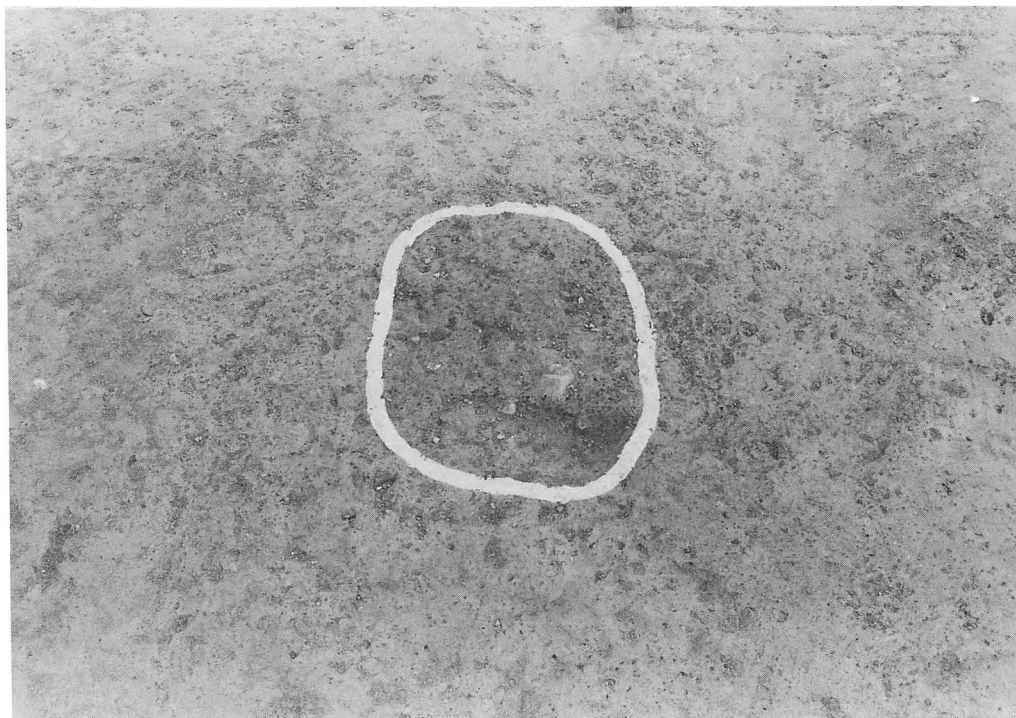
図版 4



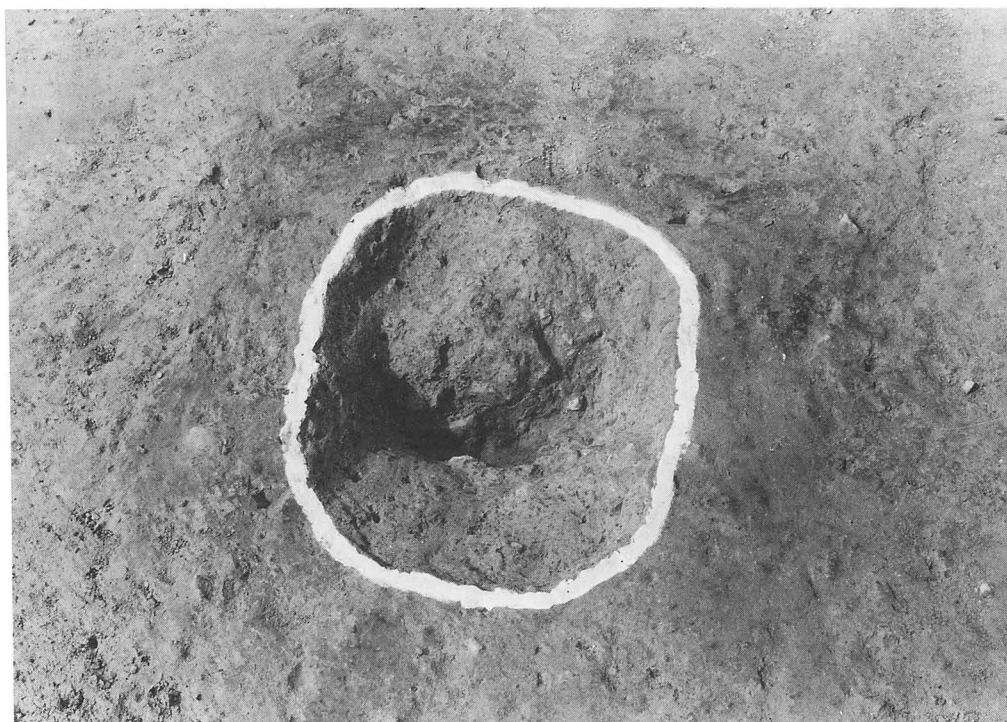
S O 1002・1003検出状況



S O 1002・1003掘り下げ状況



S K 2002検出状況



S K 2002完掘状況

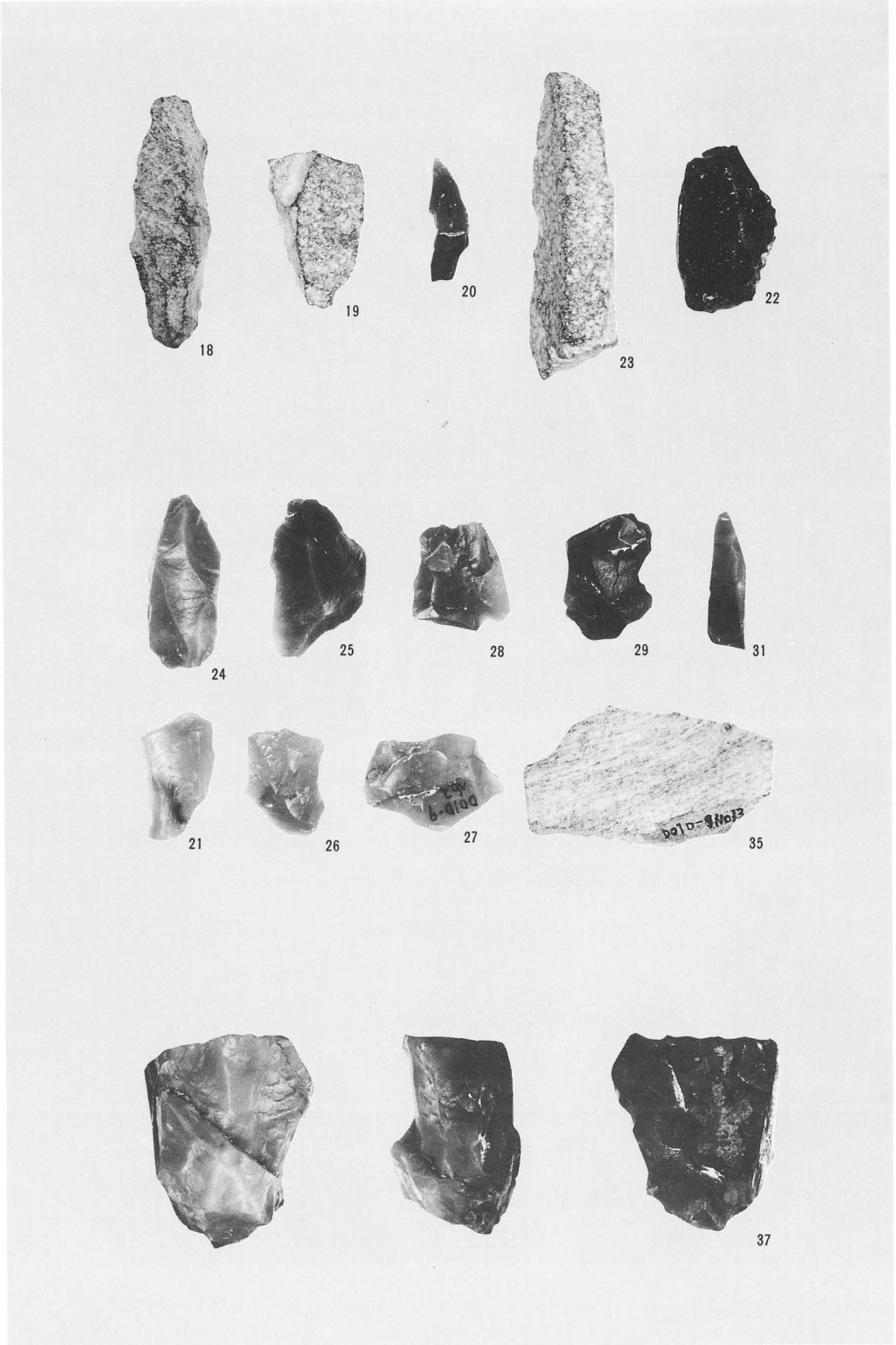
图版 6



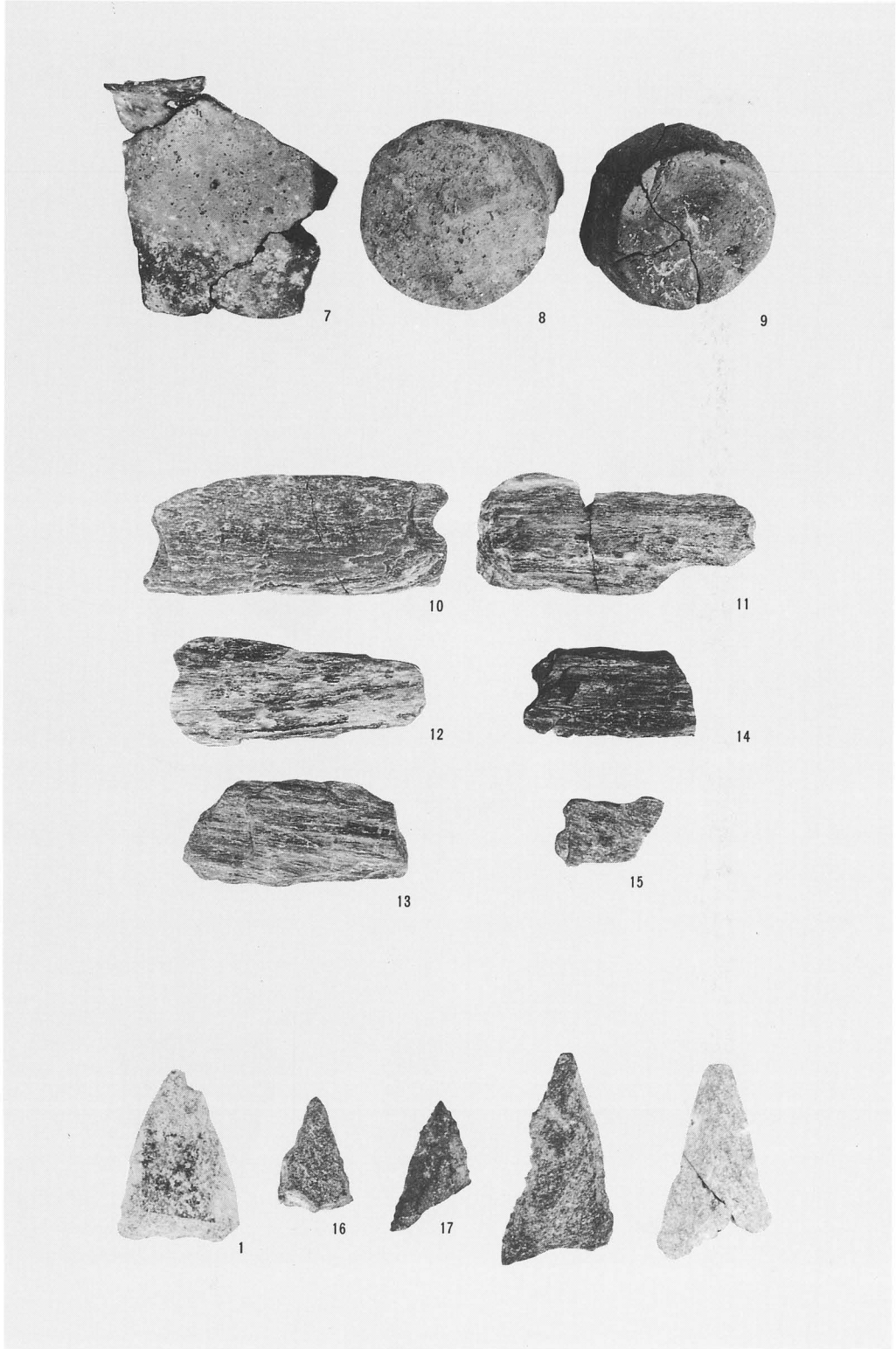
石棒出土状况



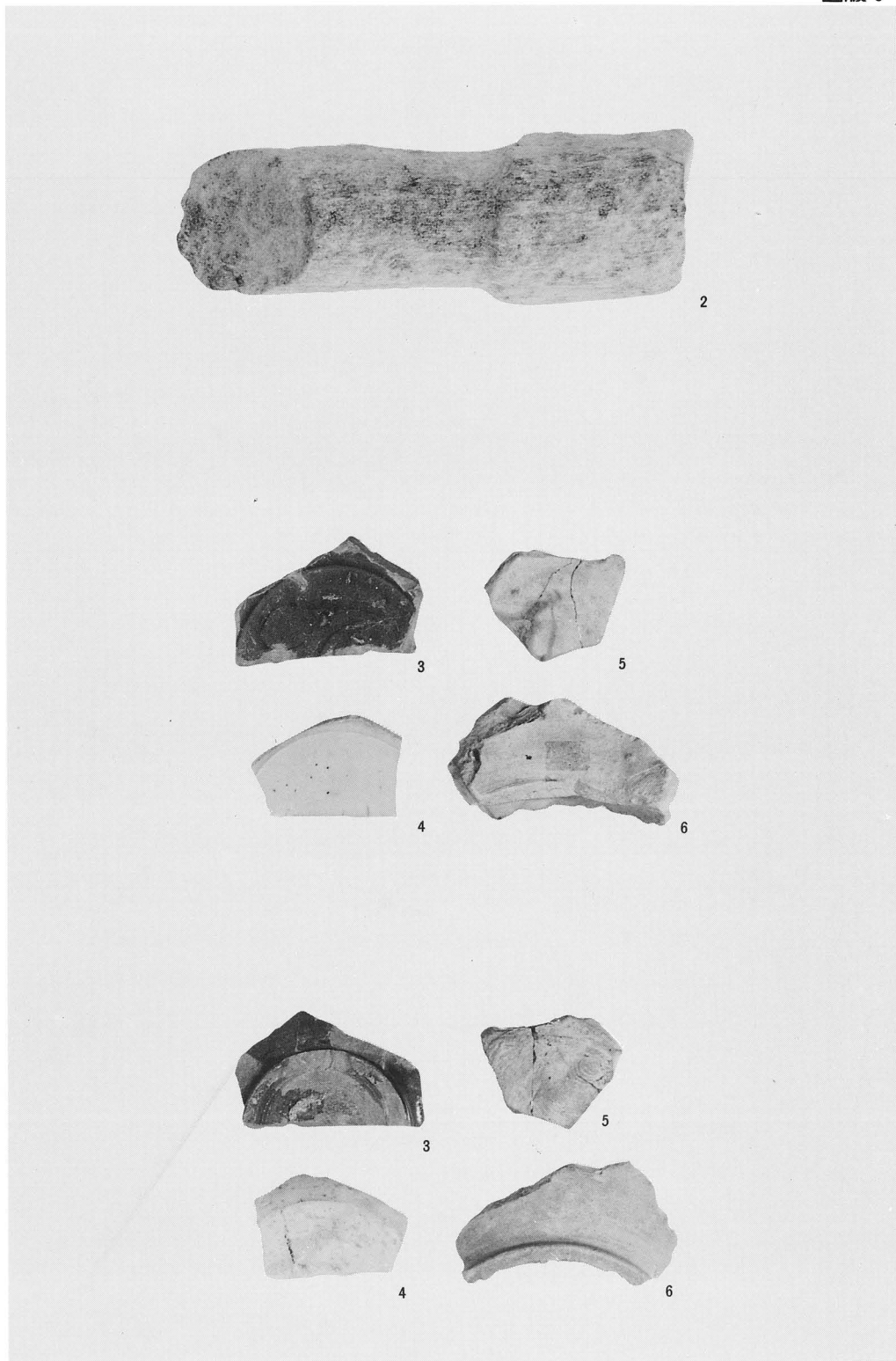
石核出土状况



B·C地区出土旧石器



包含層出土遺物 (1)



包含層出土遺物 (2)



IV 天 神 山 遺 跡 ・ 青 谷 遺 跡



- 1 本章は、四国縦貫自動車道建設に伴う、天神山遺跡と青谷遺跡の発掘調査報告である。
- 2 発掘調査及び報告書作成の実施期間は次のとおりである。
 - ・発掘調査期間 天神山遺跡 平成2年5月11日～平成2年7月12日
青谷遺跡 平成2年5月10日～平成2年9月12日
平成3年11月10日～平成3年12月12日
 - ・報告書作成期間 平成4年4月1日～平成5年3月31日
- 3 本章の遺物番号は遺跡ごとに通し番号とし、本文・挿図・表・図版と一致する。
- 4 第4図の地形図は建設省国土地理院発行1/25,000地形図「大寺」「市場」を転載したものである。

遺跡抄録

遺跡名	天神山遺跡	青谷遺跡
読み	てんじんやま	あおだに
所在地	板野郡上板町引野字山田原1 - 8他	板野郡上板町引野字青谷25 - 1他
種別	墓・住居	散布地
時代	弥生・近世	旧石器・縄文・弥生・古代・中近世
主な遺構	土墳墓・竪穴住居跡・便所	土坑・土墳墓・溝・柱穴
主な遺物	弥生土器・石器・陶器	石器・弥生土器・須恵器・陶磁器

1 調査の経過

(1) 調査の経過

分布調査による天神山遺跡の推定範囲は8,200㎡、東に隣接する青谷遺跡は推定範囲8,450㎡であった。当初は天神山遺跡西半4,540㎡と、青谷遺跡の4,620㎡を対象として、試掘調査を行った。試掘開始時においては、天神山・青谷両遺跡にそれぞれ1班が配置され、着手した。しかし、試掘の結果、調査対象範囲がかなり絞りこまれたので、本調査は1班で両遺跡の調査を並行して行うこととした。天神山遺跡を先行し、青谷遺跡を工程によって間にいれながら進めた。青谷遺跡では調査途中で新たな用地が入り、同様に試掘を行って調査範囲を絞りこんだ。天神山遺跡は、7月12日に完了し、青谷遺跡の調査は9月12日に終了した。調査面積は天神山1,330㎡、青谷遺跡3,110㎡である。

天神山遺跡は試掘結果と現地地形から、残りの推定範囲には遺跡の広がりのないことを十分に推定できたので、完了とした。青谷遺跡については遺物包含層の広がりの確認できた地点を1991年11月21日から12月12日までの間に2次調査として870㎡の発掘調査を行った（第3図）。

(2) 調査区割

調査を始めるに当たってグリッドの配置は、発掘調査統一基準にならい、第4系国土座標を基準とし、5mメッシュを1グリッドとして当初の推定範囲を包み込む南西隅から北にABC…、東に123…の順に記号をふり、その組み合わせでグリッドを表現するように設定した。

なお、便宜上調査地のまとまりを調査区として、天神山遺跡は第1調査区から第4調査区まで、青谷遺跡は第1から第8調査区まで設定した。さらに、両遺跡とも田畑一筆ごとに、また分割調査が必要であった地区については分割ごとにABC…（地区）を副記号としてつけた（第1～3図）。

また、遺構記号・遺構番号は検出時に決定し、掘削後、遺構の確実性が乏しいと判断されたものについては欠番とした。これは、遺構番号・遺構記号の変更による混乱を避ける目的であり、変更は必要最小限にとどめた。したがって、遺構番号は、その最大の値が全体の遺構数を表すものではない。

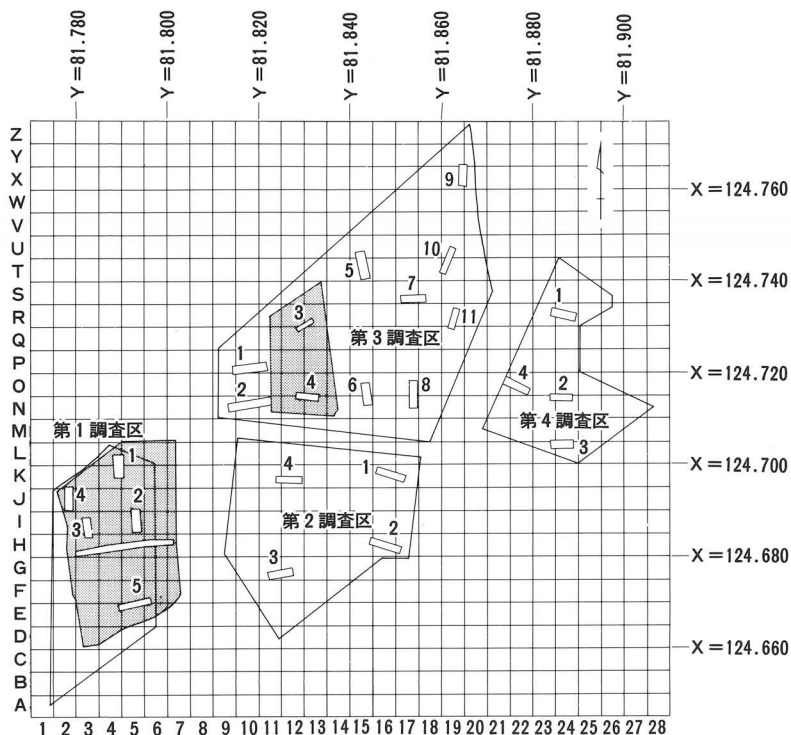
(3) 試掘調査

天神山遺跡

試掘のトレンチは2m×5mを基本として設定した。トレンチは遺物包含層上面ないしは遺構面直上で止めるのを原則とするが、各調査区ごとに下層の確認が必要と考えられる地点については、幅2mのうち1m分だけを深く掘り下げた（第1図）。

天神山遺跡については、尾根上の第1調査区で、まず頂上に5ヵ所設定し掘り下げたが、削平を受けていることが判明、最終確認のため尾根の両斜面にかかる東西に長いトレンチを設定し、深く掘り下げたところ、両斜面部でサヌカイトや弥生土器片を含む遺構および遺物包含層を確認し、本調査の対象とした。

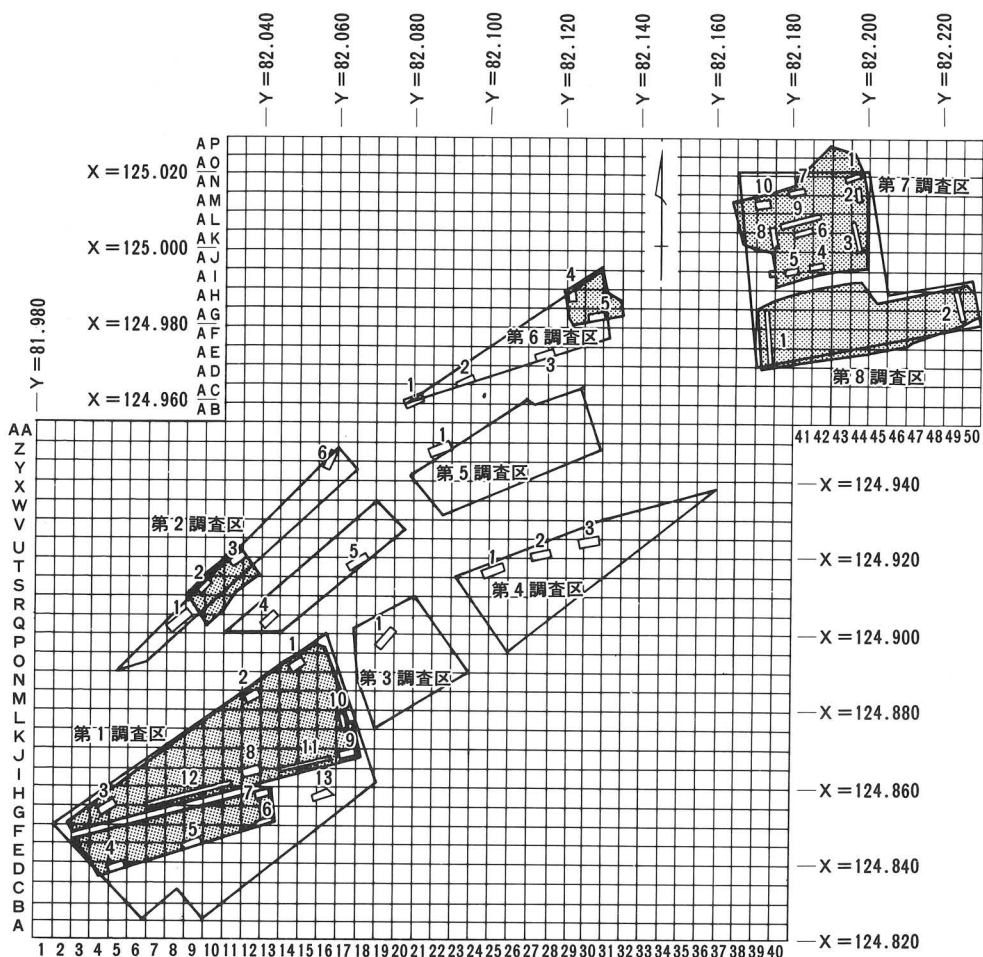
第2調査区は第1調査区の東側斜面部である。耕地整理で1枚の水田になっているが、東



第1図 天神山遺跡 調査区割・調査区・試掘トレンチ配置図

端に原地形が残存している可能性があったので4カ所のトレンチを設定、掘り下げた。4トレンチとも耕作土下は削平された地山であり、特に北西隅のNo.4トレンチでは黒色の断層破碎粘土が確認された。

第3調査区は第2調査区の北側、尾根の東側斜面部にあたり、斜面を数段に耕地整理をしている。一筆ごとに2～3カ所のトレンチを設定し、堆積状況を確認したところ、No.5～No.11トレンチについては削平が進み、遺構面の存在は確認できなかった。No.1～No.4トレンチについては、かつて屋敷地であったとの伝承の通り種々雑多な遺物が出土した。それらに混



第2図 青谷遺跡 調査区割・調査区・試掘トレンチ配置図

じって、弥生土器片、サヌカイトがNo.4トレンチから出土、南東側斜面部で遺構面の存在を確認できたので、No.3、No.4トレンチを設定した畑地（B地区）を本調査の対象とした。

第4調査区は大規模農道東側で第2・3調査区に続く斜面部にあたる。4ヵ所のトレンチを設定し、調査したが、いずれも耕作土下は削平された地山であった。

以上25ヵ所の試掘結果から、第1調査区と第3調査区B地区の2ヵ所を本調査の対象とした。

青谷遺跡（第1次）

試掘トレンチは、2m×5mを基本として、39ヵ所に設定し調査した（第2図）。

第1調査区は、まず10ヵ所設定し、掘り下げたが、どのトレンチも堆積状況は基本的に同じであった。泥岩小礫を多く含んだ層の上に、にぶい黄橙色の粘性砂質土が堆積している。遺物の出土は皆無に近かったが、最終確認としてあけたNo.11トレンチで炭化物と焼土を含んだ土坑（SK1001）を検出、青磁片も出土した。そこで、同様の堆積状況を示す部分を本調査対象とした。

第2調査区は、遅れて用地が取得された部分である。6ヵ所にトレンチを設定、掘り下げたところ、No.5・6トレンチは採土により削平されており、No.1・4トレンチは第1調査区に似ているが、遺構面にあたる層が安定していないので、本調査対象からはずした。No.2・3トレンチでは、本遺跡で最も明確な弥生時代の遺物包含層を確認し、広がり の推定できる範囲を調査対象とした。

第3・4調査区は、併せて4ヵ所で試掘したが、いずれも遺物の出土はなく、堆積状況は不安定で本調査の対象からはずした。

第5調査区も、現況は土置き場であり、採土等で攪乱が激しく放棄した。

第6調査区のNo.1～3トレンチでは、耕地整理による削平により、本調査の対象からはずした。No.4・5トレンチでは、出土遺物はないが堆積状況から、遺構面の残存が推定できるので、本調査の対象とした。

第7調査区は耕作の関係でやや遅れて10ヵ所試掘調査を行った。No.3トレンチから弥生土器片、No.9トレンチで土坑を検出し、その覆土からサヌカイト片が出土した。従って全体を本調査対象とした。

青谷遺跡（第2次）

第7調査区の南に隣接する地点の調査で、前年度に続き、第8調査区とした。東西両端に南北のトレンチをいれ、第7調査区と基本的に同じ土層を示す部分が確認されたので、全面を発掘対象とした。



第3図 調査地位位置図

- 平成2年度調査区
- 平成3年度調査区
- 試掘トレンチ



(4) 調査日誌抄

天神山遺跡

1990年

- 5月11日 機械掘削による試掘調査開始。
- 5月15日 第1・3調査区で遺物包含層・遺構確認。
- 5月17日 試掘作業ほぼ完了。
- 5月21日 試掘結果により調査範囲を確定。
- 5月22日 第3調査区No.2トレンチのSK1001調査。
- 5月25日 第1調査区A地区、第3調査区B地区、機械掘削開始。
- 5月28日 第1調査区A地区、人力掘削開始。



写真1 天神山遺跡 調査風景

- 5月30日 第1調査区A地区、遺構検出。
- 6月1日 第1調査区A地区、遺構検出・掘り下げ。第3調査区B地区で人力掘削開始。
- 6月8日 第3調査区B地区、住居跡の検出。
- 6月12日 第1調査区A地区、調査終了。第3調査区B地区ではSB1001の掘り下げ開始。
- 6月13日 第1調査区B地区、機械掘削。
- 6月14日 第1調査区B地区、人力掘削開始。
- 6月26日 第1調査区B地区、遺構検出。

- 7月9日 最後の土層図終了により調査完了。
- 7月12日 埋め戻し作業完了。

青谷遺跡（第1次）

1990年

- 5月10日 試掘着手。第1調査区、9ヵ所。
- 5月15日 再開。第1調査区で、遺構検出。
- 5月17日 第1・3～6調査区の試掘調査を完了。
- 5月19日 第7調査区、試掘。
- 6月4日 第1調査区C地区、機械掘削。
- 6月6日 第1調査区C地区、人力掘削開始。
- 6月13日 人力掘削完了。
- 6月18日 遺構検出開始。
- 6月25日 遺構平面図作成。
- 6月26日 調査区壁土層図をのぞいて完了。
午後からは第6調査区の掘削にかかる。
- 6月27日 第1調査区A・B地区、機械掘削。
第6調査区は人力掘削完了。
- 7月5日 第1調査区A・B地区、人力掘削。
- 7月9日 第1調査区、人力掘削続行。第6調査区は遺構検出。
- 7月11日 第6調査区完了。第2調査区、試掘調査。
- 7月17日 第1調査区A地区、遺構検出。B地区、人力掘削ほぼ完了。D地区および第2調査区、機械掘削。
- 7月18日 第2調査区、人力掘削開始。第1調査区も検出・実測作業続行。
- 7月24日 第1調査区A・B地区、平板測量による遺構配置図作成。第2調査区、掘削続行。

- | | | | |
|-------|--|--------|-------------------------|
| 7月27日 | 第2調査区、人力掘削完了。第1調査区D地区に移る。 | 12月2日 | 人力掘削。 |
| 7月30日 | 第7調査区A・B地区、機械掘削。第1調査区では実測と人力掘削を続行。 | 12月5日 | 調査区中央部の堆積厚く、機械を導入、掘削開始。 |
| 8月1日 | 第1調査区D地区、人力掘削完了。第2調査区は遺構検出。 | 12月10日 | 調査区の精査。遺構検出されず。 |
| 8月6日 | 第1調査区A・B地区、調査完了。D地区では、遺構検出・掘り下げ。 | 12月12日 | 調査区・土層の実測。写真撮影。調査終了。 |
| 8月11日 | 本日より15日まで、盆休。 | | |
| 8月16日 | 第1調査区D地区、調査完了。第7調査区A・B地区、人力掘削完了。遺構検出、掘り下げ。 | | |
| 8月21日 | 第7調査区、平板測量。第2調査区再開、遺構掘り下げ。 | | |
| 8月27日 | 第7調査区A・B地区、調査完了。 | | |
| 8月28日 | 第7調査区C・D地区、機械掘削。 | | |
| 8月30日 | 第7調査区C・D地区、人力掘削開始。 | | |
| 9月3日 | 第7調査区C・D地区、人力掘削完了。 | | |
| 9月5日 | 第7調査区C・D地区、遺構掘り下げ。第2調査区、実測中。 | | |
| 9月7日 | 第7調査区・第2調査区とも残件処理。調査完了。 | | |
| 9月12日 | 事務処理完了。挨拶回りの後、現場撤収。 | | |

青谷遺跡（第2次）

1991年

- 11月22日 機械による第8調査区の両端を試掘。
- 11月28日 人力掘削開始。

2 遺跡の立地と環境

(1) 地理的環境

天神山遺跡は、徳島県板野郡上板町引野字山田原1-8他に、青谷遺跡は引野字青谷25-1他に所在する。

四国山地に源を発し、徳島県北部を東流し、そして紀伊水道に注ぐ吉野川は河口部に広大な三角州である徳島平野を形成している。本遺跡は、その吉野川の左岸、河口部からは約20km付近の阿讃山脈の南麓に位置する。天神山遺跡は標高約60mの阿讃山脈から南に延びる尾根上に、青谷遺跡は南流する小河川に挟まれた標高約51~61mの緩斜面に立地する。阿讃山脈は地質学的には中生代に堆積した砂岩・泥岩の互層による和泉砂岩層により形成され、その麓を徳島の地質構造を和泉層群と三波川変成岩帯とに分ける中央構造線が東西に走っている。本遺跡の周辺には、その中央構造線系の断層がみうけられる。

(2) 歴史的環境

本地域での旧石器時代の遺跡としては柿谷遺跡⁽¹⁾が挙げられる。徳島県内でも類例の少ないチャート製の国府型ナイフ形石器が出土している。また上板町引野の出口遺跡⁽²⁾ではサヌカイト製のナイフ形石器が表面採集されている。

縄文時代の遺跡としては土成町の西谷遺跡⁽³⁾がある。縄文から中世にかけての複合遺跡であるが、縄文時代後期の深鉢、浅鉢、注口土器を出土する貯蔵穴の可能性をもつ土坑が検出されている。また上板町神宅字山田^{かんやけ}で1953年に縄文時代後期の磨消縄文をもつ土器片が採集されているが⁽⁴⁾この周辺では縄文時代の遺跡は確認されていない。

弥生時代の遺跡としては、神宅字山田の阿讃山脈の尾根上から1915年、神宅銅鐸と呼ばれ扁平紐式6区画袈裟襷文銅鐸⁽⁵⁾が出土している。その銅鐸と関連付けられる弥生時代の集落は確認されていない。上板町大山中腹の畑遺跡や、本遺跡の西南の平野部に広がる土成町高尾の熊ノ庄遺跡なども散布地として知られている。また前述の西谷遺跡では弥生中期から後期にかけての住居跡・土坑が検出されている。

弥生時代から古墳時代前期にかけては、天神山遺跡の一つ尾根を挟んだ西の尾根上に安楽寺谷墳墓群⁽⁶⁾がある。弥生時代の土器棺墓群と石室墓、そして古墳時代前期の竪穴式石室2基が確認されている。もう一つ西の尾根上にも、安楽寺谷墳墓群の竪穴式石室と同時期と考えられる十楽寺山古墳⁽⁷⁾がある。



第4図 周辺の遺跡分布図

古墳時代中期でまず触れておかなければならないのは、土成町高尾の扇状地上の水田中に位置する土成丸山古墳⁽⁸⁾である。徳島県の円墳では唯一周濠をもつもので、規模は東西43m、南北39m、高さ6.5～7m、周濠は幅11～14mが推定される。徳島県の中期を代表する大型古墳である。他にこの地域で現存するものの中で、中期の構築が考えられるものは確認されていない。

古墳時代後期にはいと、阿讃山脈の南麓を中心に多くの古墳が築かれた。本遺跡の周辺部においても明神池、天神山古墳群が1963年の埋蔵文化財包蔵地調査⁽⁹⁾で報告されているが、具体的様相は不明である。前述の柿谷遺跡では後期の横穴式石室8基と石室墓が検出されている。柿谷遺跡は古く「百塚」と称されていた場所の比定地のひとつである。また後期の集落遺跡としては上板町東部の神宅遺跡⁽¹⁰⁾があげられる。遺跡の東の台地上の山崎古墳群⁽¹¹⁾と時期的に一致し、古墳群を構築した集団の集落と考えられる。

歴史時代としては上板町から吉野町にかけての沖積平野上に、五条、六条、七条の地名や直交する道路畔畔から条里遺構の一部に比定される地域⁽¹²⁾がある。また山麓周辺には伝承で平安時代に建立されたとされる、西光廃寺、安楽寺跡、十楽寺跡の伝承地が点在し、特に青谷遺跡の南東部は西光廃寺伝承地とされ八葉複弁蓮華文軒丸瓦が出土している⁽¹³⁾。十楽

寺のすぐ西の谷には十楽寺遺跡⁽¹⁴⁾があり、徳島県内でも古い時期に属する8世紀後半から9世紀にかけての須恵器窯に伴う灰原が確認されている。大山中腹^{おおやま たいさん}の大山寺では大治元年(1126年)銘をもつ経筒⁽¹⁵⁾が出土している。また泉谷の和泉寺^{わせん}においても1918年に経筒⁽¹⁶⁾が出土している。

参考文献

- 上板町史編纂委員会『上板町史・上巻』『上板町史・下巻』上板町 1983
郷土研究発表会『総合学術調査報告 上板町』郷土研究発表会紀要 1981
児島忠平『泉谷郷土誌』 1963
児島忠平『松島町誌』 1967
『土地分類基本調査 川島』 国土調査 経済企画庁 1971
菅原康夫『日本の古代遺跡37 徳島』保育社 1988
天羽利夫・岡山真知子『徳島の遺跡散歩』 徳島市民双書 1985

注

- (1) 石川直章・武蔵美和「柿谷遺跡」池渕 茂「試掘調査」『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol. 1, 2』 1991
藤川智之「柿谷遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol. 3』 1992
(2) 天羽利夫「徳島県の遺跡」『日本の旧石器文化3』 1976
(3) 結城孝典「西谷遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol. 2』 1991
結城孝典「西谷遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol. 3』 1992
(4) 『上板町史・上巻』参照
(5) 梅原末治『銅鐸の研究』 1927
(6) 小泉信司「安楽寺谷墳墓群」『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol. 3』 1992
(7) 立花 博は『土成町史・上巻』等で古墳の構築時期を5世紀以降にしているが、菅原康夫『日本の古代遺跡37 徳島』(1988)により、その構築形態の類似が指摘され、また両古墳の距離的關係から前期に位置付けるのが妥当と考えられる。
(8) 天羽利夫他「土成丸山古墳調査報告」『徳島県立博物館紀要』第18集 1987
(9) 徳島県教育委員会社会教育課調査 1963
(10) 徳島県教育委員会『平成元年度県営圃場整備事業上板東部地区 発掘調査実績報告書』 1990
(11) 徳島県教育委員会『山崎古墳群 現地説明会資料』 1986
(12) 福井好行「阿波の条里」「阿波の条里 補遺」『阿波の歴史・地理』 1964
(13) 前掲(4)
(14) 久保脇美朗「十楽寺遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol. 2』 1991
(15) 徳島県教育委員会『徳島県の文化財 第一集』 1954
(16) 蔵田 蔵「経塚論 11」『MUSEUM 第179号』 1966

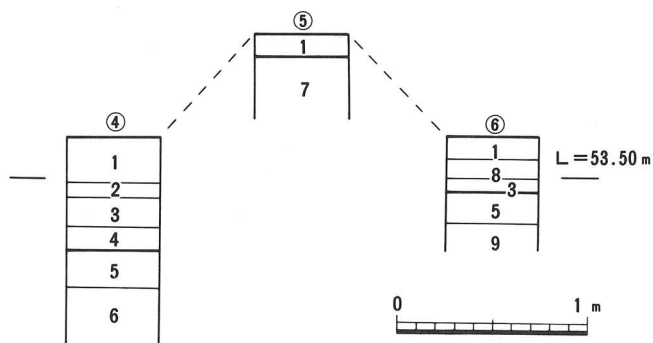
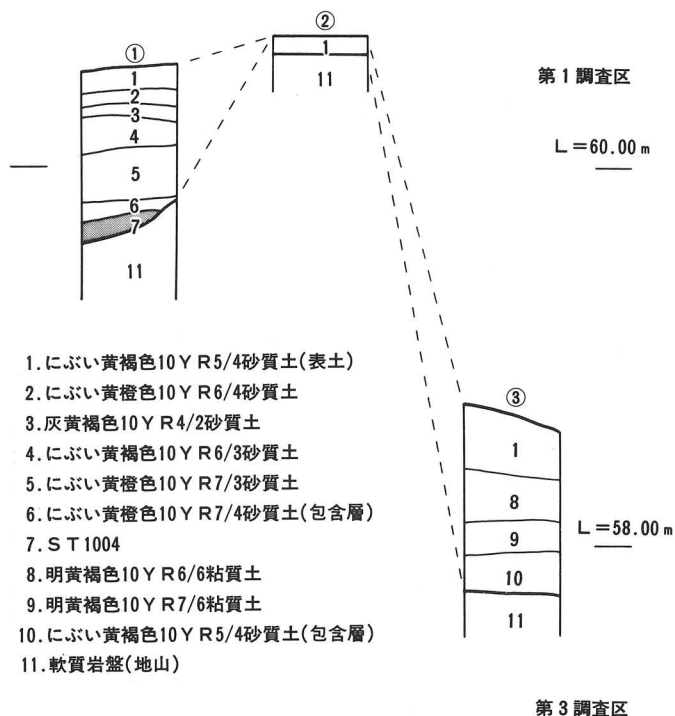
3 調査成果

A 天神山遺跡

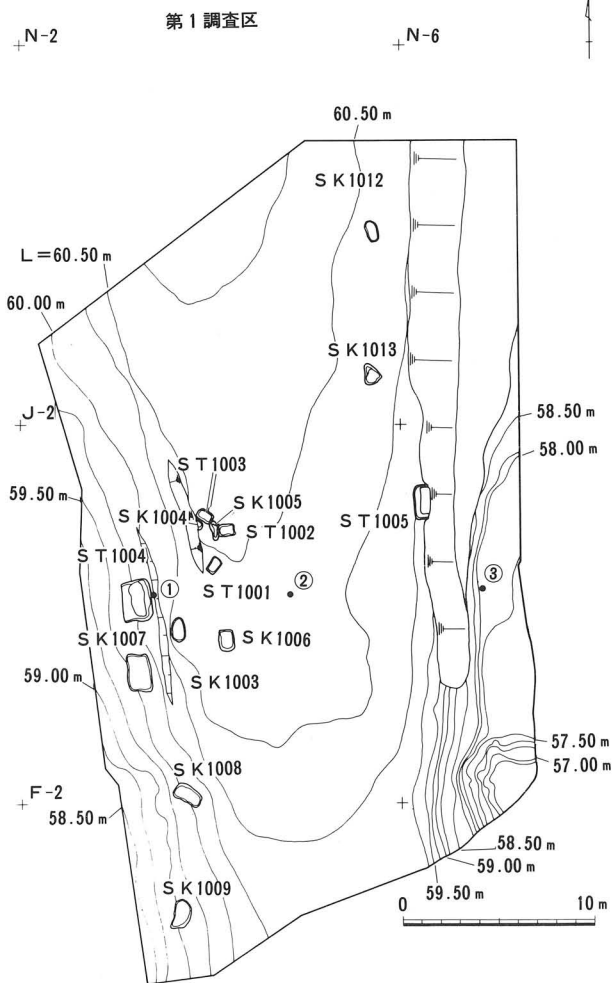
(1) 基本層序

本遺跡の堆積は、削平・盛土等がかなり行なわれいるものの、遺構面の確認できた第1調査区、第3調査区B地区では比較的単純な堆積をなしている。したがって、第5図に示した柱状図がそれぞれの調査区の基本的な堆積状況を示している。いずれの柱状図も、試掘トレンチのものを利用した。なお、柱状図の位置については、第6図に示している。

第1調査区は南に延びるなだらかな尾根である。この尾根は、後世の改変が激しく、先端部分は墓地として利用され、調査地の北隣は採土により切りとられ、南隣は貯水タンクが建設されている。調査地も尾根頂部が削平され、畑地となっているのをはじめ、両斜面部にも手が入っている部分がある。柱状図①～③をみて明らかなように、尾根頂



第5図 天神山遺跡 基本土層実測図



第6図 天神山遺跡 遺構配置図

部②地点は削平された地山に表土がのっているだけである。両斜面部には弥生時代の遺物を少量含んだ第6層、第10層がある。①地点では、遺物包含層上の堆積は比較的安定した状況を示す。③地点では、すぐ北側で斜面が削られている影響があるのか、第1・8・9層については安定性に欠ける。

第3調査区A・B地区は、斜面部を近世に屋敷地として、さらに段々畑に改変した地点である。⑤地点は表土直下が10cm大の礫を多く含む地山層となる。便槽（SK1001）もこの面で検出されていることから、おそらくこの上面が近世末まで屋敷地として利用されていたと考えられる。④・⑥地点は、調査前には藍畑として利用されていたが、耕作土下は、両地点とも盛土と考えられる10cm程度の礫を多く含む層を間に挟み、④地点では2層の、⑥地点では1層の包含層が存する。第3層は弥生時代から近世の遺物を含む。第4層は弥生時代の遺物包含層である。第5層を地山とするが、弥生時代の遺構面が残存するのは④地点付近の狭い範囲だけと捉えており、⑥地点では後世に遺構面が削平されて、新しい遺物包含層（第3層）が上に被っていると考えられる。

(2) 遺構と遺物

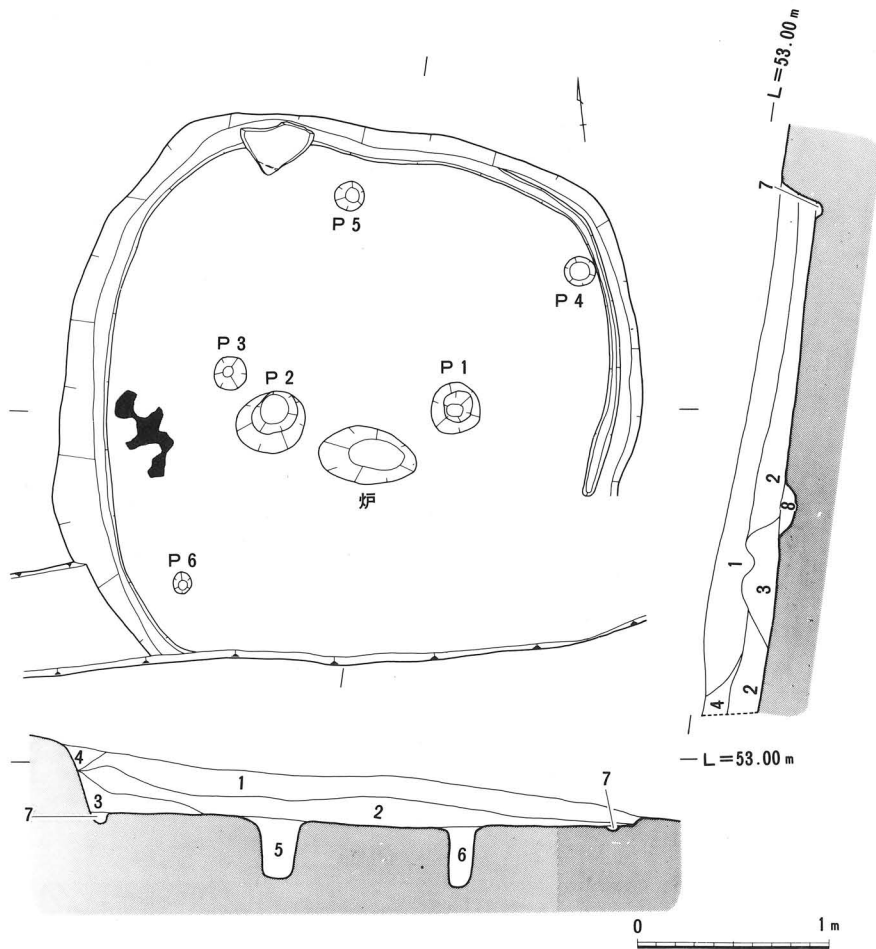
遺構の配置については、第6図に示すとおりである。第1調査区は、尾根の東西の斜面近くに遺構が残存している。検出された遺構は、土墳墓と考えられるもの5基、土坑9基である。出土遺物からみて弥生時代後期を中心とする時期のものであると考えられる。第3調査区は、A地区の試掘No.2で近世の民家の遺構が、B地区では、弥生時代の遺構面の残存面積は少ないが、後期前葉の竪穴住居跡が1基検出されている。

①弥生時代

竪穴住居跡（SB1001）（第7図）

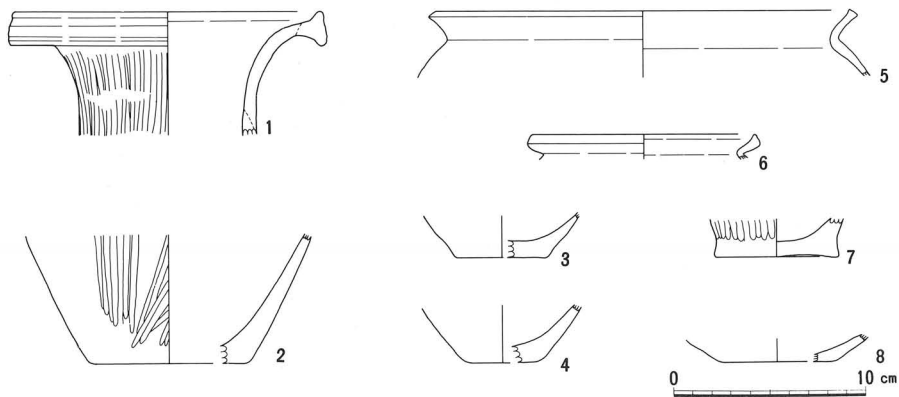
一辺3.05mの隅丸方形のプランを有し、深さは西側で28cm、東側で10cmを測るが、南東部分は壁を欠失している。幅10cm前後の周壁溝を巡らす。住居中央部に長軸52cm、短軸30cmの楕円形を呈し、深さ7cm程度の浅い炉がある。ピットは6ヵ所検出し、検討の結果、炉の両端にあるP1・P2が、深さそれぞれ30cm、32cmを測り、この2ヵ所を支柱穴とする構造であったことが推定できる。

住居北端の緩いコーナーに砂岩台石が据えられ、周辺にはサヌカイトの剥片が散乱する。台石の際の壁に密着して石鏃（第9図13）、炉の際の床面でも、石鏃（第9図12）が出土しているのをはじめ、覆土中から、合計6点の石鏃が検出されている。

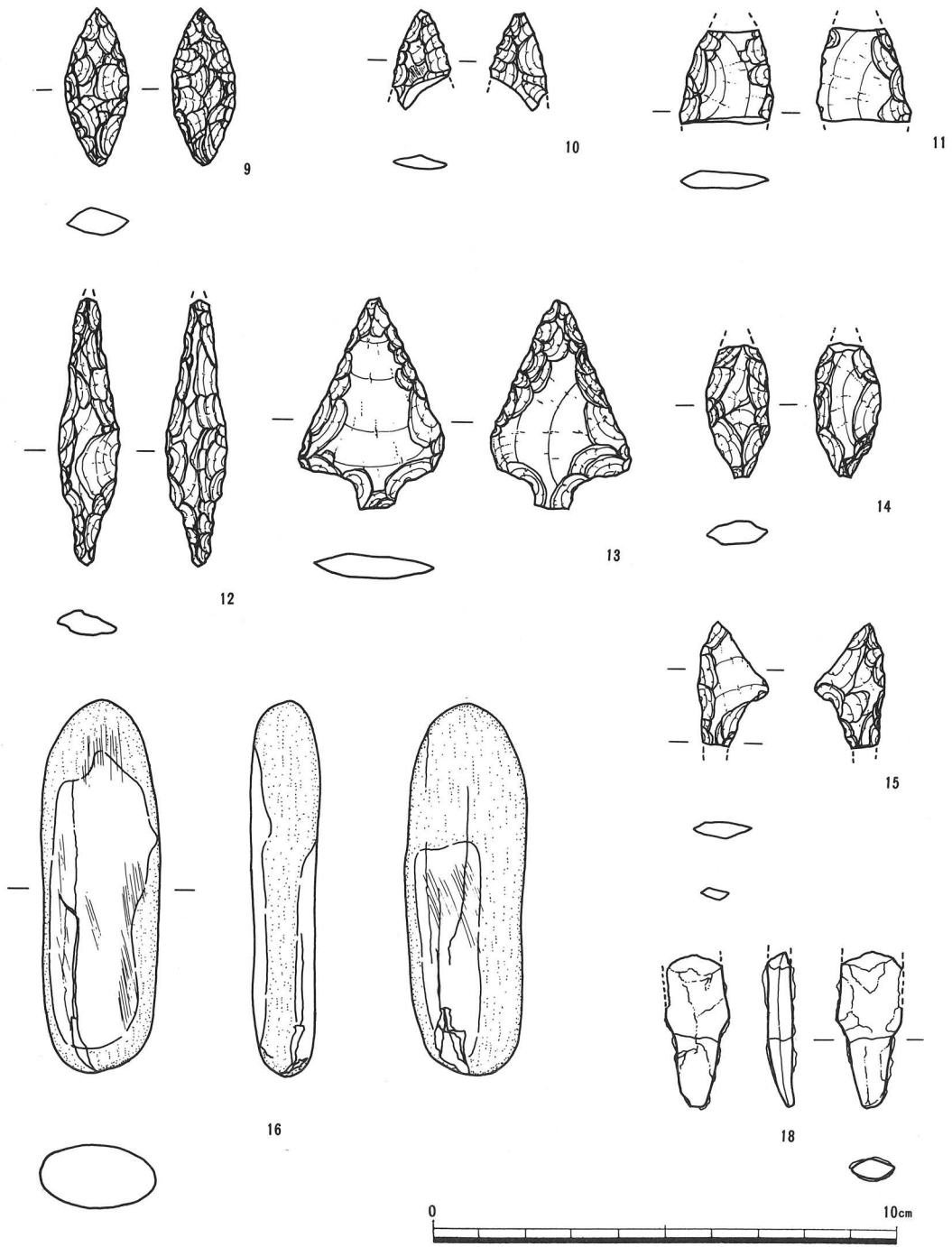


- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 1. にぶい黄褐色10Y R6/4砂質土 | 6. 黄褐色10Y R5/6粘質土(炭化物含む) |
| 2. にぶい黄褐色10Y R5/3粘質土 | 7. にぶい黄褐色10Y R6/3粘質土 |
| 3. にぶい黄褐色10Y R5/3粘質土(炭化物、焼土含む) | 8. 黄褐色10Y R5/6粘質土(炭化物、焼土多量に含む) |
| 4. 明黄褐色10Y R6/6砂質土 | (アミの部分は炭化材のひろがり) |
| 5. 明黄褐色10Y R6/6粘質土(炭化物含む) | |

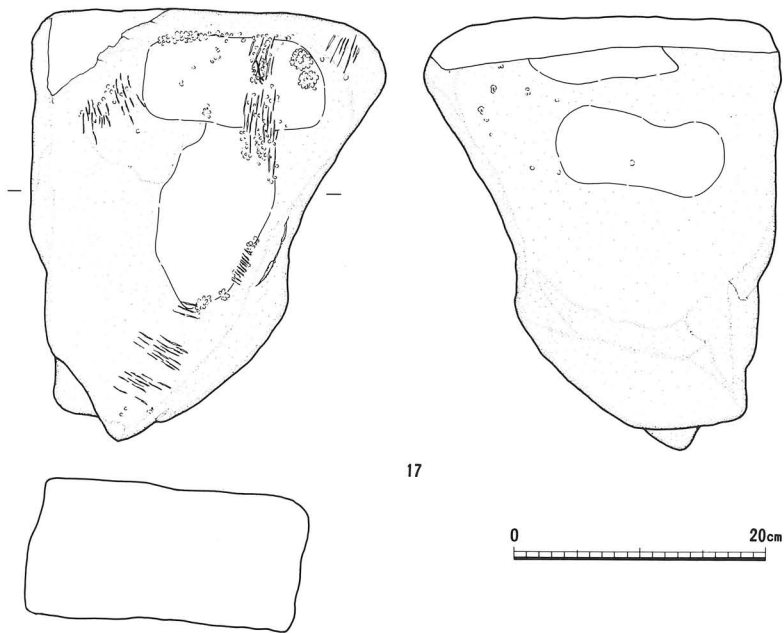
第7図 SB1001実測図



第8図 SB1001出土遺物実測図 (1)



第9图 S B 1001出土遺物実測图 (2)



第10図 S B 1001出土遺物実測図 (3)

西壁際の床面には炭化材が散乱し（第7図 網の部分）、焼土痕もみられる。土器もこの付近で集中して出土している。

出土遺物（第8～10図）

覆土からの出土遺物は、弥生土器片234点、石鏃6点、石錐1点、磨石1点、サヌカイト片26点、結晶片岩5点、鉄鏃(?)1点、それと前述した砂岩台石である。

弥生土器は細片が多く、全体を復元できるものはないが、辛うじて実測可能な個体8点を図示した（第8図）。1は、広口壺である。直立する頸部から緩やかに外反する口縁部を持ち、口縁端部は上下に拡張して2条の擬凹線を施す。頸部外面はタテハケ調整、内面および口縁部はヨコナデで仕上げられている。5・6は甕で、「く」の字状に屈曲して外反する口縁部を持ち、端部は、5は平坦に、6はやや肥厚させ下端を曖昧に納めている。底部は7がやや傾向を異にしているが、平底で、外方に直線的に立ち上がる。これらの特徴から、後期前葉の様相⁽¹⁾を示すものと考えられる。

9～14（第9図）は、石鏃である。うち4点は破損しているが、6点ともに、長さは復元すれば3cmを越える大型品で、形態的にバラエティに富んでいる。松木武彦氏は戦闘用石鏃の基準として、3cmを越えるものを提唱している⁽²⁾が、いずれもこれに該当する。11～14が1次剥離面を中央部に残し、縁辺を調整した粗雑なつくりであるのに対し、9・10は全面

に細かな調整を行っている。

15は、サヌカイト製の石錐である。錐部を欠損している。

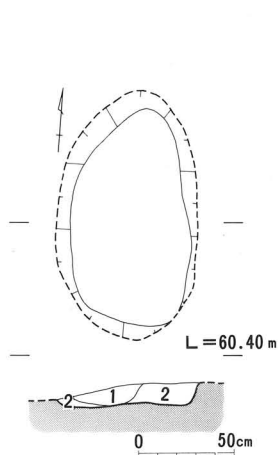
16は、磨石である。黒色片岩製のこの石器は、両端の丸い偏平な棒状を呈し、表裏面に研磨された面を持っている。同様の石器は、同じ吉野川流域の土成町北原遺跡東地区土壌3、西地区土壌11、北原～大法寺遺跡S K1009、前田遺跡S B1004で出土している⁽³⁾。研磨面が凸面を呈しているので、磨石としたが、どのように使用されたものかはいずれの場合も不明である。

17は砂岩の台石である。表裏面とも一部に弱い砥面をもつが、特に表面に筋状の敲打痕を多数残す。

18は鉄製品である。鉄鏃の基部とも、刀子の基部との見方もできる。

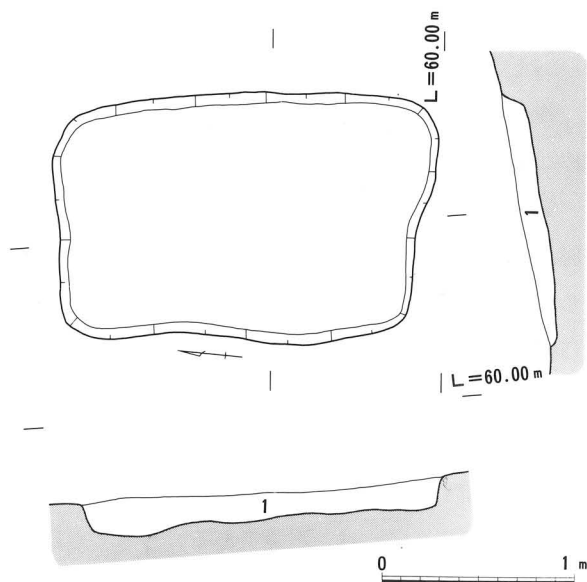
土坑（S K1003）（第11図）

第1調査区の尾根頂部に近い平坦面で検出された楕円形の土坑である。上半は削平されているものと考えられ、現存規模は長軸1.3m、短軸0.75m、深さ14cmである。断面形は浅い皿状を呈する。弥生土器片59点と、炭化物を出土しているが、土器は細片であり、時期決定は困難である。他の土坑墓と考えられる遺構とも平面形等で異なり、性格については不明である。



- 1. にぶい黄橙色10Y R6/4砂質土
- 2. 明黄褐色10Y R7/6砂質土

第11図 S K1003実測図



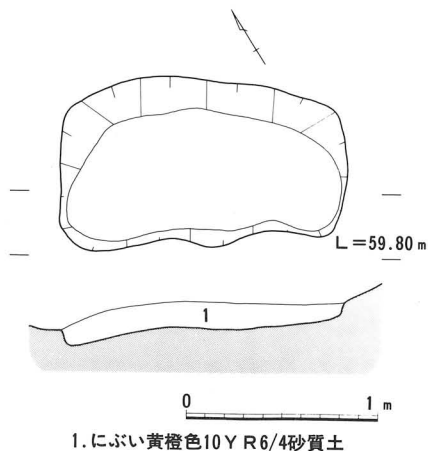
- 1. にぶい黄橙色10Y R7/4粘性砂質土

第12図 S K1007実測図

土坑 (S K 1007) (第12図)

第1調査区西側の斜面部、土壌墓(S T 1004)に並んで検出された長方形の土坑である。規模は長辺1.93m、短辺1.32m、深さ15cmを測る。断面形はほぼ長方形であり、底面は谷に向かってやや傾斜する。覆土は分層できず、S T 1004ほどには硬く締まっていない。

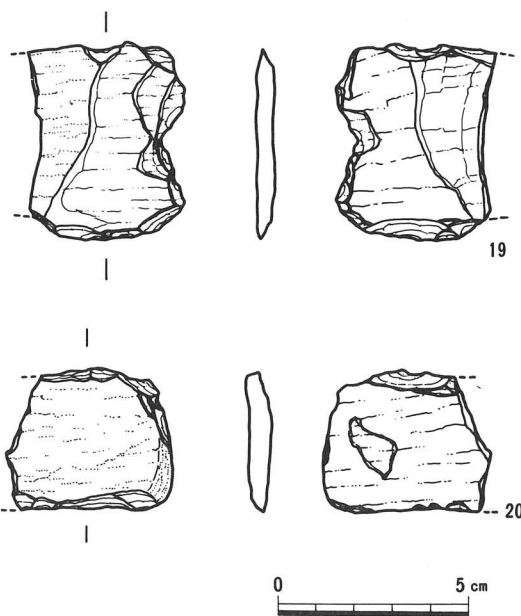
出土遺物は弥生土器の細片が2点と炭化物少量である。覆土の状況も隣接する土壌墓とは異なっているが、規模・方向等と同じ傾向を示すことから、墓の可能性も考えておきたい。



第13図 S K 1008実測図

土坑 (S K 1008) (第13図)

第1調査区西側斜面部で検出された、長方形の土坑である。規模は、長軸1.5m、短軸0.9m、深さは中心部で15cmである。断面形は不整な長方形を基本とするが、底面は、平坦ではなく、やや波打つ形状をしている。性格等については不明である。



第14図 S K 1008出土遺物実測図

出土遺物 (第14図)

弥生土器片2点、打製石庖丁片2点、炭化物少量が出土している。弥生土器片は細片であり、時期決定は困難である。打製石庖丁(第14図19・20)はいずれも破片で全体形状は不明である。19は端部に抉りをつけ、刃部の調整もしっかりしている。20は抉りがみられず、刃部の調整も粗い。石材はいずれも石英質を多く含んだ結晶片岩である。

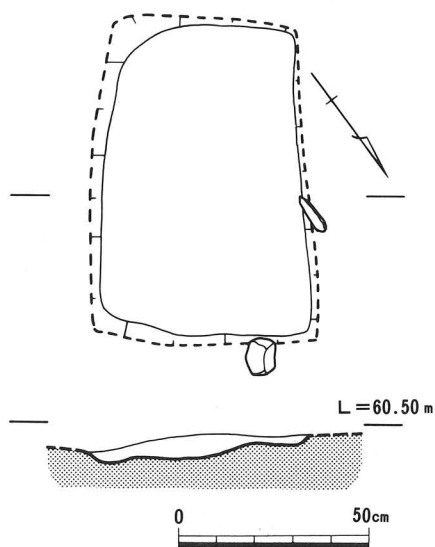
土壌墓 (S T 1001) (第15図)

第1調査区の西側尾根頂部に近い地点で検出した長方形の土壌墓である。上半部は削平され、底面に近い部分のみ検出された。規模は長辺は0.9m、短辺0.58m、現存の深さは7cm

である。北辺に白色円礫（石英）、西辺に沿って打製石庖丁が出土しているが、これが副葬遺物の一部と考えられる。

出土遺物（第16図）

前述した打製石庖丁1点、白色円礫1点のほか弥生土器片20点が出土している。弥生土器片はいずれも細片で、時期決定は困難である。打製石庖丁は完存品ではあるが、両端に抉りもなく、成形しただけの粗雑なつくりのものである。石材は結晶片岩であるが、絹雲母の多く含まれた部分を使用している。

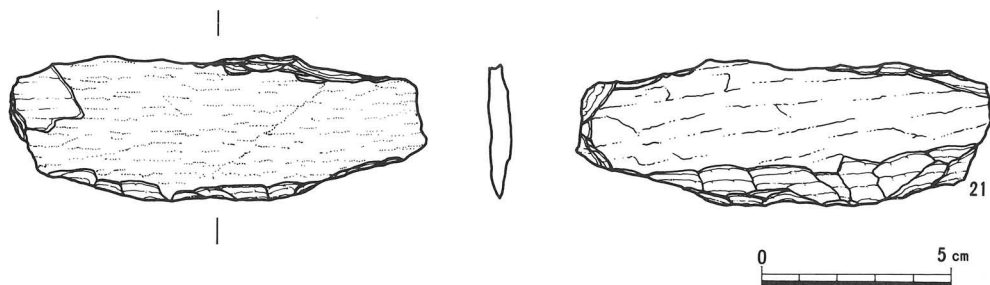


1. 明黄褐色10Y R6/6粘性砂質土

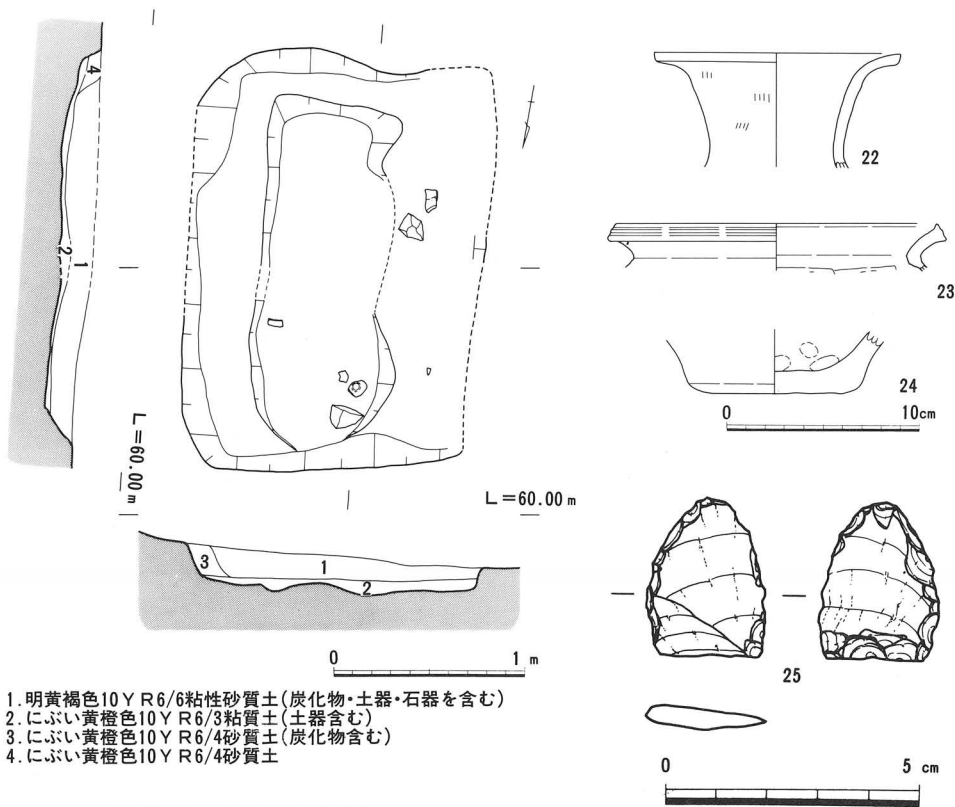
第15図 ST 1001実測図

土壌墓（ST 1004）（第17図）

第1調査区の西側斜面部で検出された土壌墓である。試掘時の東西トレンチで遺構の中央を一部掘り抜いたこと、斜面の堆積が不明瞭であったので、土層観察用の畦で谷側のプランを確認したことから、図では推定線が多くなっている。規模は長辺2.18m、短辺1.55mの長方形のプランをもち、深さは東壁で23cmを測る。土壌中央部で、1.85m×0.68mの範囲にわたり、3～4cmの浅い落ち込みを検出した。覆土は非常によく締まっており、炭化物と弥生土器片を含んでいる。他に、石鏃、スクレイパー、台石が出土しており、副葬遺物と考えられる。中央部の落ち込みは不明瞭であり土層観察でも主体部の側板の立ち上がりは確認できなかったが、木棺直葬の可能性も考えられる。時期は甕形土器の形状から弥生時代後期前葉と考えられる⁽⁴⁾。



第16図 ST 1001出土遺物実測図



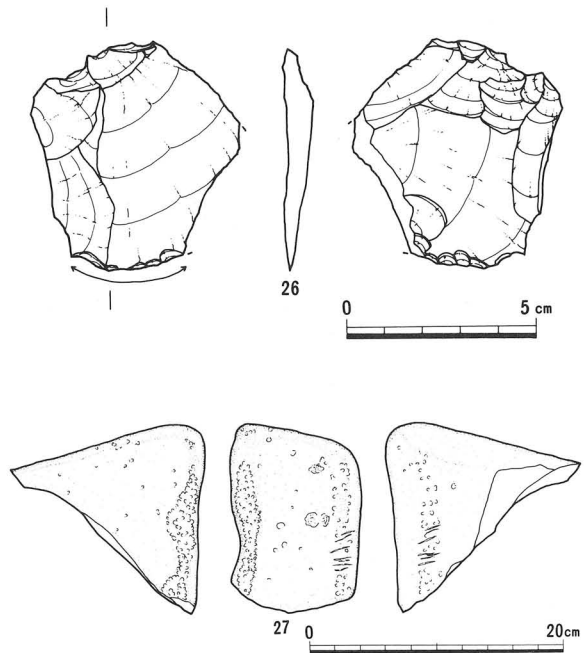
1. 明黄褐色10Y R6/6粘性砂質土(炭化物・土器・石器を含む)
2. にぶい黄褐色10Y R6/3粘質土(土器含む)
3. にぶい黄褐色10Y R6/4砂質土(炭化物含む)
4. にぶい黄褐色10Y R6/4砂質土

第17図 S T 1004実測図

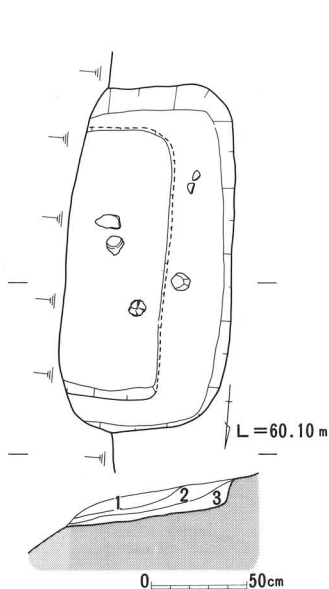
出土遺物(第18図)

弥生土器片26点、石鏃1点、スクレイパー1点、砂岩台石1点、サヌカイト片10点、結晶片岩1点、炭化物が出土している。

弥生土器は、ほとんどが細片である。22は広口壺形土器である。やや開き気味の頸部から、緩やかに屈曲して外反する口縁部をもつ。端部の形態はやや損傷を受けているが平坦に納めているものとみられる。23は甕形土器である。「く」の字状に外反する口縁部を肥厚させ、端部に2条の擬凹線、体部内面の上端までのヨコヘラケズリが特徴である。24の底部は表面の剝離が激しく、

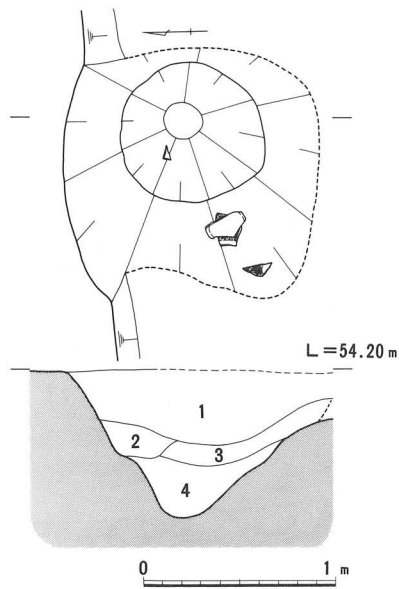


第18図 S T 1004出土遺物実測図



1. にぶい黄橙色10Y R6/4砂質土
2. にぶい黄色2.5Y 6/4粘質土(炭化物・土器含む)
3. 灰黄色2.5Y 6/2粘質土(炭化物・土器含む)

第19図 S T 1005実測図



1. 明黄褐色10Y R6/6砂質土
2. 黄褐色10Y R5/6砂質土
3. にぶい黄褐色10Y R5/4砂質土
4. 明黄褐色10Y R6/8砂質土

第20図 S K 1001実測図

調整などの特徴を確認できないが、砂粒を極めて多く含む。

25の石鏃は、縁辺の調整が非常にうまく、粗雑なつくりのものであり、未製品との見方もできる。26はサヌカイト製のスクレイパーである。一部を欠損しているが、下辺に軽い両面調整の刃部を形成している。

27は砂岩の台石である。欠損しているが、稜線部を中心に粒状および筋状の敲打痕がみられる。

土壌墓 (S T 1005) (第19図)

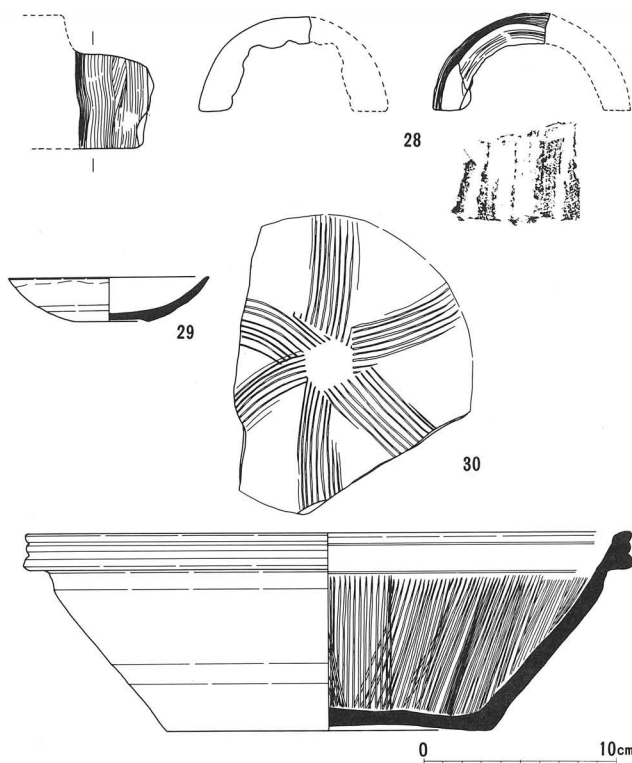
第1調査区東側斜面部で検出した土壌墓である。斜面側半分を後世の削平によって失っている。規模は、長辺1.85m、短辺は残存部分で0.86m、深さ12cmを測り、長方形のプランを有している。覆土は粘土質で、非常によく締まっている。中央部にS T 1004と同じように、3 cm程度の浅い落ち込みがみられ、長さ1.42m、残存幅0.52mの規模を測るが、明瞭ではない。

覆土中より、弥生土器片69点、サヌカイト片1点を出土するが、土器はごく細片で、風化も激しく、時期を決定することは困難である。しかし、規模、構造が似ていることから、S T 1004と同性格、ほぼ同時期の遺構であると考えられる。

②近世

便槽（SK1001）（第20図）

第3調査区の試掘トレンチNo.2で、表土直下で検出された。確認のためトレンチを広げたところ、炭化物と焼土の詰まった浅い土坑（SK1002）が検出され、民家別棟につくられた便所と風呂の焚き口であることが判明した。SK1001は残存部で1.3m×1.4mの隅丸形状のプランを有する。断面形状は屈折した三角形を呈し、深さは86cmを測る。陶器搦鉢、



第21図 SK1001出土遺物実測図

灯明皿、丸瓦の玉縁部分が出土している。便所廃棄の際の儀礼と考えられ、民俗例が知られる⁽⁵⁾。

搦鉢の形状から時期は18世紀後半期が考えられ、聞き取り調査ともほぼ一致する。

出土遺物（第21図）

28は丸瓦の玉縁である。表面をハケメ調整、内面に布目を残す。黄橙色を呈し、煤の付着がみられる。29は灯明皿である。京焼で、口縁部から内面に浅黄色の釉を施し、外面に煤の付着がみられる。30は備前系の搦鉢である。体部内面に13～14条の櫛描条線を隙間なく施し、底面は、放射状に8～9条単位で施される。口縁端部は肥厚し、2条の凹線を巡らせる。

③遺構に伴わない遺物（第22・23図）

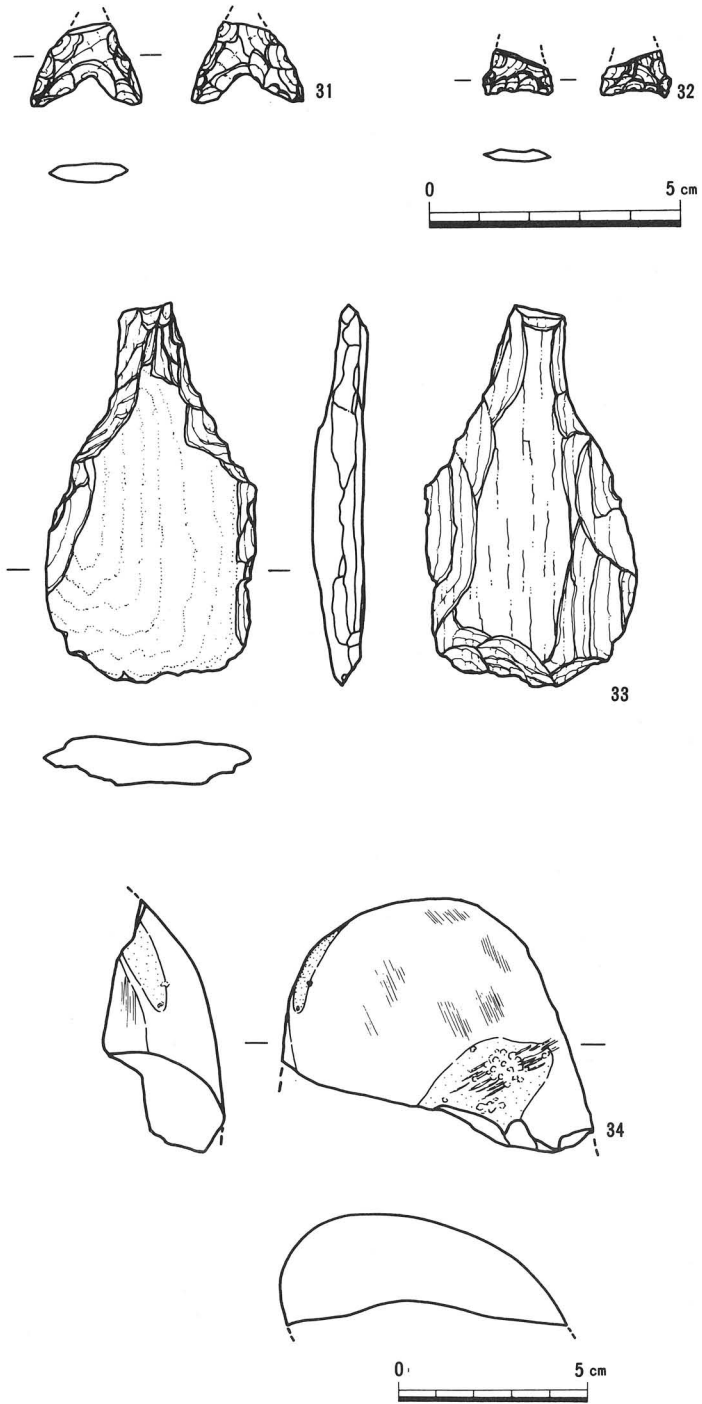
31、32は石鏃である。31は第1調査区の表面採取であるが、風化の度合が他と比べて著しく、基部の抉りも深いことから、縄文時代のものである可能性が高い。32は第3調査区で出

土し、S B 1001に関連する時期のものではないかと考えられる。

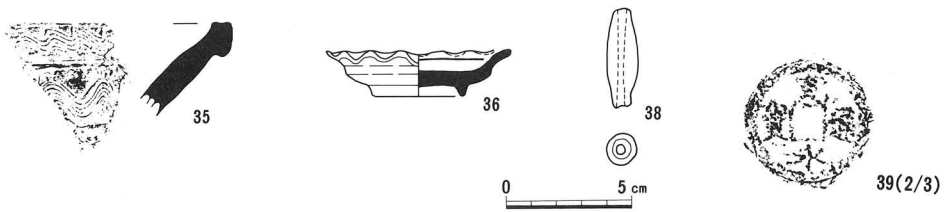
33は結晶片岩製の打製石斧であるが、基部と体部が肩をもって区別される、いわゆる有肩石斧Ⅰ型の類⁽⁶⁾であり、土掘り具として使用されたものであろう。弥生時代の遺物包含層から出土している。

34は磨石である。破損品で、全体像は不明であるが、楕円礫であったと推定できる。ほぼ全面を磨面としており、一部にしか自然面とみられる部分は残っていない。自然面の一部に粒状・筋状の敲打痕がみられる。石材は、肉眼観察では石英班岩とみられる。

35は須恵器である。第1調査区南東部斜面、F-7グリッドから出土した。器台の口縁部とみられ、口縁端部外面と、口縁直下に櫛描波状文を施す。古墳時代後期（陶呂編年

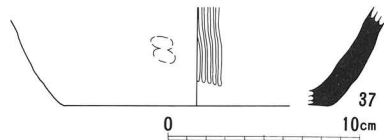


第22図 遺物包含層等出土遺物実測図 (1)



T K 209段階)と思われる。

36は瀬戸・美濃系の輪花皿である。削りだし高台で、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部を棒状工具によって押さえる。高台裾を除き、浅黄色の釉を施す。



37は須恵質の播鉢である。内面の条線は5条 第23図 遺物包含層等出土遺物実測図 (2)まで確認できる。

38は紡錘形の管状土錘である。39は銅銭、「寛永通寶」。径24mmを測る。

(3) まとめ

天神山遺跡は、調査対象地内の、耕地整理・採土等による旧地形の改変が激しく、尾根の部分および東斜面のごく一部で弥生時代の遺構面が検出されたほかは、遺構面は残存していない。尾根の部分では、頂部が削平されているものの、斜面部では土墳墓とみられる遺構5基、土坑9基が検出された。土坑は、確定できないものの、土墳墓ないしはそれに近い性格を持つものと思われ、土墳墓（S T 1004）と同じ後期前葉を中心とする時期が考えられる。この尾根上は墓域と考えられる。

集落の存在については、東斜面部で検出されたS B 1001が所属年代もほぼ一致し、その一部を構成していたと考えられる。しかし、一辺3 m強の小規模住居1基のみであり、戦闘用石鏃が多く出土していること、炬が浅く小さいこと、常時使用された住居と考えるよりは見張り小屋的な存在であった可能性がある。この斜面部の弥生時代の遺構面は現在では住居跡周辺を除いて失われているが、比較的深い庚申西谷川に面する斜面部に集落の中心があったと考えるよりは、調査区外の尾根の南側周辺が、遺物散布地として知られており、この周辺を集落の中心と推定しておきたい。

この地域は1963年の文化財基本調査で天神山古墳群とされる地域の一部に含まれている。同古墳群については、その後調査もなく、実態はまったく不明であるが、須恵器器台の出土

は、削平された尾根頂部にかつて古墳が存在した可能性を示唆するものと考えられる。

注

- (1) 吉野川下流域での土器編年で後期の開始については、確立しているとは言えないが、諸特徴は、中期末から後期前葉の微妙な時期の様相を示しているものと考えられる。なお、吉備・讃岐地方、あるいは県内で後期初頭に位置づけられる土成町北原遺跡の広口壺は口縁端面が内傾するのに対し、本遺跡例は端面が直立することに特色が見いだせる。
- (2) 松木武彦「弥生時代の石製武器の発達の地域性－特に打製石鏃について－」『考古学研究』35
－4 1989
松木氏は、佐原 真氏の1964年の論(「石製武器の発達」『紫雲出』詫間町文化財保護委員会)を踏襲しながら発展させ、狩猟用石鏃と戦闘用石鏃の区分の境界値として、全長30mmもしくは重量2gを目安として設定し、これ以上の値を示すものを戦闘用石鏃と捉えている。
- (3) 谷 匡人・林慎二『土成町北原遺跡－内陸工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』徳島県教育委員会1988
久保脇美朗「北原～大法寺遺跡」高岡裕「前田遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報V o 1. 2』 1991
- (4) 口縁端部の凹線も退化しており、甕形土器の内面ヘラケズリが下半部から、上半部までおよぶ段階を、後期の始まりのメルクマールとする考え方に従い、後期前葉のものとする。
- (5) 便所廃棄の際、便槽に農具などを入れる例がある。燈明皿や播鉢といった生活用具を廃棄時に投入するのも、同様の例と考えられる。
- (6) 神村 透「石製耕作具」『弥生文化の研究5 道具と技術I』雄山閣 1985

B 青谷遺跡

(1) 基本層序

本遺跡の基本的な層序は第24図に示した通りである。各調査区とも、耕地整理等の削平・盛土を行っているところが多くみられる。また、遺跡の範囲が広いことから、各調査区ごとで異なるが、比較的単純な堆積状況をしめしている。したがって、柱状図で提示している。柱状図の位置については、第25～27図にその地点を番号で記入している。

遺跡の西端を庚申西谷川、中央に青谷、東端に前坂口谷川が南流するが、いずれも小河川で、遺跡周辺では開析作用は進んでいない。前坂口谷川で小扇状地状をなす他は、山麓緩斜面である。土質は、扇状地の多い阿讃山麓には珍しく、泥岩風化土が主体をなしており、砂岩はあまり含まれていない。第1調査区から200mほど庚申西谷川をさかのぼった地点で、中央構造線断層系の破碎帯が観察できる。

第1調査区は、泥岩小礫を多く含んだ堆積層を地山とし、その上に黄褐色ないしは、にぶい黄橙色の泥岩風化土の5・6・8層が遺物包含層として被る。遺物の所属年代は旧石器から近世の間と幅広いが、密度は薄い。その上層については、段々畑に耕地整理された際の盛土等が堆積している。

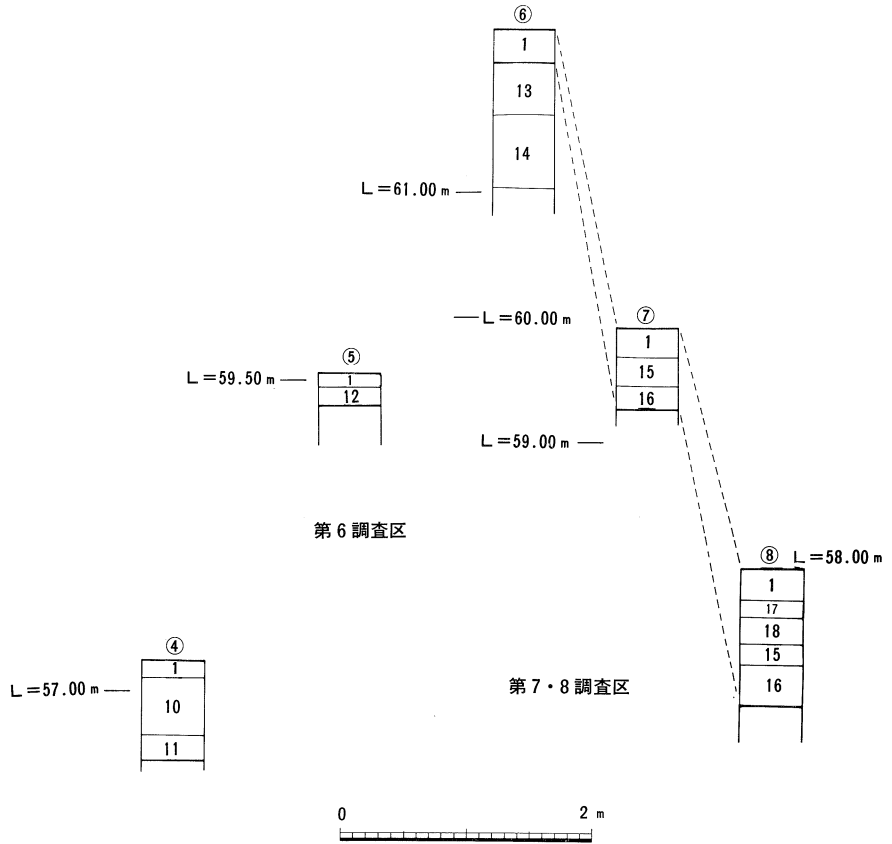
地山下層の暗褐色砂礫層中からも、第1調査区D地区で削平された部分から縄文時代早期に特徴的とされる形態の石鏃が出土し、炭化物が付近に散った状態が観察されたので、精査を進めたが、遺構は検出されなかった。早期の包含層ないしは遺構面の可能性は残るが、この砂礫層を分層することはほとんど不可能であったので、断念した。

第2調査区は、本遺跡では最も明確な遺物包含層が存在する。段々畑に耕地整理され、果樹園となっていたが、果樹を植える掘り方も、遺物包含層にはほとんど影響を与えていない。基本の堆積は表土、盛土、遺物包含層、地山である。出土遺物は弥生時代に限られる。

地山は第1調査区と基本的に同じで泥岩小礫を多く含んだ堆積層である。

第6調査区は、表土下は遺物包含層にあたる層が堆積するが、遺物の密度は極めて薄い。遺構面は他の調査区と同じである。

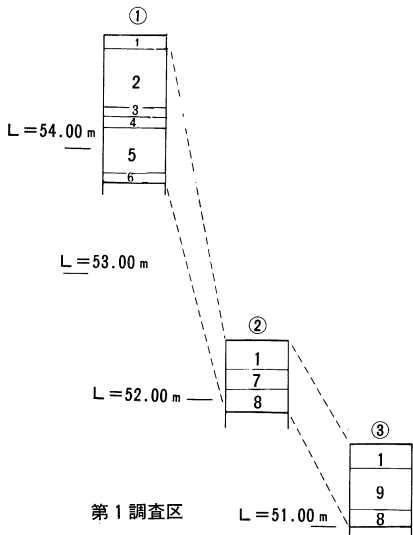
第7・8調査区も基本的には同じであるが、⑥地点は耕作土下が遺構面と捉えられ、⑦・⑧地点では16層が遺物包含層、15層は古い時期に耕地整理した際の盛土と考えられる。第8調査区はさらに水田化したために、北側を削り、南側の旧耕作土上に盛土が行なわれている。16層は、縄文時代以降の遺物が包含されているが、その密度は薄い。



第6調査区

第7・8調査区

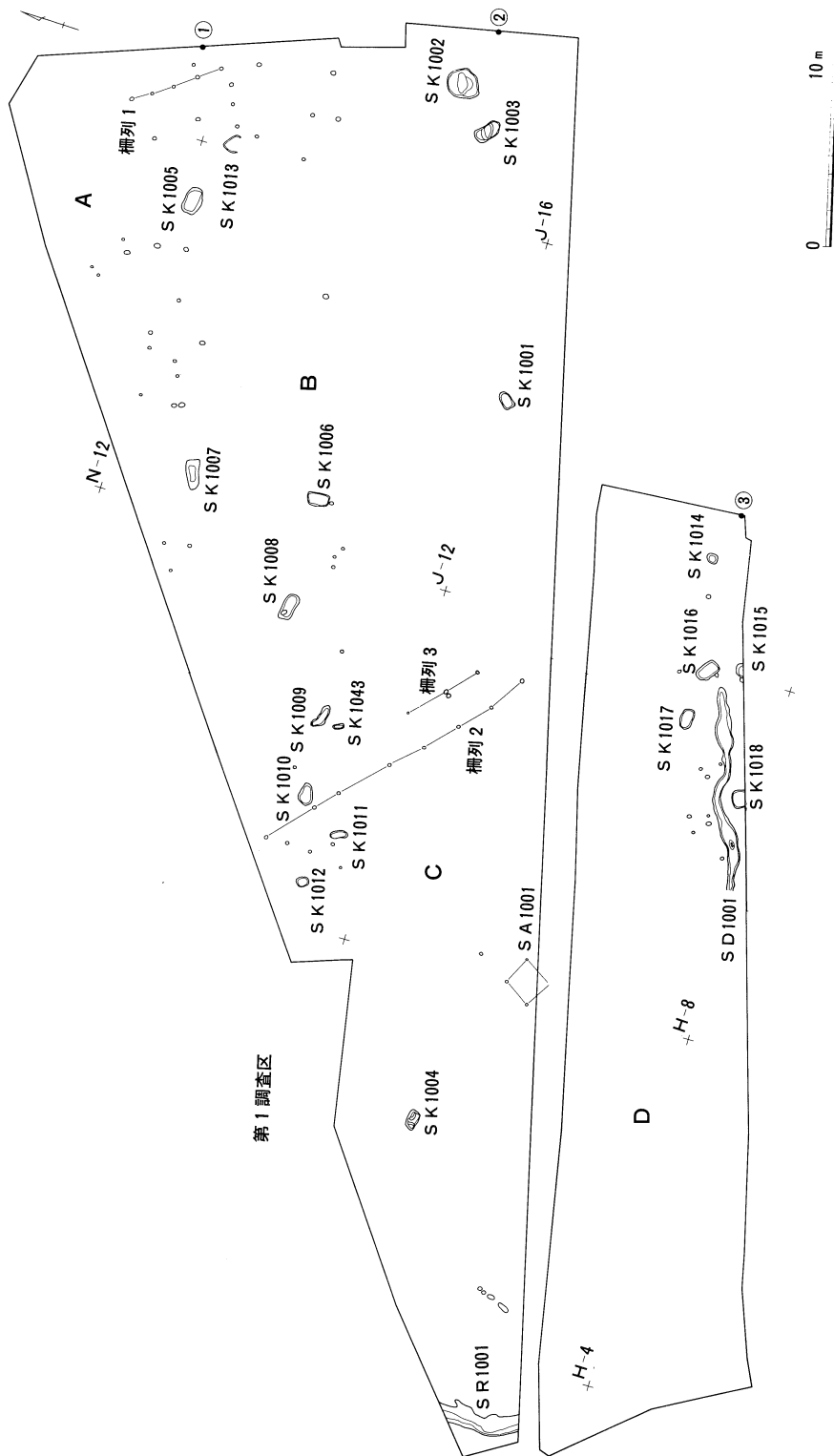
第2調査区



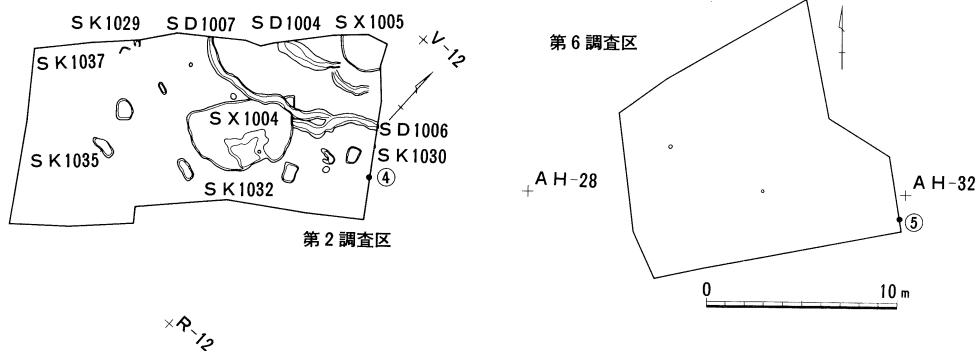
第1調査区

1. にぶい黄褐色10Y R4/3砂質土(耕作土)
2. 黄褐色10Y R5/8砂質土(盛土)
3. 明黄褐色10Y R6/6粘性砂質土(盛土)
4. 黄褐色10Y R5/8粘性砂質土
5. 黄褐色10Y R5/8粘性砂質土(包含層)
6. 明黄褐色10Y R7/6粘性砂質土(包含層)
7. にぶい黄褐色10Y R5/4粘性砂質土(盛土)
8. にぶい黄褐色10Y R6/4粘性砂質土(包含層)
9. 黄褐色10Y R8/6砂質土(盛土)
10. にぶい黄褐色10Y R7/4粘性砂質土(盛土)
11. 灰黄褐色10Y R6/2粘性砂質土(包含層)
12. にぶい黄褐色10Y R5/4砂質土(包含層)
13. 明黄褐色10Y R7/6粘性砂質土(地山)
14. 灰黄褐色10Y R6/2粘土(地山)
15. にぶい黄褐色10Y R6/4砂質土(盛土)
16. にぶい黄褐色10Y R7/4粘性砂質土(地山)
17. 明黄褐色10Y R7/6粘性砂質土(盛土)
18. 褐灰色10Y R6/1粘性砂質土(旧耕作土)

第24図 青谷遺跡 基本土層実測図



第25図 青谷遺跡 遺構配置図 (1)



第26図 青谷遺跡 遺構配置図 (2)

なお、⑥地点の14層は、第2調査区の遺物包含層と同じような堆積状況にある。チャート剥片、上面からチャート製石鏃が出土しているが、この層が削平により露出している第7調査区B地区の北東部では、それ以外の遺物の出土はなかった。第2遺物包含層の可能性があったが、遺物の包含密度はかなり薄いと想着て、露出地点だけの精査で終了した。

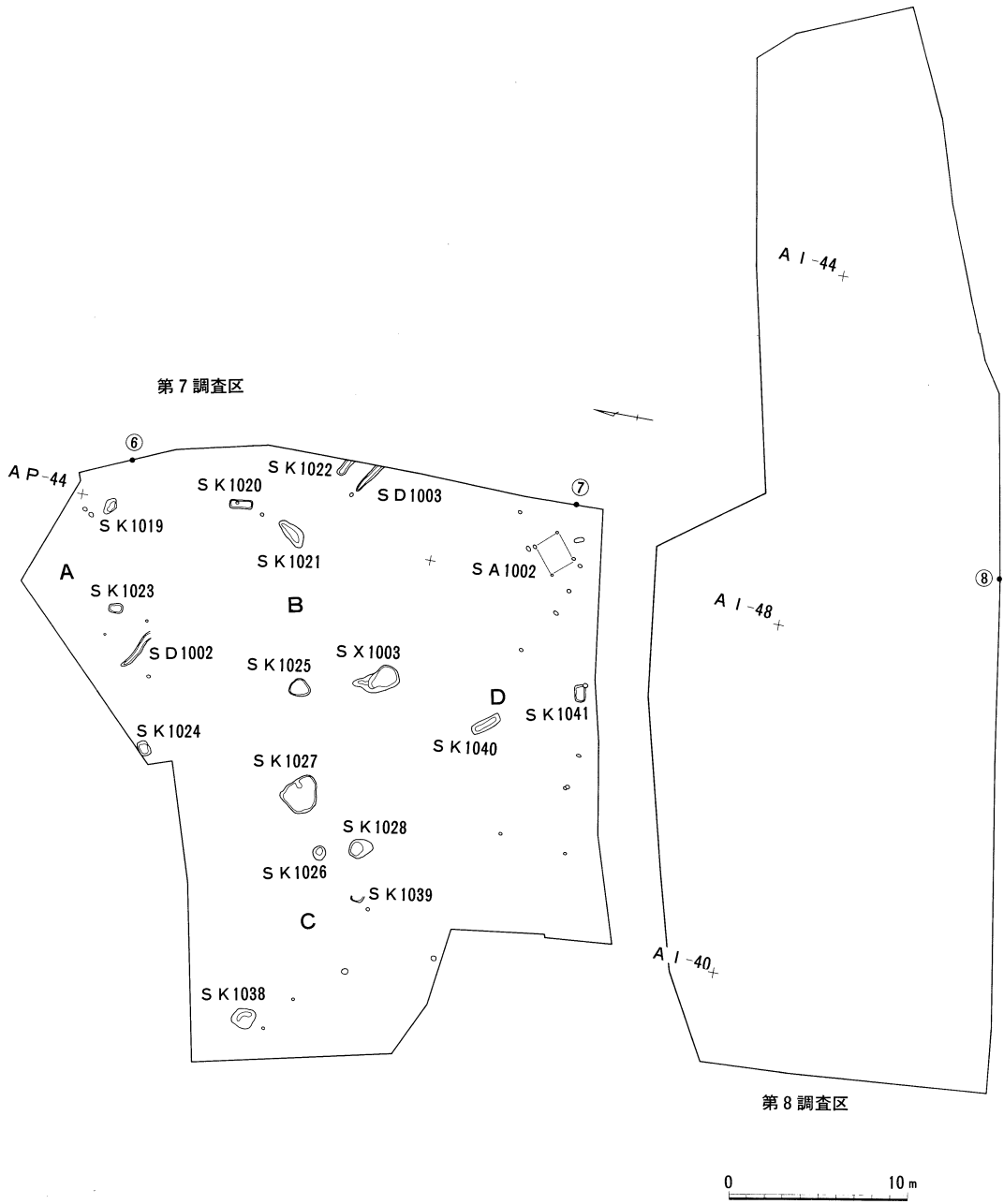
(2)遺構と遺物

第1調査区(第25図)は、畑地一筆ごとにA～D地区の副記号を付けているが、各調査区とも北端は削平され、遺構面が残っていない。特にD地区は東南側の一部に遺構面が残存するだけである。遺構面の残存部分では、弥生時代の可能性のあるものから、中近世にいたる遺構が検出されている。土坑19基、ピット82基、溝1条、流路1条であるが、このうちピットは、1間×1間の建物跡になるもの1軒、および、柵列状に並ぶ箇所が3ヵ所あるが、いずれも所属時期等は不明である。

第2調査区(第26図)は、弥生時代の遺構が、土坑9基、ピット4基、溝4条、不明遺構2基検出されている。溝はSX1005を囲むように、弧状に巡りその外側に土坑・ピットが検出されている。

第6調査区(第26図)は、ピット2基が検出されているのみで、所属時期も不明である。

第7調査区(第27図)は、耕地整理で棚田になっているが、上段の水田をA地区、中段の水田を分割調査にともなって、東半をB地区、西半をC地区とし、下段をD地区とする。調査地はB・C地区の北辺で削平を受けているが、ほぼ遺構面は残存する。土坑14基、ピット29基、溝2条、不明遺構1基が検出されているが、弥生時代のものを中心に、縄文時代の可能性のあるものから、中近世のものまでが混在しているとみられる。このうち、SD1002・SD1003の2条の溝はA地区とB地区で検出されているが、本来は同一の遺構が削平によって分離したもので、途中にある弥生時代とみられるSK1021の存在から、かなり新しい時期の

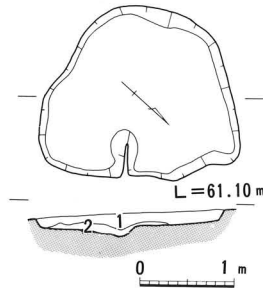


第27図 青谷遺跡 遺構配置図 (3)

ものと考えられる。また、D地区東端で、1間×1間の建物跡が検出されたが、所属年代は不明である。

第8調査区(第27図)は、北半が完全に削平され、遺構面の残りは南半に限られるが、遺構は検出されなかった。

①縄文時代



- 1. にぶい黄褐色10Y R7/4 粘性砂質土
- 2. 明黄褐色10Y R7/6粘性砂質土

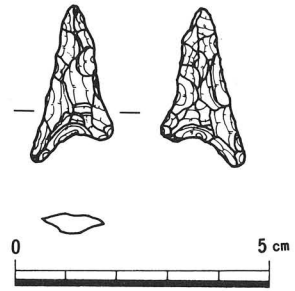
第28図
S K 1027実測図

土坑 (S K 1027) (第28図)

第7調査区B地区で検出された土坑である。不整形であり、長軸2.1m、短軸1.8m、最深部で24cmを測るが、北東辺中央部に、地山の稜が残り、2つの土坑の切り合ったものとも考えられる。混入の可能性も考えられる石鏃が1点出土しているだけで、性格等は不明である。

出土遺物 (第29図)

1は凹基無茎の石鏃である。サヌカイト製で、形状から、縄文時代のものと考えられる。

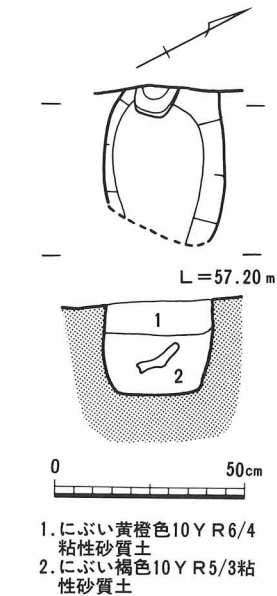


第29図
S K 1027出土遺物実測図

②弥生時代

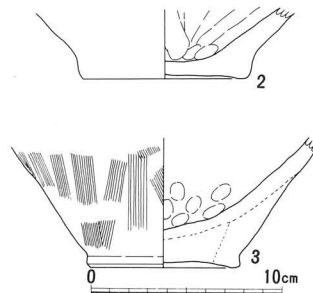
土坑 (S K 1029) (第30図)

第2調査区の北端で検出された土坑である。土坑の南端を試掘により欠失し、北端は調査区外に延びている。規模は長軸の検出部分で0.4m、短軸は0.3m、深さは25cmを測る。覆土は2層に分層できるが、いずれも締まりがある。弥生土器以外には出土遺物もなく、性格も不明である。



- 1. にぶい黄褐色10Y R6/4 粘性砂質土
- 2. にぶい褐色10Y R5/3粘性砂質土

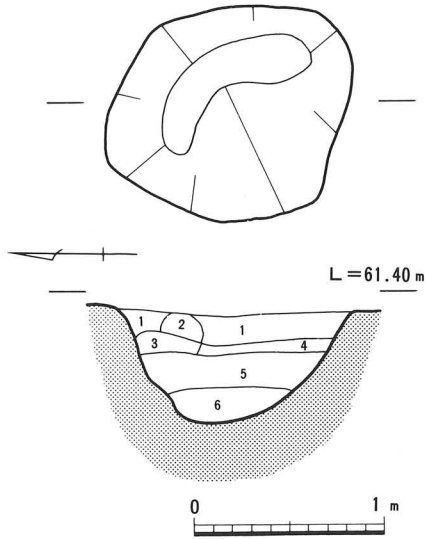
第30図 S K 1029実測図



第31図 S K 1029出土遺物実測図

出土遺物 (第31図)

弥生土器片が2点出土している。いずれも壺形土器の底部とみられる。2は内面のユビオサエ、ユビナデが目立つ。3は、底部輪台技法を用い、体部外面はタテハケとナデ、内面はユビオサエが顕著である。他の包含層等の出土土器にも共通するが、全体のプロポーシオンや口縁部形態の判然とするものはほとんどなく、時期の決定には良好な資料とはいえない。



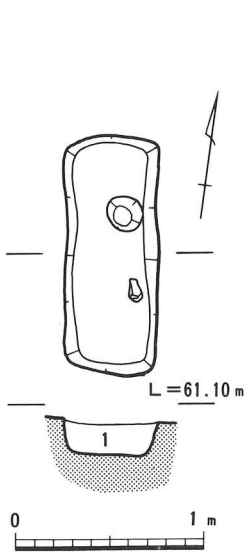
1. にぶい黄褐色10Y R7/4砂質土炭化物含む
2. にぶい黄褐色10Y R6/4砂質土(焼土含む)
3. にぶい黄褐色10Y R5/4砂質土(焼土・炭化物含む)
4. にぶい黄褐色10Y R5/4砂質土
5. にぶい黄褐色10Y R7/4粘性砂質土
6. 明黄褐色10Y R7/6粘性砂質土

第32図 S K 1038実測図

土坑 (S K 1038) (第32図)

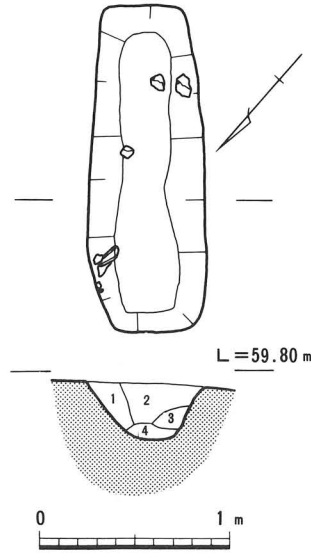
第7調査区C地区で検出された土坑である。不整楕円の形状を呈し、長軸1.4m、短軸1.25mを測る。断面形はU字状を示し、最深部で、54cmを測る。覆土は6層に分層でき、1層には炭化物粒、2層には焼土塊、3層はその両者を含む。土坑壁は直接熱を受けた痕跡はない。遺物

物は、弥生土器片が、13点出土しているが、いずれも細片で、図化できるような個体はない。



1. 明黄褐色
10Y R7/6粘性砂質土

第33図
S K 1020実測図

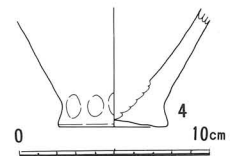


1. 明黄褐色10Y R7/6粘性砂質土
2. にぶい黄褐色10Y R7/3粘質土
3. にぶい黄褐色10Y R6/4粘性砂質土
4. にぶい黄褐色10Y R6/4粘質土

第34図 S K 1040実測図

土坑墓 (S K 1020) (第33図)

第7調査区B地区で検出された。長辺1.26m、短辺0.5mの長方形を呈する。断面形は逆台形を呈し、深さは16cm



第35図
S K 1040出土遺物実測図

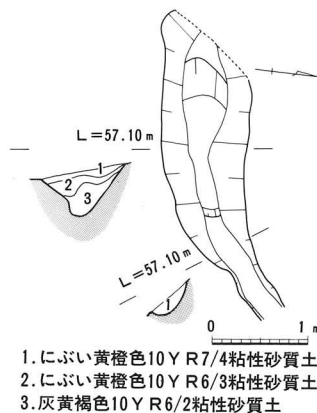
を測る。出土遺物は、サヌカイト片1点のみであるが、規模・形状から土壌墓である可能性が強いと考えられる。

土壌墓（S K 1040）（第34図）

第7調査区D地区で検出された。長辺1.74m、短辺0.62mの長方形を呈する。深さは30cmを測り、断面形は角の丸い逆台形を呈する。弥生土器片が壁際に集中し、一方では握り拳大の砂岩礫が3点検出された。規模・形状からS K 1020と同様、土壌墓である可能性が強いと考えられる。

出土遺物（第35図）

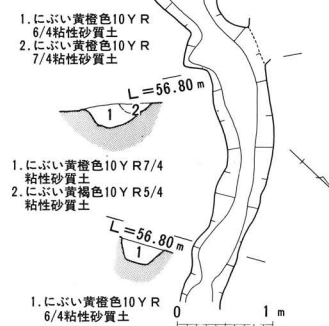
弥生土器片が17点出土している。その中で、甕の底部と思われる個体を図化した。底部端をやや外方に拡張し、体部は内彎気味にたちあがる。



第36図 S D 1004実測図

溝（S D 1004）（第36図）

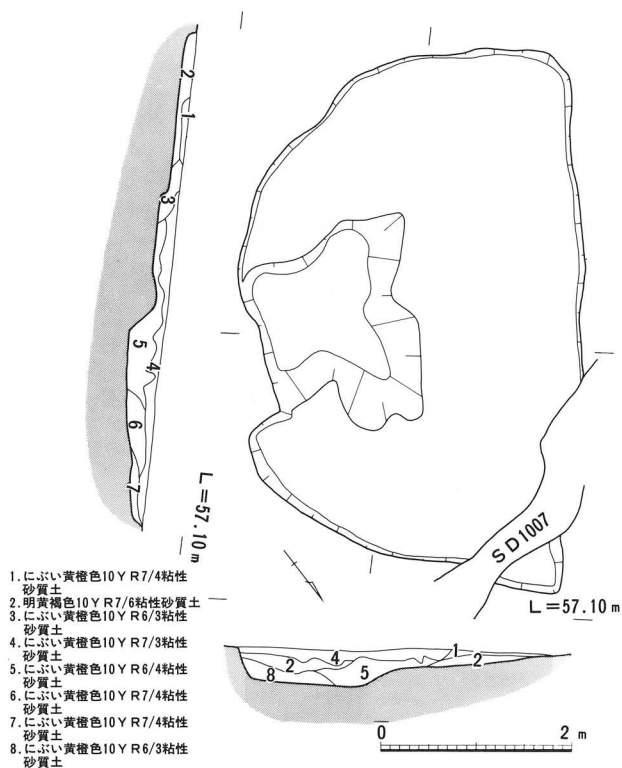
第2調査区、北端で検出された弧状に回る溝である。溝の断面はV字状を呈し、検出部分の東端で急に浅くなり、断面形U字状となる。規模は、検出部分の長さ3.3m、幅は0.9m~0.3m、深さは最深部で50cm、浅い部分で13cm程度である。覆土は非常によく締まり、炭化物と、弥生土器片を出土する。全体像が不明であるが、S X 1005付近を巡る形状をしていること、覆土の状況が他の溝とは異なることなどから、区画を目的とするものと考えられる。



第37図 S D 1006実測図

溝（S D 1006）（第37図）

第2調査区、不明遺構（S X 1004）より東に続く溝である。溝の断面は逆台形状を呈している部分が多い。検出部分で、総延長4.7m、幅は40~60cm、深さは18~27cmである。S D 1007と切りあっており、本遺構埋没後にS D 1007が再掘削されたものと考えられる。S X 1004との切り合い関係は確認できなかった。炭化物粒が出土しているのみで、他に遺物は出土していないが、直上の遺物包含層の状況から、弥生時代のものと考えられる。



1. にぶい黄橙色10Y R7/4粘性砂質土
2. 明黄褐色10Y R7/6粘性砂質土
3. にぶい黄橙色10Y R6/3粘性砂質土
4. にぶい黄橙色10Y R7/3粘性砂質土
5. にぶい黄褐色10Y R6/4粘性砂質土
6. にぶい黄褐色10Y R7/4粘性砂質土
7. にぶい黄褐色10Y R7/4粘性砂質土
8. にぶい黄褐色10Y R6/3粘性砂質土

第38図 S X 1004実測図

不明遺構 (S X 1004) (第38図)

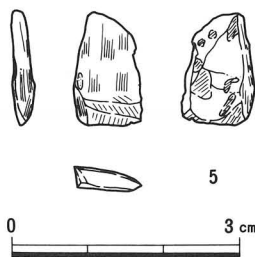
第2調査区、中央部で検出された不整形形状の遺構である。長軸5.8m、短軸3.17m、中央部で長軸2.3m、短軸1.6mの不整形に一段低くなる。深さは最深部で36cm、周辺部で12~3cmを測る。弥生土器片等を出土している。

出土遺物 (第39図)

出土したのは、弥生土器片20点、磨製石斧状石製品1点、チャート小礫1点、とわずかである。弥生土器片には図化に耐えられるものではなく、時期決定は難しい。

5は、磨製石斧状石製品である。蛇紋岩製で、長さ1.5cm、幅0.85cm、厚さ3cmと非常に小さいもの

である。両面・側辺ともに、一部には自然面・剝離面を残すものの、丁寧に研磨されている。しかし、この大きさのものを最初から意図したとは考えにくく、磨製石斧の破損した剝片を研磨・成形したものではないかと考えられる。



③古代・中世

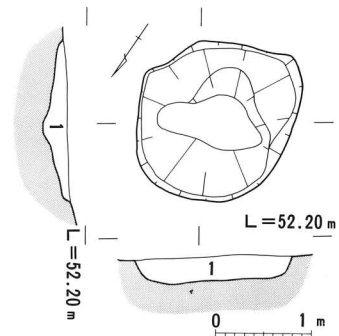
第39図 S X 1004出土遺物実測図 土坑 (S K 1002) (第40図)

第1調査区C地区で検出された不整形の土坑である。長軸2.0m、短軸1.6m、中央の最深部で25cmを測る。断面形は中央のくぼんだ逆台形に近い形状をしており、杯蓋と思われる須恵器の細片が1点だけ出土した。しかし、性格等は不明である。

土坑 (S K 1001) (第41図)

第1調査区C地区で検出された隅丸方形形状の土坑である。規模は、長軸1.02m、短軸0.65m、深さは30cmを測る。断面形は、逆台形状を呈し、上面はやや盛り上がる。赤褐色の焼土

と、炭化物がつまり、他には青磁と陶器の細片が各1点みられただけである。試掘で一部が確認された当初は、炭窯を予想したが、規模が小さく、炭生産の遺構とは考えにくい。同様の出土状態を示す遺構はS K 1014、S K 1024、S K 1026、S K 1041があるが、円形のもの、隅丸形状のものがみられる。用途は不明である。

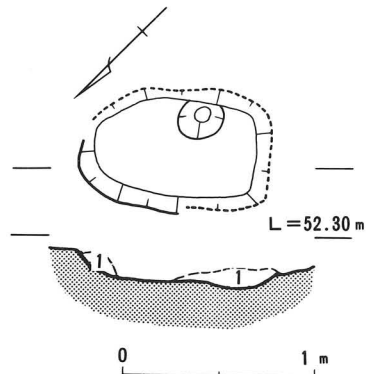


1. 明黄褐色10Y R6/6粘質土

第40図 S K 1002実測図

④遺構に伴わない遺物 (第42～44図)

6はナイフ形石器である。サヌカイトの縦長剥片を利用し、断面は台形に近い四辺形を呈す。基部および左側縁に細かな調整を施す。国府型ナイフの分布圏の中で異質なものと捉えることができるが、彫器である可能性も残している。第1調査区の遺物包含層から出土している。



1. 黄褐色10Y R5/6砂質土炭化物・焼土を多量に含む

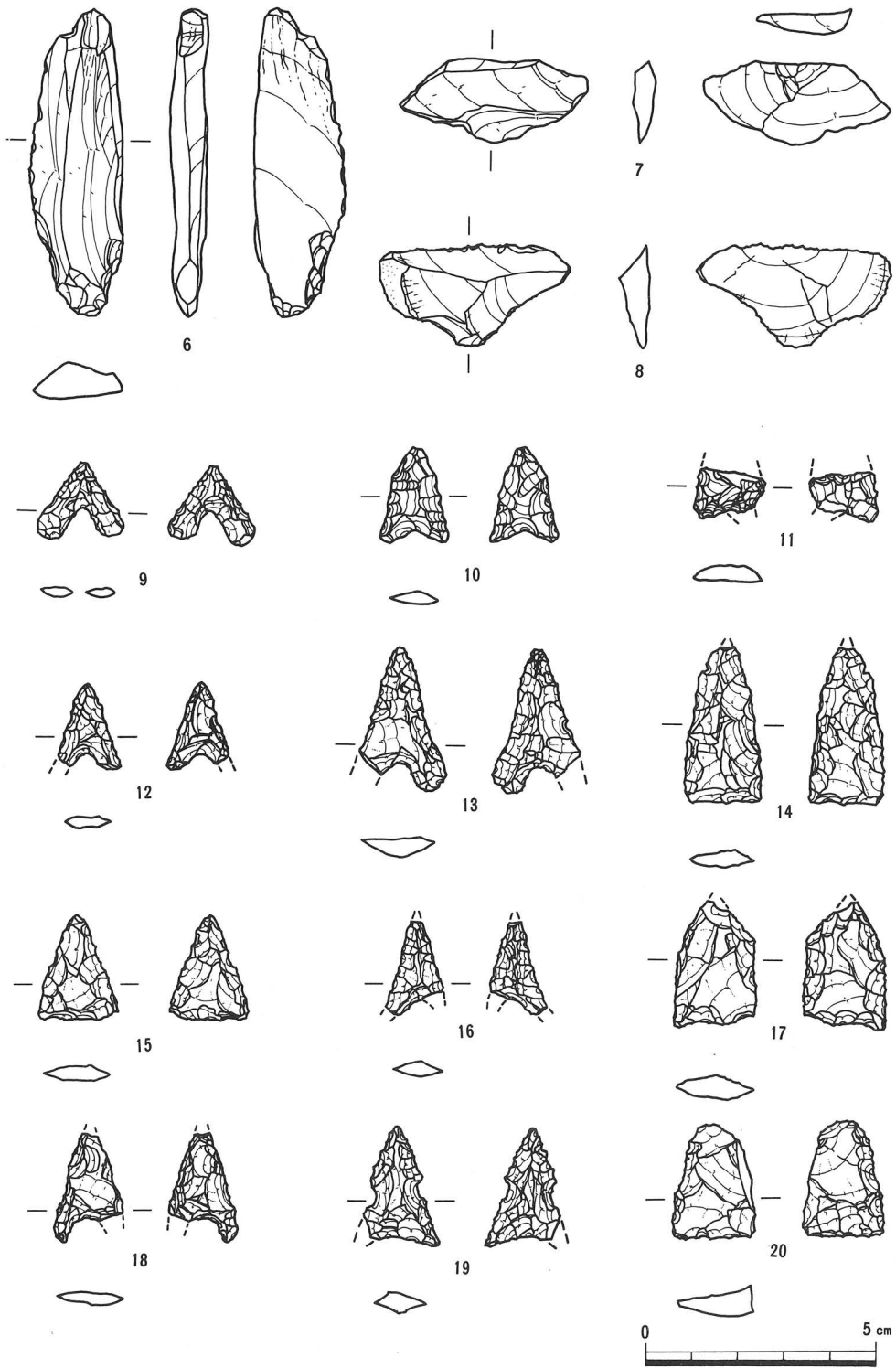
第41図 S K 1001実測図

7・8は横長剥片である。7の石材はサヌカイトで、風化が激しい。打面を形成し、連続的に剥離されたものの一つであると考えられる。主要剥離面側には打瘤が観察できる。その後の加工・調整は行なわれていない。8の石材はチャートで、特に顕著な加工・調整が行なわれているわけではないが、第7調査区の遺構面の下40cmの灰黄褐色粘土層から出土したのでとりあげた。

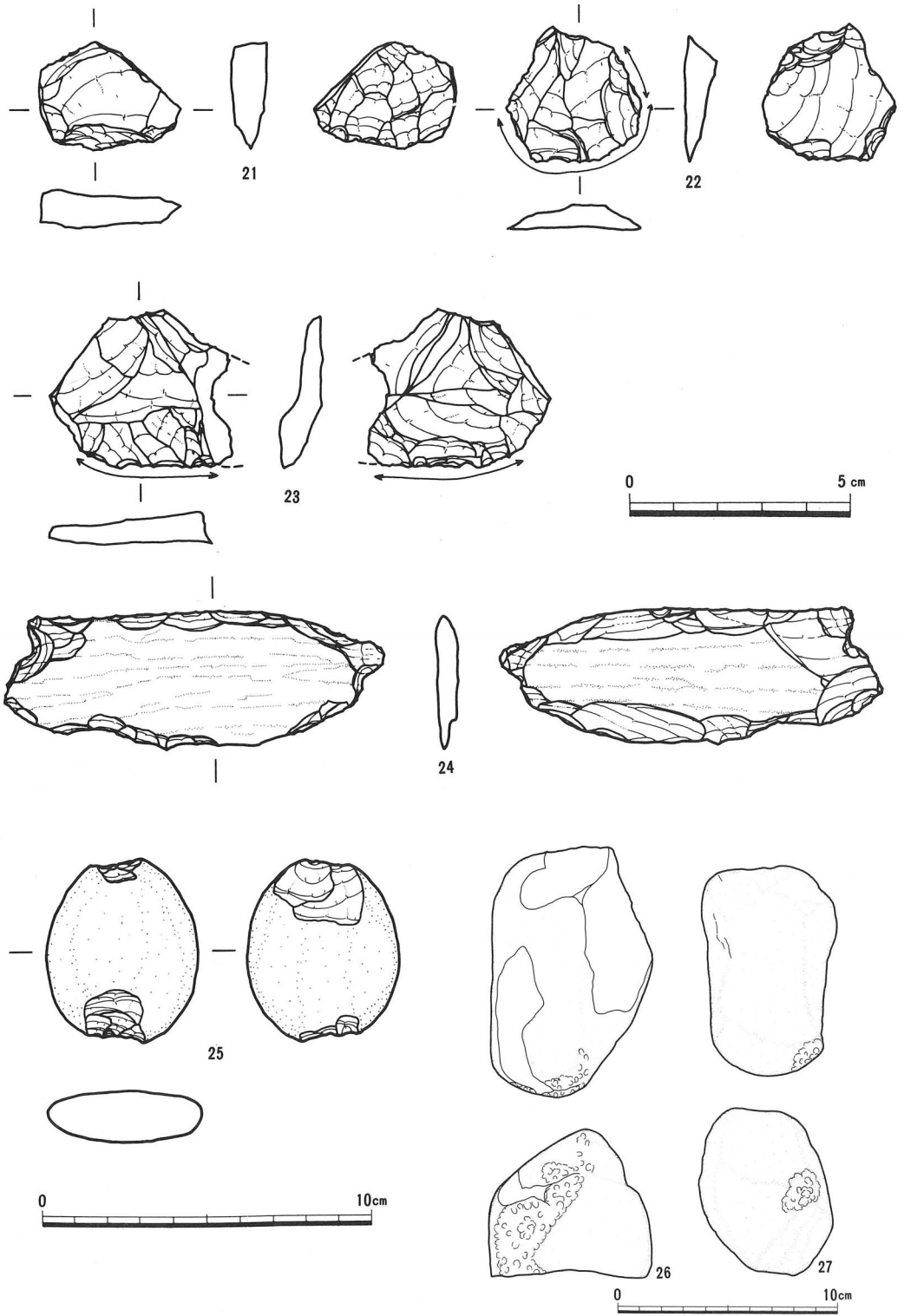
9～19は石鏃である。9は、正三角形で抉りの深い、いわゆる鋏形鏃である。第1調査区D地区の削平された部分の、暗褐色砂礫土中から出土した。鋏形鏃は、早期・押型文の時期に特徴的なものとされており、近辺で該期の生活跡が発見される可能性を残している。

10と11はチャート製の石鏃である。10は、白色のチャートを使用し、無茎凹基で基本形は五角形を呈する。第7調査区の灰黄褐色粘土層の直上で出土した。出土層位から、縄文時代でも古い時期に属するものと考えられる。11は、黒色のチャートが使用されているが、先端部および、脚端部を欠損しており、全体像は不明である。

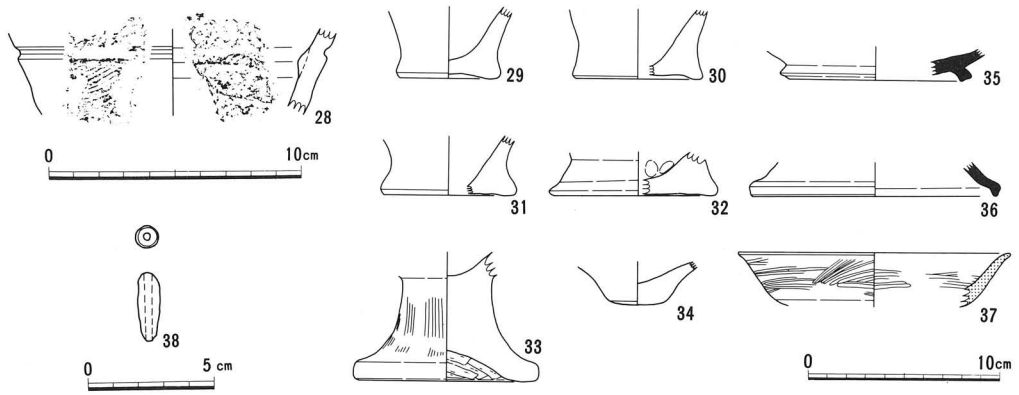
12～18はいずれも遺物包含層から出土したもので、すべて石材はサヌカイトである。12・13・16・18は深いU字状の抉りをもつ凹基無茎鏃、19は浅い弧状の抉りを持つ凹基無茎鏃で、これは両側縁にも抉りを持つ特異な形状を示している。また、14・15・17は平基無茎鏃である。形状などから13・14・18が縄文時代のもの、残りは弥生時代のものと考えられる。



第42图 遺物包含層等出土遺物実測图 (1)



第43图 遺物包含層等出土遺物実測図 (2)



第44図 遺物包含層等出土遺物実測図 (3)

20は、剥片であるが、下辺と左辺に丁寧な、調整が施されている。石鏃の未製品かと思われる。

21は、楔形石器である。下辺を除き裁断面で、下辺は両極打法による。

22・23はスクレイパーである。22は主として片面調整、23は両面調整による刃部形成がなされている。

24は石庖丁である。緑色片岩の偏平な自然石を利用している。両端部にわずかではあるが抉りを施す。

25は石錘である。偏平な円礫の両端を打ち欠いている。

26・27は叩石として捉えた。26が石英、27が黒色のチャートであり、敲打痕は判然としない。両者とも遺構面上で並んだ状態で検出された。吉野川北岸地域で弥生時代の墓に伴う白色ないしは黒色の円礫ではないかとも考えられたが、それにあたる土坑も検出されず、敲打痕らしき部分をとどめることから、叩石とした。

28は、縄文土器の浅鉢である。小片から径を起こしたので、やや不安な部分がある。外面に1条の沈線、内面には断面三角形の貼付突帯を巡らし、両者でくびれのような形状をなす。内外面ともに無節Lの縄文を施す。

29～34は弥生土器である。29～32は甕の底部と考えられる。いずれも、底面は薄く、底部端を外方に拡張させている。33は脚台部である。接地面が大きく、中実の脚柱部をもつ。わずかに残る受部の傾きから台付鉢とみられる。以上はいずれも第2調査区の遺物包含層から出土した。これらは弥生時代中期の様相を示すものと考えられる。

34は鉢の底部と考えられる。丸底に近いもので、時代は下るものではないかと考えられる。

35・36は須恵器である。35は杯の底部、断面方形の貼付高台をもつ。高台の形状から陶邑編年TK7段階が考えられる。36は脚台部である。端部を下方に拡張し、外彎気味に内傾する。上限は陶邑編年TK217段階まで上る可能性がある。

37は瓦質土器の杯である。横方向のヘラミガキが目立ち、口縁端部は尖り気味に仕上げている。16～17世紀に位置づけられるのではないかと考えられる。

(3)まとめ

青谷遺跡は、耕地整理・採土等による原地形の改変などにより、調査区が点在するような形となった。検出された遺構は、集落的様相を示すものはなく、第2調査区でやや密度が高いが、全体には散在的で、遺構の性格の判然とするものはほとんどなく、特に住居に関する遺構がない。

遺物の面からみると、旧石器時代のナイフ形石器・横長剥片、縄文土器・石鏃、弥生土器、須恵器、土師質土器、陶磁器類など少量ではあるが、多種にわたり出土している。

このなかで、チャート製の石鏃は、包含層出土であるが、石器石材利用の点からも着目されてよい遺物のひとつであろう。チャートを産する三波川帯・秩父帯である県南地方では、廿枝遺跡、古屋岩陰遺跡はチャートを主体とするが、石材としてはサヌカイトも優勢で、時代が下るほどにその傾向が強いと言われている⁽¹⁾。吉野川流域地方では、小形の剥片石器の素材はほとんどがサヌカイトであるが、チャート製の剥片石器は、赤坂遺跡(Ⅱ)の石核、桜ノ岡遺跡(Ⅲ)の細石刃、金蔵～上井遺跡の旧石器群、前田遺跡の有舌尖頭器、柿谷遺跡のナイフ形石器など、近年その例は増加している⁽²⁾。それらの諸例は旧石器ないしは縄文時代の古い時期にあたるものと考えられており、本遺跡例も同様のものと考えられる。県南地域との交流を考える上でも貴重な資料の一つといえよう。

注

(1) 久保脇美朗氏のご教示による。また、高島芳弘氏のご教示によると、県南・那賀川中流域の相生町鮎川で486点の石器を採集しているが、そのうち400点がサヌカイト製、84点がチャート製であるという。時期は採集土器から縄文時代後期が考えられている。

(2) 久保脇美朗「金蔵～上井遺跡」高岡裕 他「桜ノ岡遺跡(Ⅲ)」『徳島県埋蔵文化財センター年報V〇1. 1』1990

松永住美 他「赤坂遺跡(Ⅱ)」高岡裕「前田遺跡」池渕茂 他「試掘調査」『徳島県埋蔵文化財センター年報V〇1. 2』1991

第1表 天神山遺跡遺構一覧表

遺構名	検出地点	規模 (cm)			平面形	出土遺物	時期	特徴・備考	挿図番号
		長軸	短軸	深さ					
S B 1001	3区 B (N-13)	305	(305)	28~10	隅丸方形	弥生土器 石鏃 サヌカイト片 台石 磨石 炭化物	弥生 後期前葉		7, 8, 9, 10
S K 1001	3区 B (N-10)	(130)	(140)	86	隅丸方形	陶器	近世	便槽	20, 21
S K 1002	3区 B (M-11)	120	70	(3)	隅丸方形	炭化物 焼土	近世	風呂の焚き口	
S K 1003	1区 A (G-3)	(130)	(75)	(14)	楕円形	弥生土器 炭化物	弥生	上面削平	11
S K 1004	1区 A (H-3)	(45)	(45)	(22)	不整形	炭化物	不明	上面削平	
S K 1005	1区 A (H-4)	(98)	(55)	(18)	不整形	炭化物	不明	上面削平	
S K 1006	1区 A (G-4)	(115)	(81)	(11)	長方形	炭化物	不明	上面削平	
S K 1007	1区 A (G-3)	193	132	15	長方形	弥生土器 炭化物	弥生		12
S K 1008	1区 A (F-3)	150	90	15	長方形	弥生土器 炭化物 打製石庖丁	弥生		13, 14
S K 1009	1区 A (E-3)	150	90	11	楕円形	炭化物	不明		
S K 1012	1区 B (L-5)	116	63	8	楕円形		不明		
S K 1013	1区 B (J-5)	121	85	15	不整形		不明		
S T 1001	1区 A (H-3)	(90)	(58)	(7)	長方形	弥生土器 打製石庖丁 白色円礫	弥生		15, 16
S T 1002	1区 A (H-4)	(65)	68	(10)	長方形	炭化物 弥生土器	弥生		
S T 1003	1区 A (I・H-3)	80	57	10	長方形	炭化物	弥生		
S T 1004	1区 A (G・H-3)	外218 内185	外155 内68	外23 内44	長方形	弥生土器 サヌカイト スクレイパー 石鏃 台石 炭化物	弥生 後期		17, 18
S T 1005	1区 B (I-6)	外185 内142	外(87) 内(52)	外(12) 内(3)	長方形	弥生土器 炭化物	弥生	半分削平	19

() は残存長

第2表 天神山遺跡 S B 1001出土遺物観察表

番号	器種	層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
1	弥生土器 広口壺	覆土	口径16.2	直立する頸部からゆるやかに外反する口縁部をもつ。 口縁端部は上下に拡張し、端面に2条の弱い擬凹線を施す。	口縁部内外面ともヨコナデ。 頸部内面はヨコナデ。 頸部外面はタテハケのちヨコナデ。 2カ所外傾接合痕が観察できる。	1mm砂粒 多含 石英 チャート	(内) 浅 黄橙 (外) 橙	
2	弥生土器 壺(?)	覆土	底径8.4	底面は平底を呈し、体部は直線的に外方にたちあがる。	体部外面 タテハラミガキのちナデ。 底面および内面はナデ。	2~4mm 砂粒含 結晶片岩 石英	(内) 黒 褐色 (外) 浅 黄橙	
3	弥生土器 壺(?)	覆土	底径4.6	底面は平底を呈し、体部は内彎気味に大きく外方にたちあがる。	内外面ともナデ。	1~3mm 砂粒含 石英 結 晶片岩	(内) 橙 (外) 赤 褐色	

番号	器種	層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
4	弥生土器壺	覆土	底径3.8	底面は平底を呈す、体部はわずかに内彎気味に大きく外方にたちあがる。	外面は剝離のため不明。内面はナデ。	1～2mm 砂粒含 石英結 晶片岩	(内)黄 褐色 (外)橙	
5	弥生土器甕	覆土	口径21.8	内彎する体部から「く」の字状に屈曲して、外反する口縁部をもつ。口縁端部はわずかに肥厚させ、平坦におさめる。	口縁部内外面はヨコナデ。体部は剝離のため内外面ともに不明。	1～2mm 砂粒含 石英 結晶片岩	(内)暗 灰黄色 (外)黄 橙	
6	弥生土器甕	覆土	口径10.6	体部から「く」の字状に屈曲して、外反する口縁部。端部は肥厚させるとともにわずかに上方に拡張し、端面は平坦におさめる。	剝離が激しいが内外面ともヨコナデ。	1～2mm 砂粒含 石英	(内外) 黄橙	
7	弥生土器甕	覆土	底径6.6	底面はほぼ平底を呈する。	体部外面はヘラミガキ、外面はヨコナデ。底面はユビナデ。内面はナデ。	1～3mm 砂粒含 石英	(内)に ぶい橙 (外)浅 黄橙	底面に黒斑あり
8	弥生土器壺(?)	覆土	底径5.8	底面は平底を呈す。体部は直線的に大きく外方にたちあがる。	内外面ともナデ。	1mm以下 の微砂粒 含 チャート	(内)浅 黄橙 (外)に ぶい橙	

番号	器種	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	特徴・備考
9	石鏃	覆土	3.4	1.3	0.6	2.5	完存	サヌカイト	凸基無茎鏃
10	石鏃	東西ベルト	(2.1)	(1.2)	(0.3)	(0.6)	基部欠損	サヌカイト	表面中央に擦痕あり
11	石鏃	覆土	(2.0)	(2.0)	(0.4)	(2.4)	先端部 基部欠損	サヌカイト	
12	石鏃	床面	(5.8)	1.3	0.6	3.62	先端欠損	サヌカイト	凸基有茎鏃
13	石鏃	壁面	4.6	3.1	0.5	5.9	完存	サヌカイト	平基有茎鏃
14	石鏃	覆土	(2.9)	1.4	0.5	(2.1)	先端部欠損	サヌカイト	凸基無茎鏃
15	石錐	覆土	(2.7)	1.5	0.35	(1.15)	錐部欠損	サヌカイト	錐部厚0.2cm
16	磨石(?)	覆土	8.2	2.5	1.5	50.7	完存	黒色片岩	表裏両面に磨面および擦痕あり
17	台石	床面	34.7	28.4	11.2	17250	完存	砂岩	表面の上半部に弱い砥面、筋状の敲打痕多数のこす。裏面の一部に弱い砥面。

()は残存長

番号	器種	地点 層位	法量・形態の特徴・技法・その他備考					
18	鉄鏃	覆土	残存長3.4cm	幅1.4cm	厚さ0.5cm	刀子基部との見方もできる。		

第3表 天神山遺跡 SK1008出土遺物観察表

番号	器種	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	特徴・備考
19	石庖丁	覆土	(4.1)	(5.2)	(0.5)	(15.7)	半分欠損	紅簾石片岩	端部抉りあり。
20	石庖丁	覆土	(4.4)	(3.8)	(0.7)	(15.3)	〃	石英片岩	端部抉りなし。

()は残存長

第4表 天神山遺跡 ST1001出土遺物観察表

番号	器種	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	特徴・備考
21	石庖丁	覆土	11.1	38	0.8	37.9	完存	雲母片岩	両端抉りなし

第5表 天神山遺跡 S T 1004出土遺物観察表

番号	器種	層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
22	弥生土器 広口壺	覆土	口径13.0	やや開き気味の頸部からゆるやかに に屈曲して外反する 口縁部をもつ 口縁端部は平坦におさめる	口縁部内外面にヨコナデ 頸部外面はタテハケのちヨコナデ。 内面はタテ方向ナデ。	2mm大砂粒 含 結晶片岩	(内)暗 灰黄色 (外)明 赤褐色	
23	弥生土器 甕	覆土	口径16.9	体部から「く」の字状に屈曲する。 口縁部はわずかに上下に拡張し端 面には2条の擬凹線を施す。	口縁部内外面はヨコナデ。 体部内面はヨコヘラケズリが観察で きる。	2mm以下 砂粒多量 含 結晶片岩 絹雲母	(内)に ぶい黄橙 (外)に ぶい黄	
24	弥生土器 壺	覆土	底径8.6	底面は平底を呈す、体部は直線的 に外方にたちあがる。	体部外面底面はナデ。 内面一部ユビオサエ痕をのこす。	2~3mm 以下砂粒 極多含 石英 チャート	橙	黒斑あり

番号	器種	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	特徴・備考
25	石鏃	覆土	5.1	2.3	0.4	3.2	完存	サヌカイト	未製品(?) 平基無茎鏃
26	スクレイ パー	覆土	(5.5)	6	0.8	(27.6)	一部欠損	サヌカイト	下辺に軽い両面調整による刃部形成
27	台石	覆土	(15.3)	(15.6)	(10.4)	(1,950)	欠損	砂岩	角を中心に敲打痕、一部に筋状の敲打痕も観察できる。

() は残存長

第6表 天神山遺跡 S K 1001出土遺物観察表

番号	器種	層位	法量・形態の特徴・技法・その他備考					
28	丸瓦 玉縁	覆土	2~3mm砂粒含(泥岩・石英) (内)黒褐色(外)黄橙。丸瓦の玉縁で布目痕残存、外面ハケ調整が行われている。内、外面とも左半部分にすずの付着あり。					

番号	器種	地点 層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
29	施釉陶器 皿	覆土	口径10.6 底径3.8 器高2.3	口縁端部から内面に施釉 内面には嵌入がみられる わずかに上げ底を呈し体部口縁部 は内彎して大きく外方にたちあがる。	ロクロナデ 内面ハリササエ痕が1ヶ所確認でき る。	ほとんど 砂粒含ま ず	(釉) 浅黄色 (釉以外) 淡黄色	京焼系(?) 燈明皿 外面煤付着
30	陶器 挿鉢	覆土	口径31.8 底径17 器高10.4	底面はわずかに上り底を呈す 体部はやや内彎気味にたちあがり 口縁部は外方に大きく拡張する。 口縁部に2条凹線がめぐらされて いる 体部内面は13~14条単位の櫛描条 線が全体的に施され内底面は8~9 条単位で放射状に施される。	外面は強いヨコナデで成形されて いる。	1~2mm の石英粒	内外 暗赤褐色	明石焼(?)

第7表 天神山遺跡 包含層等出土遺物観察表

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	特徴・備考
31	石鏃	1区表探	(1.6)	2.25	0.35	(0.91)	先端欠損	サヌカイト	凹基無茎鏃
32	石鏃	3区B	(0.9)	1.4	(0.2)	(0.25)	先端欠損	サヌカイト	凹基無茎鏃
33	打製石斧	1区A	10.1	5.6	1.3	83.30	完存	紅簾石片岩	
34	磨石	1区B	(6.7)	(7.8)	(2.6)	(152)	欠損品	石英班岩	ほぼ全面磨面 上面と左側面に擦痕が見受けられる 一部に自然面をのこす

() は残存長

番号	器種	地点 層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
35	須恵器 器台	1区		外反する口縁部端部は上下にやや 拡張し上端面は凹面に仕上げ下 端面は平坦に仕上げる。 口縁部外端面および頸部外面には 櫛描波状文を施す。	内・外面ロクロナデ。	密 砂粒なし	灰白	
36	施釉陶器 輪花皿	3区	口径7.4 底径4.4 脚台部径3.6 器高 1.8	体部内面に1条の浅い沈線がみと められる 底部・低い高台付き。 体部は内彎してたちあがりゆるや かに外反する口縁部をもつ。口縁 部は波状をなす。	高台裾をのぞき施釉されている。 口縁部は棒状工具によるおさえによ る。 内外面ともに基本的にロクロナデ。 高台は削り出しか(?)	1mm弱 微砂粒 釉厚0.3mm	(釉) 浅黄 色 (地) 淡黄 色	瀬戸焼(?)
37	陶器 擂鉢	3区B	底径14.0	底辺から体部はわずかに内彎気味 に外方にたちあがる。内面の櫛描 条線は5条まで確認できる。	外面ナデ・ユビオサエ 内面ヨコナデ	若干5mm 砂粒含 石英粒	(内) 暗緑 灰色 (外) 明青 灰色	備前焼(?)

番号	器種	地点 層位	法量・形態の特徴・技法・その他						
38	土錘	3区B	長さ4cm 最大径1.2孔径0.4重さ6.43 1~2mm大の砂岩粒 片岩粒多く含む。浅黄橙色 紡錘形の管状土錘						
39	銅銭	3区B	径2.4cm「寛永通宝」						

第8表 青谷遺跡遺構一覧表

遺構名	検出地点	規模 (cm)			平面形	出土遺物	時期	特徴・備考	挿図番号
		長軸	短軸	深さ					
S K 1001	1区 C (I・J-14)	102	65	30	隅丸方形	青磁 陶器	中近世	炭・焼土たまり	41
S K 1002	1区 C (K-17)	200	160	25	不整形	須恵器	古代(?)		40
S K 1003	1区 C (K-17)	155	80	19	小判形		不明		
S K 1004	1区 C (H-6)	103	68	15	隅丸方形	炭化物	中近世(?)		
S K 1005	1区 A (M-15)	112	66	15	方形		不明		
S K 1006	1区 B (K-12)	108	57	12	隅丸方形	縄文(?) 土器 サヌカイト	縄文(?)		
S K 1007	1区 A (M-12)	165	64	24	方形		不明		
S K 1008	1区 B (K-11)	148	80	10	隅丸方形		不明		
S K 1009	1区 B (J-10)	138	42	20	小判形		不明		
S K 1010	1区 B (J-9)	119	75	18	不整形		不明		
S K 1011	1区 B (J-9)	100	41	27	楕円形		不明		
S K 1012	1区 B (J-8)	66	56	11	円形		不明		
S K 1013	1区 A (M-16)	186	(108)	10	不整形		不明		
S K 1014	1区 D (G-13)	60	52	12	不整形	炭化物・焼土	中近世(?)	炭・焼土たまり	
S K 1015	1区 D (F-12)	(44)	(80)	14	不整形		不明		
S K 1016	1区 D (F-11・12)	132	82	10	方形		不明		
S K 1017	1区 D (G-11)	108	64	6	楕円形	縄文土器	縄文(?)		
S K 1018	1区 D (F-10)	(62)	102	16	方形		不明		
S K 1019	7区 A (AO-43)	102	68	16	不整形		不明		
S K 1020	7区 B (AN-44)	126	50	16	方形	サヌカイト片	弥生		33
S K 1021	7区 B (AM43-44)	190	80	40	小判形		弥生(?)		
S K 1022	7区 B (AM-44)	(90)	(40)	14	小判形		不明		
S K 1023	7区 A (AO-42)	78	60	24	隅丸方形		不明		
S K 1024	7区 A (AN-41)	86	60	16	不整形	炭化物	不明	炭・焼土たまり	
S K 1025	7区 B (AM-42)	120	100	16	不整形		不明		
S K 1026	7区 B (AL-40)	82	74	14	円形	弥生土器・炭化物	中近世(?)	炭・焼土たまり	
S K 1027	7区 B (AL・AM41)	210	180	24	不整形	石鏃	縄文(?)		28, 29
S K 1028	7区 B (AL-40)	140	108	30	楕円形	サヌカイト片	弥生(?)		
S K 1029	2区 (S-9)	(40)	30	25	不整形	弥生土器	弥生		30, 31
S K 1030	2区 (T-12)	88	60	8	不整形		弥生		
S K 1031	2区 (T-12)	100	54	18	不整形		弥生		
S K 1032	2区 (T-11)	100	68	26	方形		弥生		
S K 1033	2区 (S-11)	110	52	12	楕円形		弥生		
S K 1034	2区 (T-10)	68	24	18	小判形	弥生土器	弥生		
S K 1035	2区 (R-10)	134	46	16	小判形		弥生		
S K 1036	2区 (S-10)	112	86	10	不整形		弥生		
S K 1037	2区 (S-9)	(58)	(14)	(16)	不整形		弥生		
S K 1038	7区 C (AM-38)	140	125	54	不整形	弥生土器 焼土 炭化物	弥生		32

遺構名	検出地点	規模 (cm)			平面形	出土遺物	時期	特徴・備考	挿図番号
		長軸	短軸	深さ					
S K 1039	7区C (A L-40)	(72)	(46)	(18)	隅丸方形		不明		
S K 1040	7区D (A K-42)	174	62	30	方形	弥生土器片	弥生		34, 35
S K 1041	7区D (A J-42)	94	60	13	不整形	炭化物	中近世	炭 焼土たまり	
S K 1043	1区A B (J-10)	64	29	28	楕円形		不明		

遺構名	検出地点	規模 (cm)			断面形	出土遺物	時期	特徴・備考	挿図番号
		長さ	幅	深さ					
S D 1001	1区D (F-9~11)	1120	100 (最大) 28 (最短)	12 (最深) 6	U字形	陶器・縄文土器	中近世 (?)		
S D 1002	7区B (A L-44)	146	25~38	6~8	U字形		不明		
S D 1003	7区A (A D-42)	250	26~34	4~6	U字形		不明		
S D 1004	2区 (U-11)	334	90	50~13	V字形	弥生土器 炭化物	弥生		36
S D 1005	2区 (U-11)	222	26	7	U字形	弥生土器	弥生		
S D 1006	2区 (T-10~11)	470	45	18~27	逆台形	弥生土器 炭化物	弥生		37
S D 1007	2区 (T-9~10)	776	42	9~18	逆台形		弥生		
S R 1001	1区C (G・F-3)	-	85-115	42~75	不整形		不明		

遺構名	検出地点	規模 (cm)			平面形	出土遺物	時期	特徴・備考	挿図番号
		長軸	短軸	深さ					
S P 1001	1区C (H-11)	25	20	40	円形		不明	柵列 2	
S P 1002	1区C (I-10)	12	12	15	"		"	柵列 2	
S P 1003	1区C (I-10)	20	20	17	"	弥生(?) 土器片	弥生(?)	柵列 2	
S P 1004	1区C (I-10)	15	15	18	"		不明	柵列 2	
S P 1006	1区C (H-8)	12	12	10	"		"	(S A 1001)	
S P 1007	"	21	21	26	"		"		
S P 1008	"	18	18	11	"		"	(S A 1001)	
S P 1009	1区C (G-7)	15	15	20	"		"	(S A 1001)	
S P 1010	1区C (G-4)	23	23	13	"		"		
S P 1011	"	20	20	12	"		"		
S P 1012	"	65	30	13	楕円形	弥生土器片	弥生(?)		
S P 1013	1区C (I-11)	15	10	25	"		不明	柵列 3	
S P 1014	1区C (I-10)	23	23	12	円形		"		
S P 1015	1区C (G-4)	40	24	10	楕円形		"		
S P 1016	1区 (I-10)	20	20	10	円形		"	柵列 3	
S P 1017	"	12	12	10	"		"	柵列 3	
S P 1018	1区 (J-19)	17	17	15	"		"	柵列 2	
S P 1020	1区A B (M-17)	23	11	27	"		"		
S P 1021	1区A B (M-16)	22	19	15	"		"	柵列 1	
S P 1022	"	22	21	15	"		"		
S P 1023	"	18	18	20	"		"		

() は残存長

遺構名	検出地点	規模 (cm)			平面形	出土遺物	時期	特徴・備考	挿図番号
		長軸	短軸	深さ					
S P 1025	1区 A B (L-16)	17	16	21	円形		不明		
S P 1026	"	24	21	13	"		"		
S P 1027	1区 A B (M-16)	20	17	14	"		"		
S P 1028	"	20	19	14	"		"		
S P 1029	1区 A B (L-16)	18	18	10	"		"		
S P 1031	1区 A B (L-17)	24	18	8	"		"		
S P 1032	"	28	24	16	"		"		
S P 1036	1区 A B (L-16)	26	20	11	"		"		
S P 1038	1区 A B (N-16)	21	19	28	"		"	柵列 1	
S P 1039	"	20	18	12	"		"		
S P 1041	"	21	19	11	"		"	柵列 1	
S P 1042	"	22	20	11	"		"	柵列 1	
S P 1043	"	27	24	10	"		"	柵列 1	
S P 1047	1区 A B (N-15)	19	18	10	"		"		
S P 1056	1区 A B (N-14)	13	12	14	"		"		
S P 1058	"	14	13	13	楕円形		"		
S P 1059	1区 A B (N-14)	32	25	15	楕円形		"		
S P 1060	"	16	13	14	"		"		
S P 1061	"	34	28	10	円形		"		
S P 1062	"	28	24	17	"		"		
S P 1067	1区 A B (M-14)	24	17	12	"		"		
S P 1068	1区 A B (M-13)	22	20	23	"		"		
S P 1069	"	20	20	17	"		"		
S P 1070	"	28	20	23	楕円形		"		
S P 1072	"	21	17	13	円形		"		
S P 1073	"	18	17	12	"		"		
S P 1074	"	17	13	11	"		"		
S P 1076	"	26	23	10	"		"		
S P 1077	"	36	21	19	楕円形		"		
S P 1078	1区 A B (M-11)	24	19	11	円形		"		
S P 1079	1区 A B (L-11)	22	20	15	"		"		
S P 1080	"	18	17	10	"		"		
S P 1082	1区 A B (L-14)	29	28	38	"		"		
S P 1084	1区 A B (L-13)	18	18	9	"		"		
S P 1087	1区 A B (K-12)	25	18	21	楕円形		"		
S P 1089	"	18	17	13	円形		"		
S P 1090	"	18	17	12	"		"		
S P 1091	1区 A B (K-11)	18	17	10	"		"		
S P 1092	1区 A B (J-11)	20	19	21	"		"		
S P 1094	1区 A B (K-9)	19	13	11	"		"		
S P 1096	"	17	16	14	"		"		
S P 1097	1区 A B (J-9)	19	17	18	"		"	柵列 2	

() は残存長

遺構名	検出地点	規模 (cm)			平面形	出土遺物	時期	特徴・備考	挿図番号
		長軸	短軸	深さ					
S P 1099	1区A B (K-8)	18	16	16	円形		不明	棚列 2	
S P 1100	1区A B (J-8)	19	18	11	"		"		
S P 1101	"	15	145	10	"		"		
S P 1102	"	20	19	17	"		"		
S P 1103	"	15	15	13	"		"		
S P 1105	1区A B (K-11)	39	16	32	隅丸方形	土師質土器	中近世(?)		
S P 1106	1区A B (J-9)	18.5	18	21	円形		不明	棚列 2	
S P 1107	1区D (G-12)	24	24	22	"		"		
S P 1109	"	18	18	18	"		"		
S P 1110	1区D (F-12)	26	18	13	楕円形		"		
S P 1111	"	20	24	10	不整形		"		
S P 1113	1区D (F-10)	20	20	26	円形		不明		
S P 1114	"	20	20	23	楕円形		"		
S P 1115	1区D (F-11)	20	20	15	円形		"		
S P 1116	1区D (F-10)	20	20	16	"		"		
S P 1117	"	16	16	13	"	炭化物あり	"		
S P 1118	"	16	16	11	"		"		
S P 1119	"	28	22	21	楕円形	弥生土器(?)	弥生(?)		
S P 1120	"	18	18	32	円形		不明		
S P 1122	7区A B(A O-43)	24	24	27	"		"		
S P 1123	"	26	26	21	"		"		
S P 1124	7区A B(A M-44)	22	22	14	楕円形		"		
S P 1125	"	25	19	12	円形		"		
S P 1126	7区A B(A O-42)	17	14	14	"		"		
S P 1127	"	20	18	18	"		"		
S P 1129	7区A B(A N-42)	20	18	16	"		"		
S P 1132	2区(T-12)	33	33	11	"		弥生(?)		
S P 1133	2区(S-11)	28	20	24	"		"		
S P 1134	2区(T-10)	34	14	11	楕円形		"		
S P 1135	"	21	20	10	円形		"		
S P 1136	7区C(A C-38)	22	17	14	"		不明		
S P 1137	"	16	15	11	"		"		
S P 1137	"	16	15	11	"		"		
S P 1138	7区C(A C-39)	38	31	18	"		"		
S P 1140	"	33	29	17	"		"		
S P 1141	7区D(A K-44)	22	18	13	"		"		
S P 1142	7区D(A J-44)	38	16	14	楕円形		"		
S P 1143	"	22	20	13	円形		"	(S A 1002)	
S P 1144	"	16	13	8	"		"	(S A 1002)	
S P 1145	"	59	25	26	不整形		"		
S P 1146	"	38	21	21	"		"	(S A 1002)	
S P 1148	"	25	21	19	円形		"		

遺構名	出土地点	規模 (cm)			平面形	出土遺物	時期	特徴・備考	挿図番号
		長軸	短軸	深さ					
S P 1149	7区D (A J - 44)	16	13	15	円形		"	(S A 1002)	
S P 1151	"	21	16	16	"		"		
S P 1152	7区D (A J - 43)	31	19	35	楕円形		"		
S P 1154	"	22	19	17	円形		"		
S P 1156	7区D (A J - 42)	25	24	19	"		"		
S P 1157	"	30	16	13	不整形		"		
S P 1159	7区D (A J - 41)	22	17	16	円形		不明		
S P 1160	"	22	19	16	"		"		
S P 1161	"	18	18	12	"		"		
S P 1162	"	19	17	54	"		"		
S P 1163	6区 (A H - 30)	18	18	18	"		"		
S P 1164	6区 (A H - 29)	16	16	14	"		"		

遺構名	出土地点	規模 (cm)			平面形	出土遺物	時期	特徴・備考	挿図番号
		長軸	短軸	深さ					
S X 1003	7区B (A L - 42)	260	134	16	不整形	サヌカイト片	不明		
S X 1004	2区 (S T ~ 10 ~ 11)	580	317	36	不整形形状	弥生土器・石斧等	弥生		38, 39
S X 1005	2区 (U - 11)	(266)	(168)	25	隅丸方形	弥生土器	弥生		

() は残存長

第9表 青谷遺跡 S K 1027出土遺物観察表

番号	器種	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	特徴・備考
1	石鏃	覆土	3.1	1.5	0.45	1.19 g	完存	サヌカイト	凹基無茎鏃

第10表 青谷遺跡 S K 1029出土遺物観察表

番号	器種	層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
2	弥生土器壺 (?)	覆土	底径8.6	・底面はわずかに上げ底。 体部は外彎気味に外方へのびる。	内面ユビオサエ・ユビナデ 外面ヨコ方向ナデ	2~3mm大砂粒含 石英 砂岩 結晶片岩	(内) に ぶい橙 (外) 橙 色	
3	弥生土器壺 (?)	覆土	底径8.1	・底面はわずかに上げ底を呈す。 体部は内彎気味に外方に立ち上がる	体部外面はタテハケ。一部ナデにより消されている。 内部はユビオサエ・ナデ 底面板削り	2~3mm大砂粒含 石英 砂岩 結晶片岩	橙色	

第11表 青谷遺跡 S K 1040出土遺物観察表

番号	器種	層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
4	弥生土器甕	覆土	底径5.7	・底面はわずかに上げ底を呈す。 体部は内彎気味に外方にたちあがる。	体部外面タテ方向ナデ 底部外面ユビオサエのちヨコナデ 底面・内部はナデ。	1mm大砂粒含 石英 砂岩	にぶい褐色	

第12表 青谷遺跡 S X1004出土遺物観察表

番号	器種	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	特徴・備考
5	磨製石斧状 石器	覆土	1.5	0.85	0.3	0.3	完存	蛇紋岩	

第13表 青谷遺跡 遺物包含層等出土遺物観察表

番号	器種	地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	特徴・備考
6	ナイフ形石器	1区A N-15Gr	6.7	2.1	0.8	11.22	完存	サヌカイト	縦長剥片を利用。彫器の可能性あり。
7	横長剥片	7区A	1.8	4.1	0.55	3.44	完存	サヌカイト	
8	横長剥片	7区A	2.2	4.2	0.7	4.26	完存	チャート	灰黄褐色 粘土層出土
9	石鏃	1区D	1.65	1.9	0.25	0.45	完存	サヌカイト	凹基無茎。いわゆる鏃形鏃。 暗褐色砂礫層出土。
10	石鏃	7区A	2.1	1.5	0.3	0.81	完存	チャート	凹基無茎鏃。灰黄褐色粘土層直上
11	石鏃	1区B	(1.1)	(1.5)	(0.35)	(0.62)	先端欠損	チャート	凹基無茎鏃
12	石鏃	7区D	(1.9)	(1.3)	0.3	(0.47)	脚部欠損	サヌカイト	凹基無茎鏃
13	石鏃	7区	(3.1)	(1.8)	0.4	(1.61)	脚部欠損	サヌカイト	凹基無茎鏃
14	石鏃	7区D	(3.4)	1.7	0.45	(2.27)	先端欠損	サヌカイト	平基無茎鏃
15	石鏃	1区B	2.3	1.75	0.3	1.15	完存	サヌカイト	平基無茎鏃
16	石鏃	1区D	(2.0)	(1.3)	0.35	(0.52)	先端欠損	サヌカイト	凹基無茎鏃
17	石鏃	1区	(2.8)	1.8	0.5	(2.74)	先端欠損	サヌカイト	平基無茎鏃
18	石鏃	2区	(1.9)	(1.45)	0.3	(0.72)	先端脚欠損	サヌカイト	凹基無茎鏃
19	石鏃	2区	(2.6)	(1.5)	0.45	(1.3)	脚部欠損	サヌカイト	凹基無茎鏃。側縁中央に抉りあり
20	剥片	1区B	2.6	1.9	0.6	3.16	完存	サヌカイト	下辺と左辺に念入りな調整痕、石鏃の未製品(?)
21	楔形石器	1区B	2.4	3.2	0.8	(8.02)	一部欠損	サヌカイト	下部をのぞき裁断面、下部は両極打法による
22	スクレイパー	7区A	3.1	3.1	0.75	5.76	完存	サヌカイト	主として片面調整による刃部形成
23	スクレイパー	1区D	(4.2)	3.65	0.75	(11.15)	一部欠損	サヌカイト	下面両面調整による刃部形成
24	石庖丁	7区	11.6	4.3	0.7	59.5	完存	緑色片岩	両端部抉りあり、両極打法による刃部形成
25	石錘	7区A	5.6	4.6	1.55	62	完存	緑色片岩	両端打ち欠き
26	叩石	2区	11.5	7.9	6.5	(750)	一部欠損	石英	白色 一方端に敲打痕あり
27	叩石	2区	9.6	6.2	7.7	650	完存	チャート	黒色 一方端に敲打痕あり

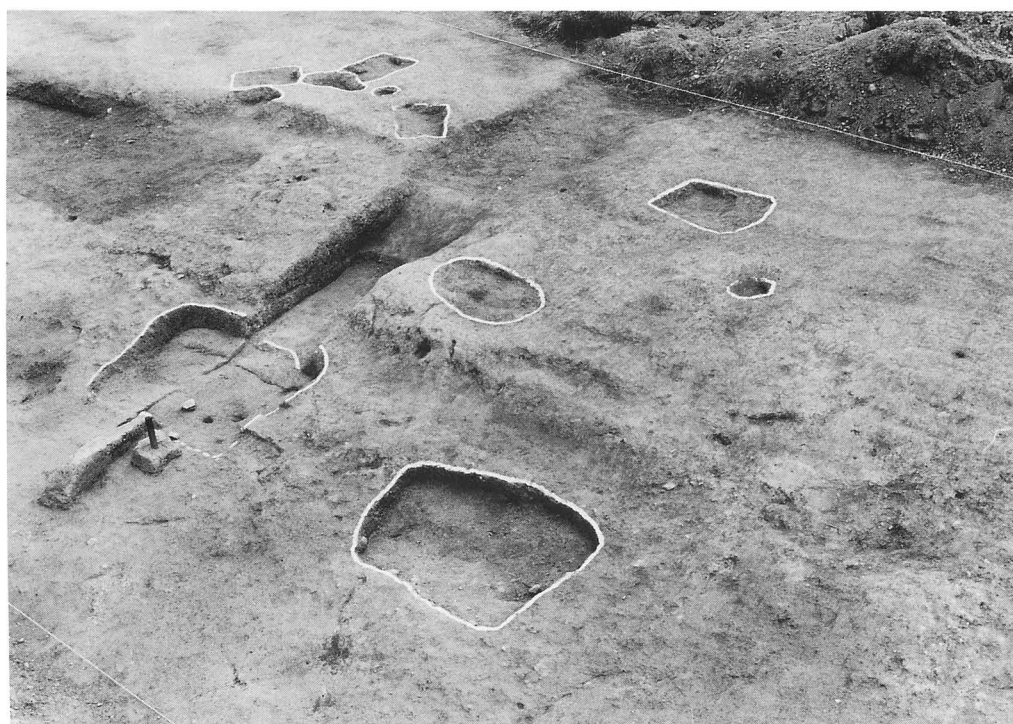
() は残存長

番号	器種	地点	法量 (cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
28	縄文土器 浅鉢	1区D		外傾する頸部(?)外面に1条の沈線、内面には1条の断面三角形の突帯を巡らす	無節(L)の縄文を内外面に施す。	2~3mm大砂粒 結晶片岩 石英	橙色	
29	弥生土器 甕(?)	2区	底径5.0	底面はわずかに上げ底を呈し底部端を外方に拡張する。体部はやや外彎し、たちあがる。	内外面ともナデ。	3mm大砂粒 結晶片岩 砂岩 石英	橙色	
30	弥生土器 甕(?)	2区	底径6.8	底面はわずかに上げ底で、底部端をやや外方に拡張する。底面うすい。体部はやや外彎気味に外方へ立ち上がる。	内外面ともナデ	2~3mm大砂粒 砂岩 石英 結晶片岩	明赤褐色	
31	弥生土器 甕(?)	2区	底径6.8	底面はわずかに上げ底を呈する。底面薄い。底部端やや外方に拡張。体部は外彎し外方へ立ち上がる。	外面ヨコナデ。底面内面はナデ。	2~3mm大砂粒 砂岩 石英 結晶片岩	明褐色	
32	弥生土器 甕(?)	2区	底径8.8	底面は平底を呈す。底部端を外方に拡張する。体部は大きく外彎し外方へ立ち上がる。	外面ナデ 内面ユビオサエ	2~3mm大砂粒 砂岩 石英 結晶片岩	明赤褐色	
33	弥生土器 台付鉢	2区	底径9.8	脚端より接地面をもち、大きく内傾する。脚柱は中実で直立する。受部は深い。	脚端から脚台部外面にヨコナデ 脚柱部外面クテハケ。 底面ケズリ 受部内面ナデ(?)	2~5mm大砂粒多含 石英 砂岩 結晶片岩	橙色	
34	弥生土器 鉢(?)	1区D	底径3.2	底面はやや丸底気味 体部は大きく外彎して外方へたちあがる。	外面丁寧なナデ 底面内面はナデ。	砂粒含む2~3mm大結晶片岩 砂岩 石英	橙色	
35	須恵器 杯	1区D	脚部台径9.0	断面方形の貼付高台をもつ 体部外面はゆるやかに内彎し外方へ立ち上がる	ロクロナデ 高台貼り付け	0.5mm大砂粒含む 石英	灰白色	
36	須恵器 脚台部	1区C	脚部台径12.8	脚端下方にやや拡張 外彎気味に内傾する脚台部	ロクロナデ	0.5mm弱砂粒含む 石英	灰色	
37	瓦質土器 杯	1区B	口径14.4	体部は直線的に外方へ立ち上がる。口縁部外彎気味。端部は尖り気味におさめる。	内外面ともヨコナデのちヘラミガキ	0.3mm砂粒	暗灰色	

番号	器種	地点 層位	法量・形態の特徴・技法・その他備考
38	土錘	8区	長さ(2.7cm) 幅0.9cm 孔径0.3mm 重量184g 0.5mm大砂粒若干含 淡橙色 一部欠損 管状土錘



天神山遺跡 調査前全景（東より）

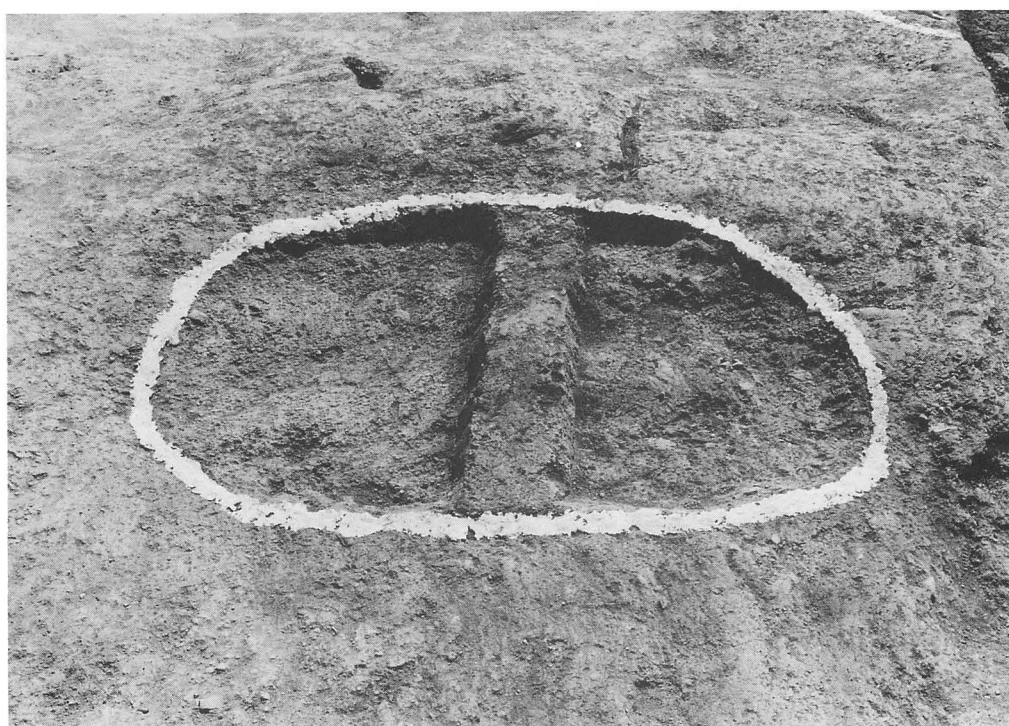


天神山遺跡 第1調査区A地区遺構完掘状況（西より）

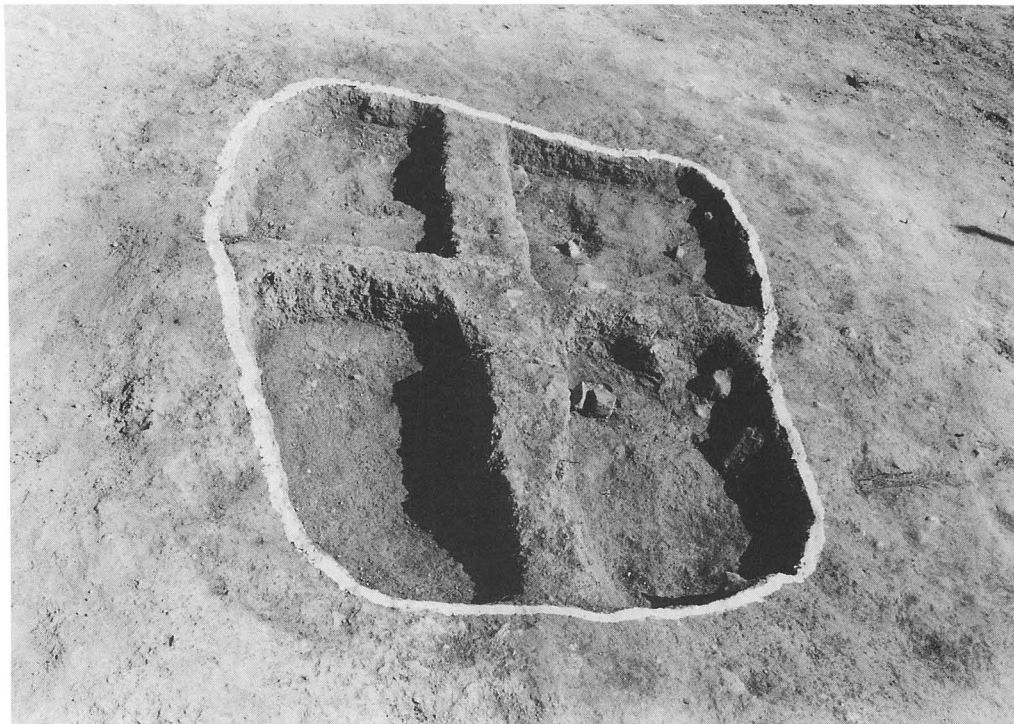
図版 2



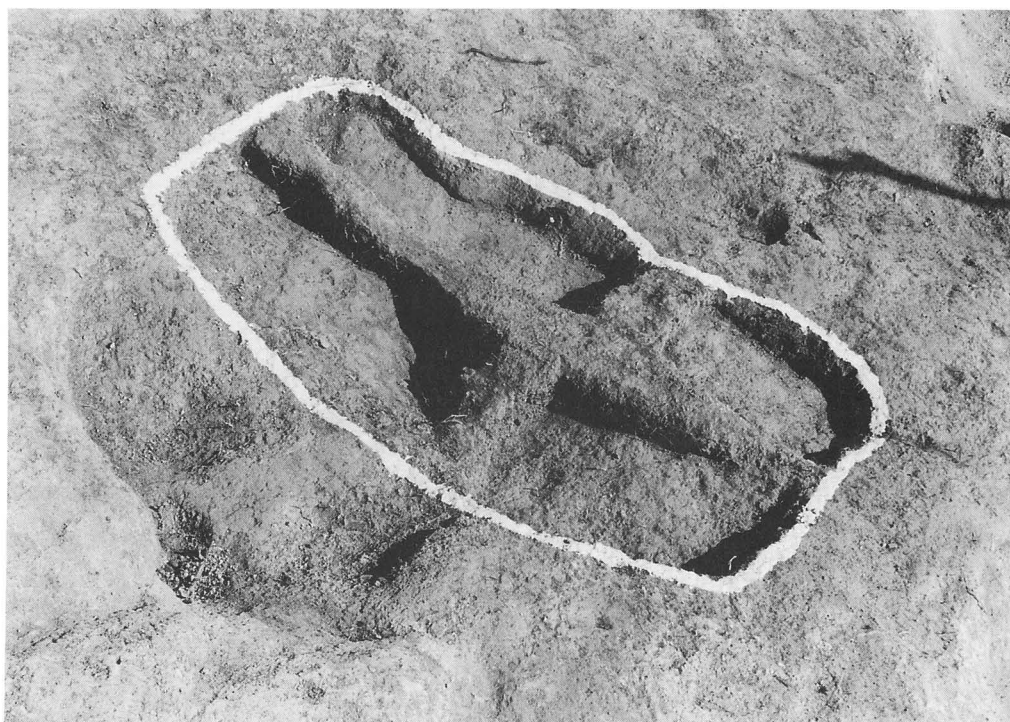
天神山遺跡 S B 1001完掘状況（東より）



天神山遺跡 S K 1003掘り下げ状況（東より）

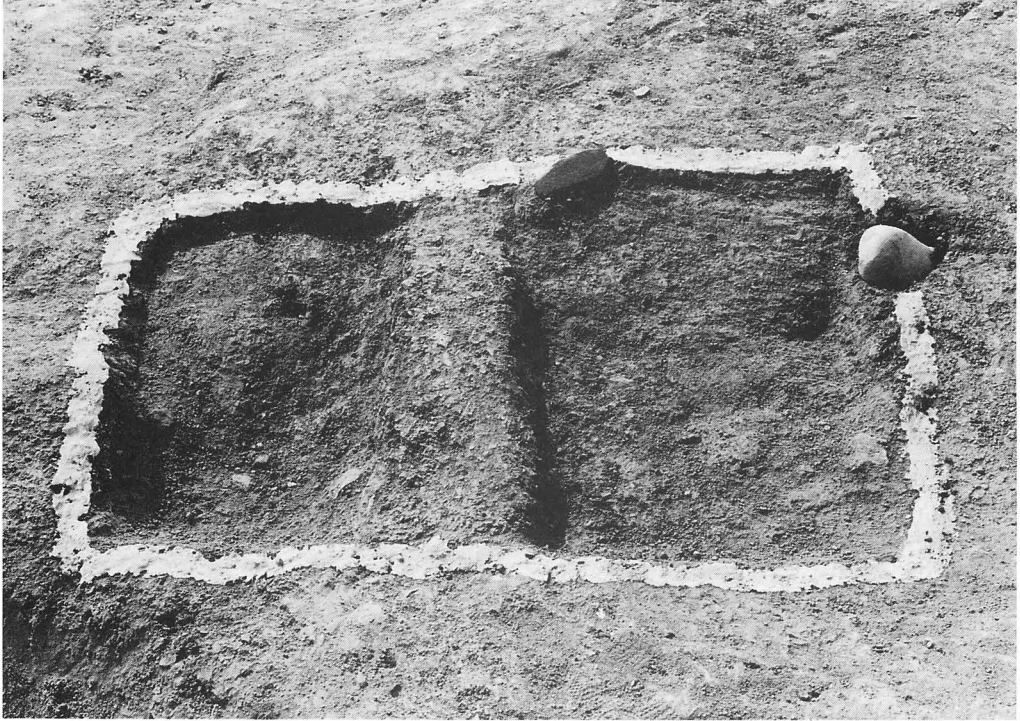


天神山遺跡 SK1007掘り下げ状況（北より）

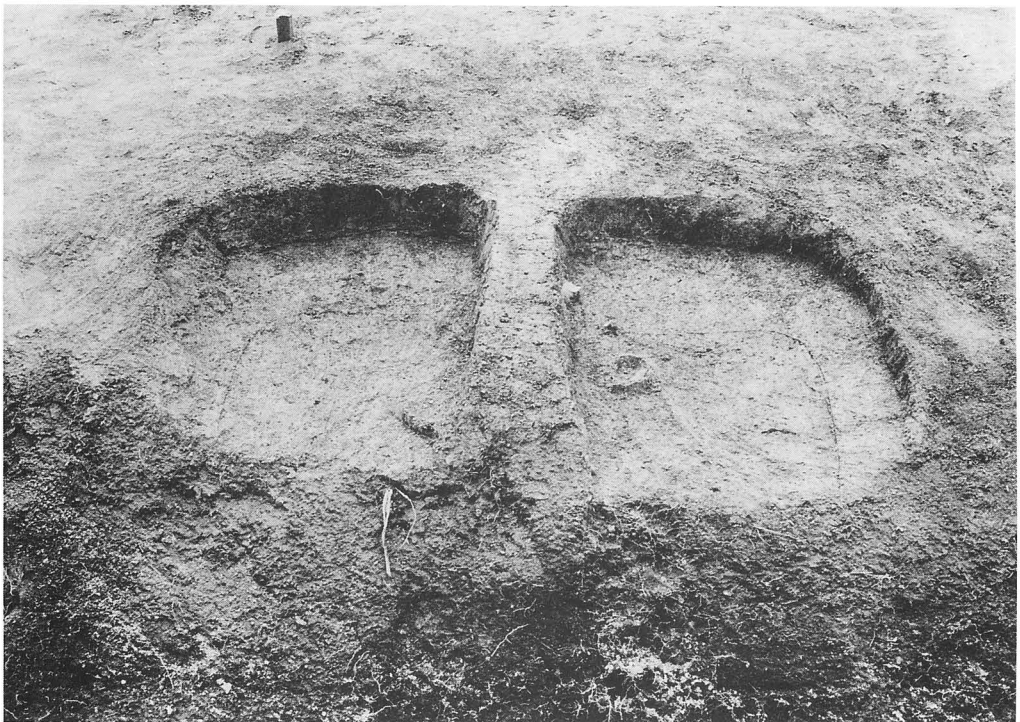


天神山遺跡 SK1008掘り下げ状況（北より）

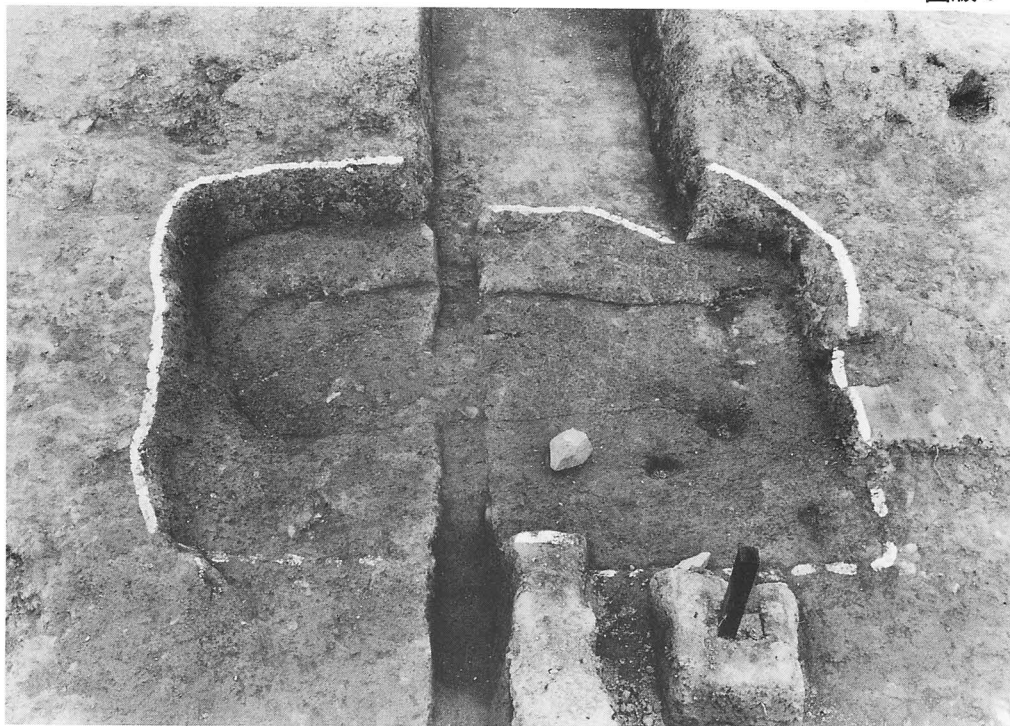
図版 4



天神山遺跡 ST1001掘り下げ状況（東より）



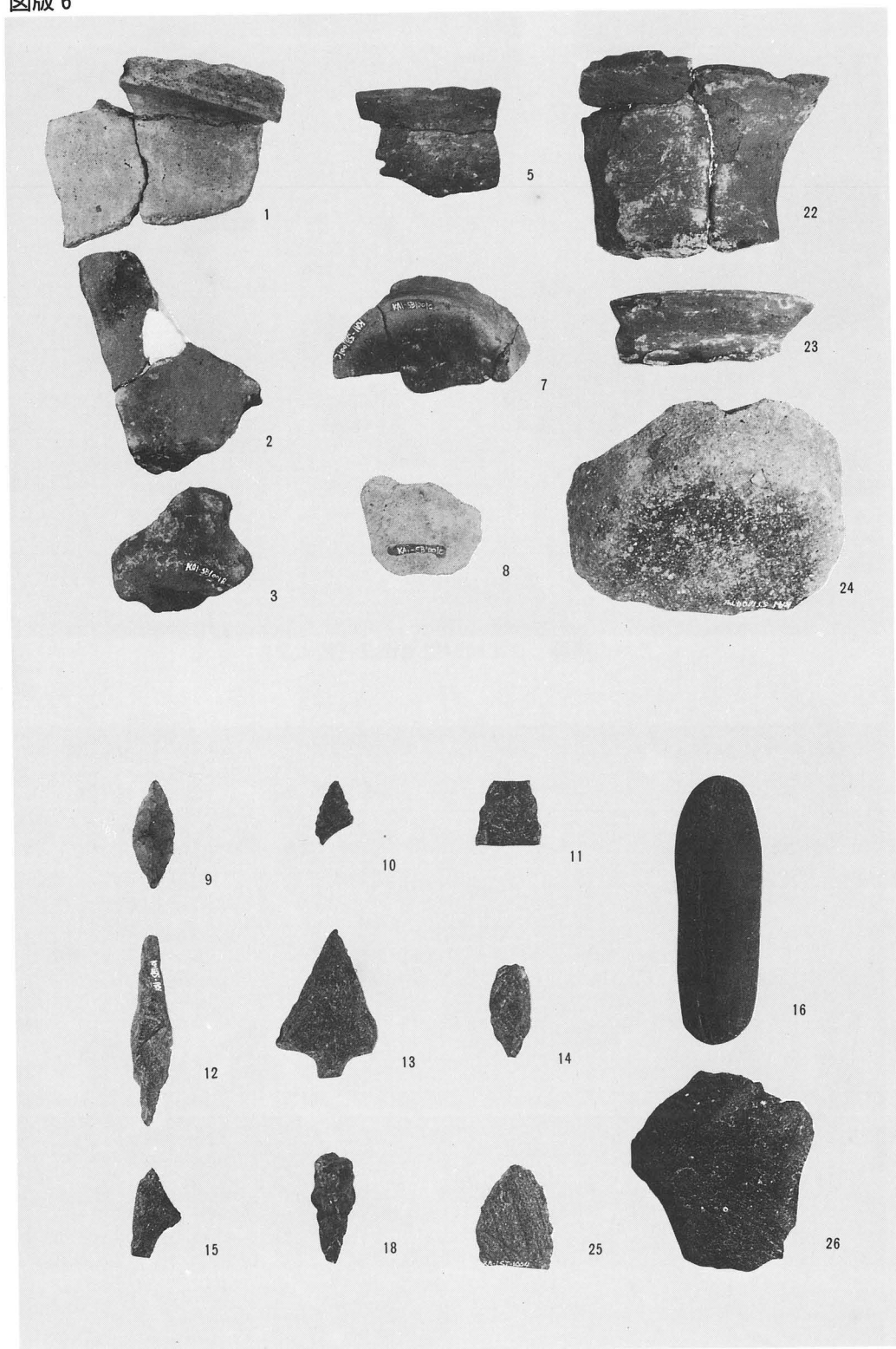
天神山遺跡 ST1005掘り下げ状況（東より）



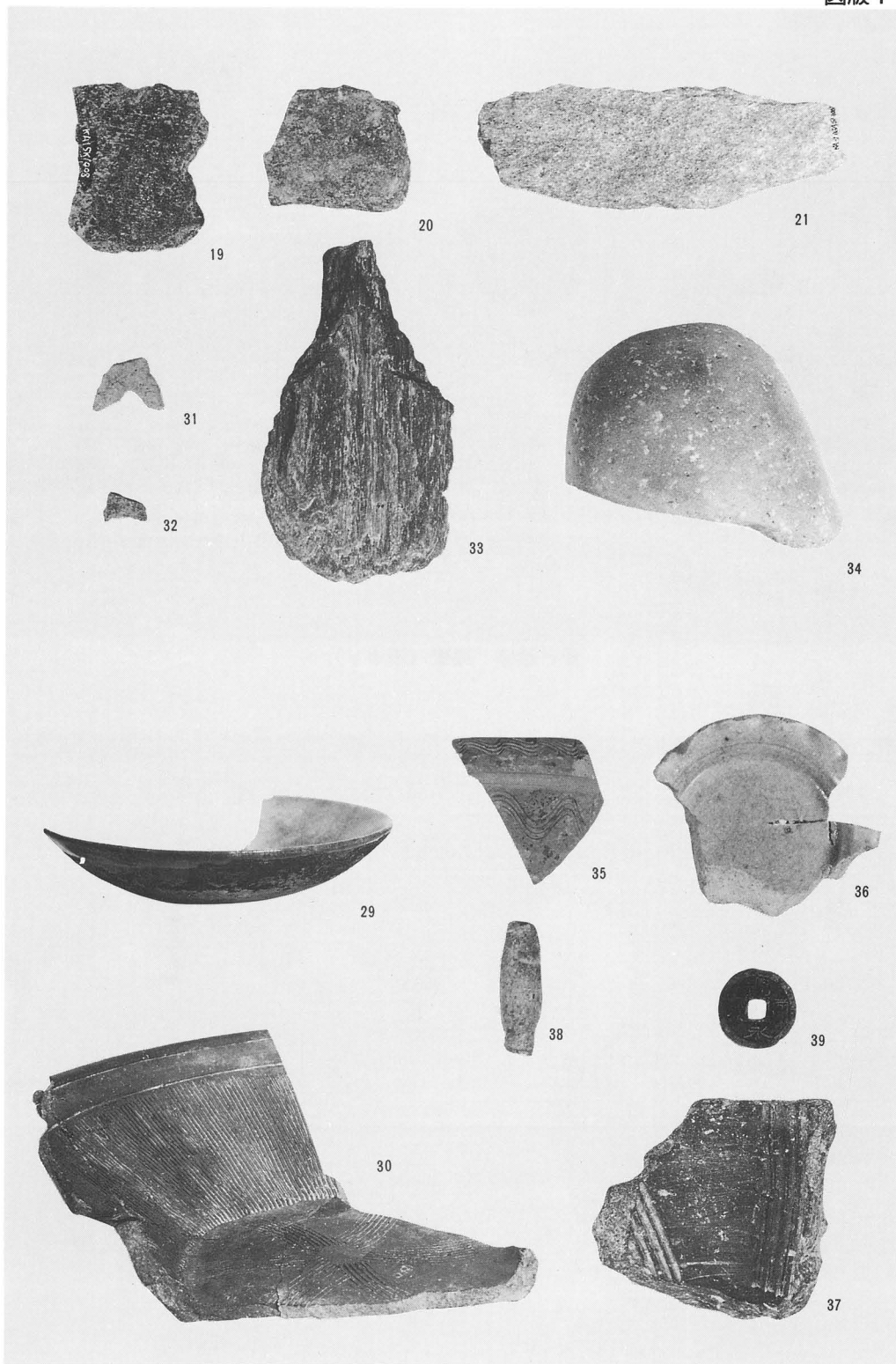
天神山遺跡 S T 1004完掘状況（西より）



天神山遺跡 S T 1004完掘状況（南より）



天神山遺跡 出土遺物 (1)



天神山遺物 出土遺物 (2)



青谷遺跡 遠景（南より）



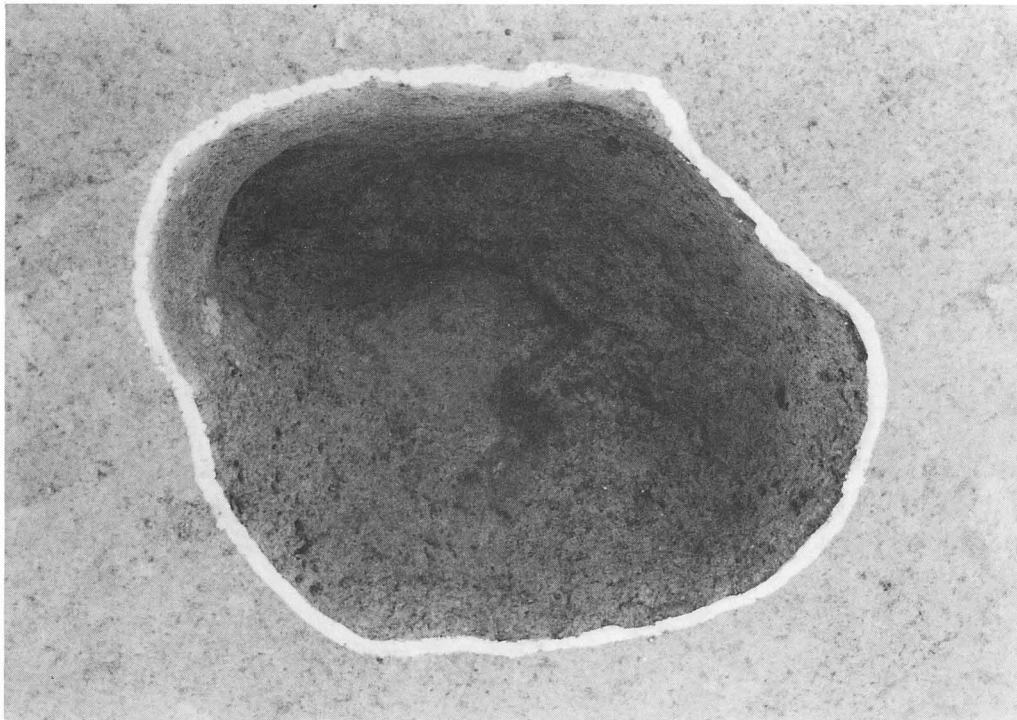
青谷遺跡 第7・8調査区調査前状況（北より）



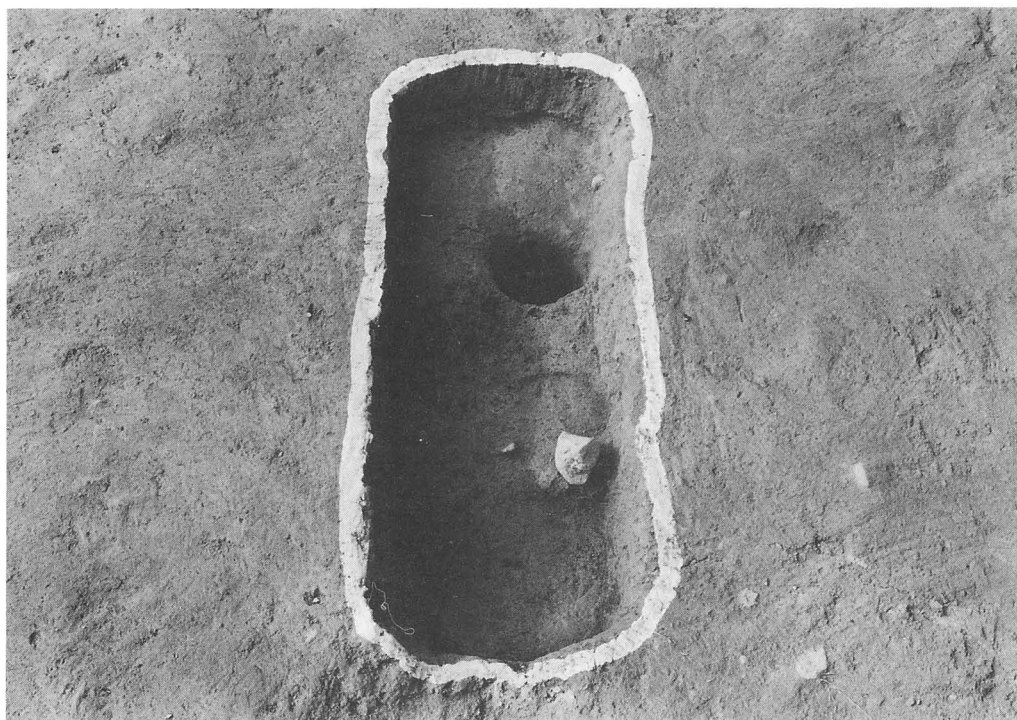
青谷遺跡 SK1027掘り下げ状況（北より）



青谷遺跡 SK1029・SK1037掘り下げ状況（南より）



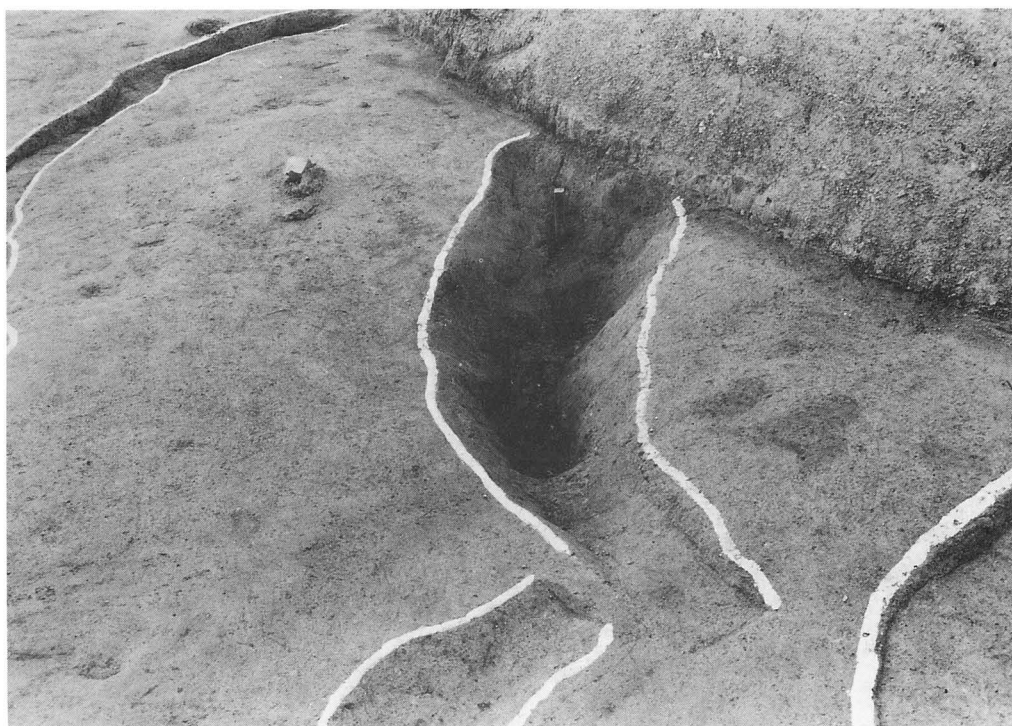
青谷遺跡 SK1038完掘状況（西より）



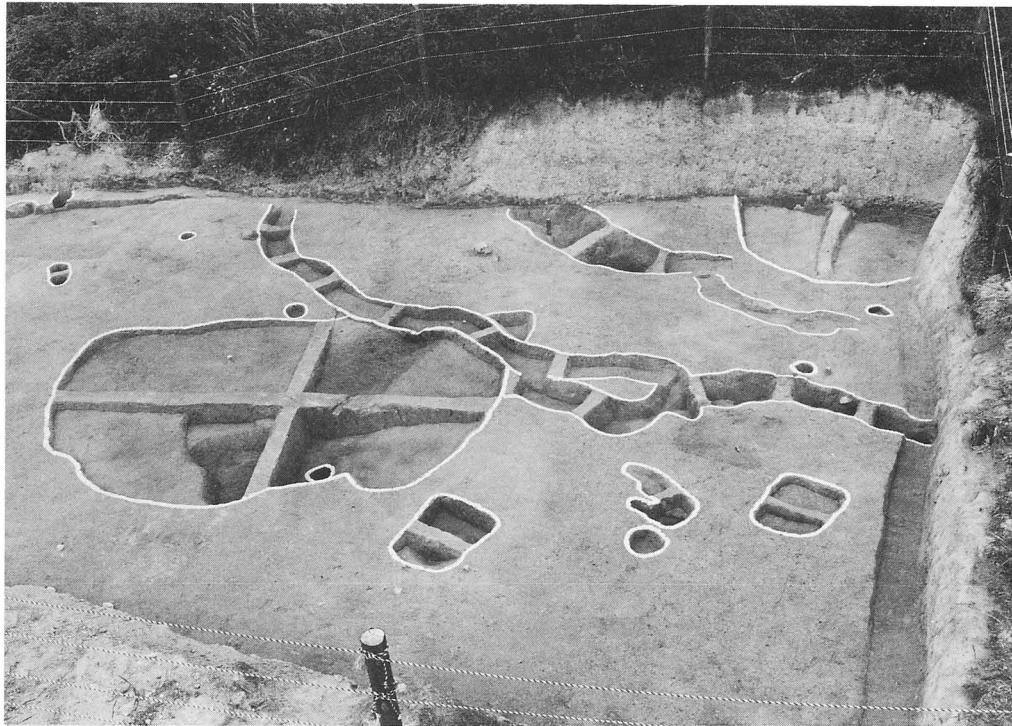
青谷遺跡 SK1020完掘状況（南より）



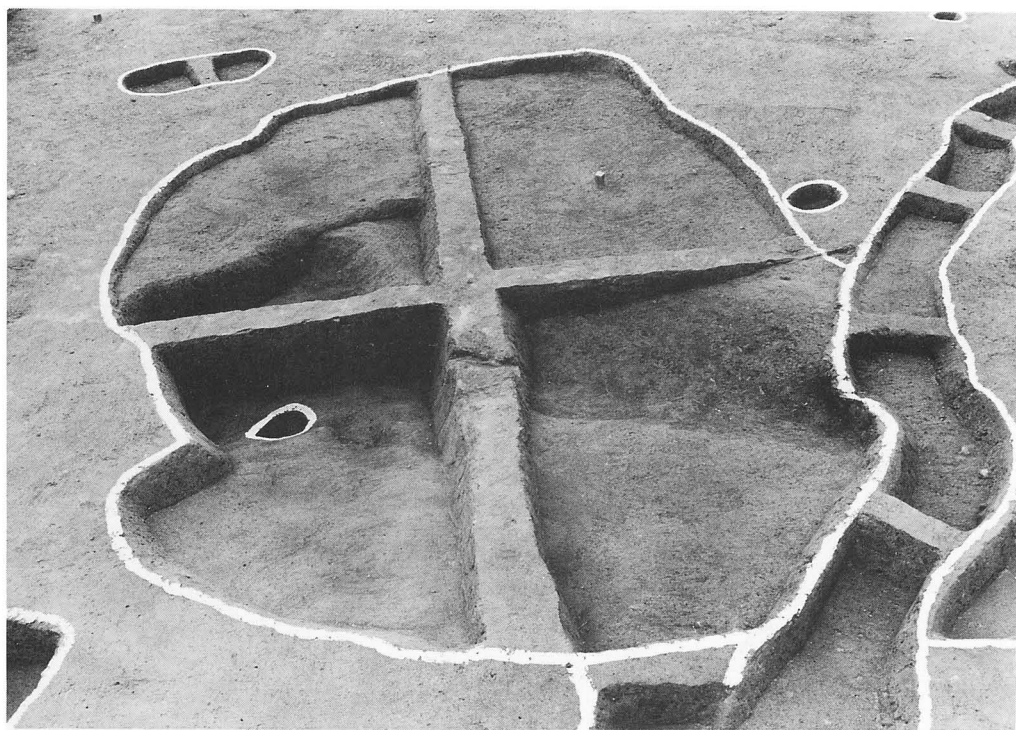
青谷遺跡 SK1040完掘状況（北東より）



青谷遺跡 SD1004完掘状況（東より）



青谷遺跡 第2調査区遺構掘り下げ状況（南より）



青谷遺跡 S X 1004・S D 1007掘り下げ状況（東より）